荒　木　前　遺　跡

第　2　次　調　査

新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書

1996

亀田町教育委員会

序

この調査報告書は、亀田町城所１丁目地内で㈱協同管理センターとみのり不動産㈱が行う宅地造成に伴い、工事の範囲となった箇所の遺跡を記録保存するために、亀田町教育委員会が実施した荒木前遺跡発掘調査の記録であります。

発掘調査期間は、平成６年７月から８月の約２週間にわたって行われました。調査範囲は、平成元年４月から８月にかけて、亀田町農業協同組合が行った宅地造成に伴う発掘調査の範囲に隣接した地域でありました。平成元年の調査では、平安時代中世の多種多様な井戸や遺構・遺物が検出され、亀田砂丘列上の遺跡を理解する大きな手掛かりとなりました。今回は、前回調査の続き範囲として、注目度の高い調査となりました。８世紀を上限とした土器類から、14世紀を下限とした石製品（水輪）が検出されました。また、荒木前遺跡に隣接する中の山遺跡（1981年調査）と貝塚遺跡を含んだ地域は、16世紀まで継続した大規模な都市遺跡ではないかと考えられる端緒もみつかりました。このことは、当町の歴史の解明に大変意義あることがらとして注目されます。

本調査報告書の刊行により調査の成果がさらに多くの方々に、共有されまして、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

発掘調査にあたりご指導を賜った新潟県教育庁文化行政課、現地指揮と執筆にあたられた調査担当者の川上貞雄氏初め調査員各位、発掘作業に従事された方々並びに協同管理センターとみのり不動産には多大なご協力とご支援を賜りました。

ここに関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

平成８年３月

亀田町教育委員会

教育長　田　辺　豊　平

例　　言

1. 本書は、小規模の宅地造成事業に伴って行われることになった、新潟県中蒲原郡亀田町地内における遺跡の緊急発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は開発者の㈱みのり不動産と、亀田町教育委員会との契約に基づくもので、亀田町教育委員会が調査主体となって行われた。
3. 調査は1994年７月20日より８月５日までの間内に都合15日間で実施された。
4. 調査体制は次の通りである。

調査主体	亀田町教育委員会教育長	田辺豊平
所管課	生涯学習課	大西繁夫（課長）
		川嶋岩吉（係長）
		枝並素子（主事）
担当者	川上貞雄（日本考古学協会会員）	
調査員	杉本恵子（県考古学会会員）	
	佐藤友子	
補助員	田中順子（笹神村郷土資料館員）	
参加者	高橋秀隆　高橋シチイ　芳賀イネ子　坂上節	
	佐々木庄一郎　荒川八作　佐々木アヤ子　槙坂スミ子	
	大野律子　佐々木アサ子　村木ヨリ	
協力者	佐々木十三雄　古泉政雄	

5. 発掘調査費は開発者と亀田町教育委員会がそれぞれ分担した。
6. 遺物整理作業から報告書作成に亘る作業は1995年６月30日から７月25日、同年12月１日から12月16日の２次に於ける間の都合36日間のこととなり、場所を北蒲原郡笹神村に所在する笹神村郷土資料館の一室を借用して行った。記して謝意を述べるものである。
7. 現地調査から当報告案発行に至るまで多くの方々に御指導御協力を賜った。厚くお礼申し上げる。

凡　　例

1. 遺物に対する割付番号は一覧表番号、図版番号と一致する。但し遺物番号は一覧表に示した。
2. 図版番号の内☆印の付くものは遺物番号である。
3. 遺物実測図のうち、断面が白抜きのものは土師器、黒塗りは須恵器、網掛けは中世陶器及びカワラケである。
4. 土器のうち黒色処理の施されたものには網を被せて示した。
5. 挿図のうち第３図は確認調査報告書のものを引用させて戴いた。

目　　次

Ⅰ　はじめに
　1　調査に至る経過…… 1
　2　遺跡の立地と歴史的環境…… 2
　3　発掘作業と整理作業の経過…… 4
　　A遺跡確認調査　B本調査　C整理作業
　4　調査地点と土層…… 7
Ⅱ　遺構と遺物
　1　遺　構…… 8
　　A道路と溝　B井戸　C土坑
　　Dピット群
　2　遺　物……18
　　A　土器・陶器の種別について
　　B　遺構出土の遺物
　　C　遺構外出土の遺物
Ⅲ　出土遺物一覧表……34
Ⅳ　ま　と　め……41
　1　出土遺物と遺構
　2　おわりに
Ⅴ　図　版……45

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置概念図…… 1
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 3
第3図　確認調査平面図…… 5
第4図　グリット設定図…… 7
第5図　遺跡全測図…… 9
第6図　第一次調査区との比較…… 8
第7図　道路断面図……10
第8図　1・2号溝断面図……11
第9図　1号井戸平断面図……12
第10図　2号井戸平断面図……13
第11図　3号井戸平断面図……13
第12図　4号井戸平断面図……14
第13図　5号井戸平断面図……14
第14図　6号井戸平断面図……14
第15図　7号井戸平断面図……15
第16図　1号土坑平断面図……16
第17図　2号土坑平断面図……17
第18図　3号土坑平断面図……17
第19図　4号土坑平断面図……17
第20図　5号土坑平断面図……17
第21図　土器模式図……18
第22図　出土遺物1
　　1号溝出土土師器……23
第23図　出土遺物2
　　1号溝出土須恵器……24
第24図　出土遺物3
　　1号溝出土須恵器系中世陶器
　　2号溝出土土師器……25
第25図　出土遺物4
　　2号溝出土須恵器・須恵器系中世陶器・砥石……26
第26図　出土遺物5
　　1号～5号井戸出土土師器・須恵器……27
第27図　出土遺物6
　　7号井戸出土土師器・須恵器
　　1号土坑出土土師器・須恵器・須恵器系中世陶器・軽石……28
第28図　出土遺物7
　　2号～5号土坑及びピット出土土師器・須恵器……29
第29図　出土遺物8
　　各グリット出土土師器……30
第30図　出土遺物9
　　各グリット出土土器・土師器・須恵器……31
第31図　出土遺物10
　　各グリット出土須恵器……32
第32図　出土遺物11
　　各グリット出土遺物
　　須恵器・須恵器系中世陶器・土垂・木炭・石器・砥石・軽石……33

図　版　目　次

図版１　１ 発掘調査前　２・３ 発掘調査スナップ
図版２　１ １号溝の調査　２ ２号溝とピット群の調査　３ 井戸の調査
図版３　遺跡全景　１ 南側　道路遺構と溝　２ 北側　井戸と土坑
図版４　１ １号溝（南側より）　２ 同スナップ（北側より）　３ ２号溝（北側より）
図版５　１・２ １号井戸　３ ２号井戸　４ ３号井戸　５ ４号井戸　６ ５号井戸　７ ６号井戸　８ ７号井戸
図版６　１・２ １号土坑　３ ２号土坑
図版７　１ ３号土坑　２ ４号土坑　３ ５号土坑
図版８　遺物出土状況　１ 遺構外　２ ２号土坑　３ ５号土坑
図版９　出土遺物１　１号溝出土
図版10　出土遺物２　１号溝出土　２号溝出土
図版11　出土遺物３　１号溝出土　２号溝出土
図版12　出土遺物４　２号溝出土　１号～３号井戸出土
図版13　出土遺物５　３号～７号井戸出土
図版14　出土遺物６　１号土坑出土　２号土坑出土
図版15　出土遺物７　２号～５号土坑・ピット出土
図版16　出土遺物８　各グリット出土師土器
図版17　出土遺物９　各グリット出土土師器・須恵器
図版18　出土遺物10　各グリット出土須恵器・中世陶器
図版19　出土遺物11　各グリット出土土製品・石製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	あらきまえいせき
書　　名	荒 木 前 遺 跡
副　書　名	第２次調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	亀田町文化財調査報告書
シリーズ番号	第４号
編 著 者 名	川　上　貞　雄
編 集 機 関	亀田町教育委員会
所　在　地	〒950－01　新潟県中蒲原郡亀田町泉町３－４－５　TEL　025－381－2111
発行年月日	西暦1996年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あらきまえ 荒木前遺跡	なかかんばらぐんかめだまちじょうしょちょうめこう 中蒲原郡亀田町城所１丁目甲748・747	15324	31	37° 51′ 33″	139° 6′ 41″	1994.7.20 ～1994.8.5	550	宅地開発

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
荒木前遺跡	集　落	古　代	道路、井戸、土坑	須恵器・土師器・須恵器系中世陶器	

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経過

当該地は新潟県中蒲原郡亀田町城所１丁目748・747番地である。県都新潟市に隣接した田園地帯であるが、近年の宅造開発事業は目覚しい発展を見るところである。遺跡の発掘調査を伴ったこの度の開発面積は僅かに550㎡に過ぎず、周囲は新興住宅地に囲まれて奥まった畑地であった。

この地域は旧街道裏に面した果樹園地帯が広がり、ブドウ、桃の銘産地であった。ここに最初に開発の波が打寄せたのは、1979年のことであり、町内に多くの遺跡を有する町教育委員会は開発と遺跡保護との対策に苦慮するところとなった。そしてこの城下地内に於ける最初の宅造計画は1981年のことであり、この地内にある火葬場、墳墓地を除外した約３町４反歩に亘った。この地籍は亀田町元町小字中ノ山、同荒木前、同城所、同荒木浦で旧市街地区の裏側に当るもので、北側には「貝塚遺跡」として多くの町民に知られている遺跡に繋がる地帯である。

1981年に於ける初期の宅造計画範囲の内、約28,000㎡が遺跡と做された。当時町教育委員会でこの発掘調査を行ったが、昨今の遺跡発掘調査では考えられないことであるが、予算の限度内での打切りであり、ようやくにして4.100㎡を調査し報告した（川上1982）。

1988年、第１次の大規模開発地点の東側100ｍ地点で小規模の宅造開発計画が起った。その全面積2,000㎡が遺跡であることが分り、1991年全面発掘調査が行われ、報告されている（渡辺1991）。

第１図　遺跡位置概念図

以上の２次における発掘調査範囲は第１図で示したもので、Ａは1981年の調査範囲であり、Ｂが1991年の調査範囲である。ここで発掘の原因となった地域は旧市街地と1991年における発掘調査区域に囲まれたＣ地点である。1993年、この宅造可能の小範囲の畑地の開発計画が株式会社みのり不動産から申請された。町教育委員会は当該地が荒木前遺跡に隣接することから新潟県教育庁文化行政課から指導を受けることとし、その結果、同年秋を待って同課専門職員による試掘調査を行うこととなった。この調査をふまえて本調査が必要となり、翌年1994年の夏を待って当調査を行うこととなった。

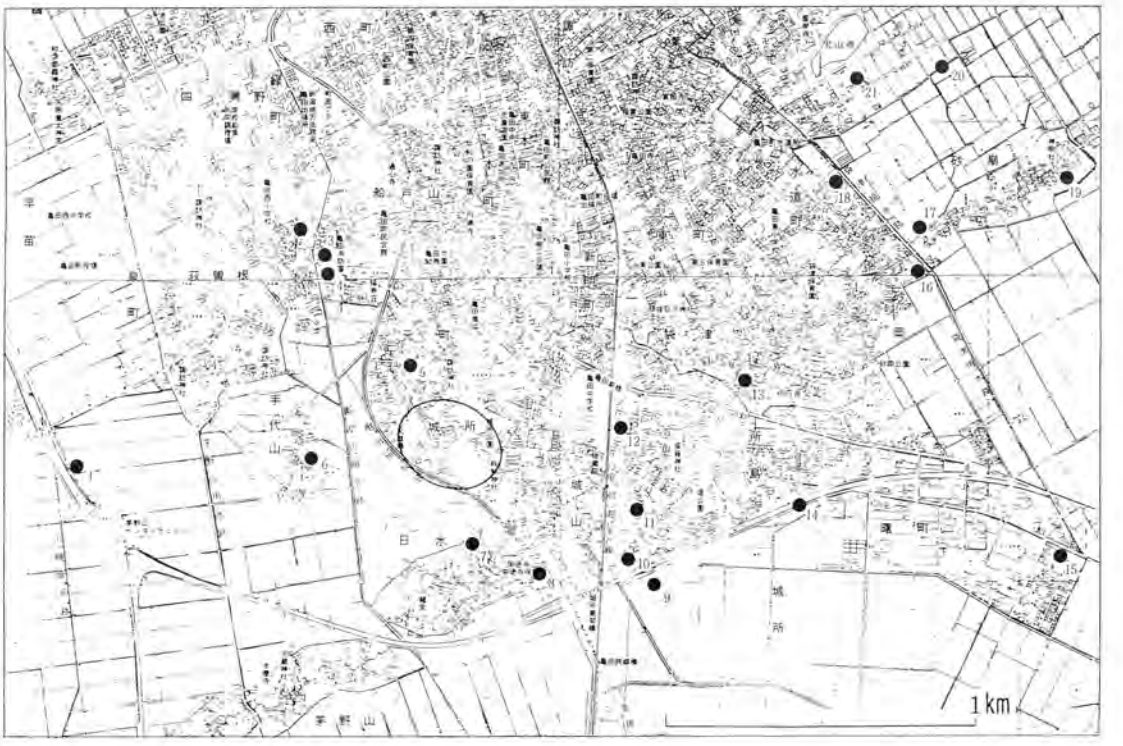
（枝並　素子）

2　遺跡の立地と歴史的環境

亀田町は蒲原平野のほゞ中央に位置し、古くから交通の要所と言われ、日本海と内陸各地への中継点とされて来た。越後平野を貫く２大々河、信濃川と阿賀野川にはさまれ、この２大河を結ぶ小阿賀野川に接した微高地である。亀田島とも呼称されたこの微高地は現在知られている日本海砂丘の最も内陸に位置するもののひとつで、日本海新砂丘Ｉの幾筋かに乗って発達したものである。この最も内陸部に位置する砂丘列は、茅野山、日水、城所、所島、砂崩（亀田町）、駒込、藤山、平山（横越村）、笹山（新潟市）に連なり、阿賀野川東部では一部不明の箇所もあるが法花鳥屋、黒山（豊栄市）、佐々木（新発田市）、山三賀、諏訪山（聖籠町）へと連なる。この西側には細山、直山、西山、丸山、北山と連なる小列が平行する。因みに第Ⅱ砂丘群は鳥屋野潟南側に位置する長潟、石山、岡山（新潟市）、阿賀野川東側の下山、見国山（豊栄市）を経て甚兵衛橋、二ツ山（聖籠町）に連なる数条からなる砂丘列である。なお第Ⅲ砂丘群は最も大規模なもので現在の海岸線にほゞ平行して発達している。西側の五十嵐、関屋、松崎、太夫浜、島見浜、太郎代（新潟市）、亀塚浜、網代浜（聖籠町）へと連なる。なお西側は角田浜、越前浜（巻町）まで連なっていることは言うまでもない。

これらの砂丘上に立地する遺跡の分布は砂丘の成立を知ることでも利用されるところだが、縄文時代の遺跡が所在するのは主に第Ｉ砂丘群、第Ⅱ砂丘群に限られる。この内最も海岸寄りのものに横土居Ｂ遺跡、笹山Ａ遺跡（豊栄町）があり、共に第Ⅱ群最後列の南側に位置する。第Ⅲ砂丘群には当然の如くより時代の降った遺跡となり、東港亀塚遺跡（聖籠町）、東港太郎代遺跡（新潟市）は共に古墳時代の遺跡が最古となり、多くは奈良・平安時代の遺跡である。

当遺跡が乗っている第Ｉ砂丘の前列と呼ばれる最も内陸部の微高地には、第２図に示した如く市内でも多くの遺跡が分布している。縄文土器、弥生土器の出土を見た遺跡は、栄徳寺裏、城山、斉助山で、城山の縄文中期を最古とする。その他出土遺物に土師器があるがいずれも奈良・平安時代の土師器で、古墳時代に位置付けられる土師器は報告されていない。なおここに図示した牛道遺跡の南方向で新国道バイパス工事予定地内に於て発掘調査が進められていた亀田町所島地内の遺跡も牛道遺跡と呼称されており、川根谷内遺跡（横越村）も古代の遺跡と聞き及んでいる。



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所　在　地	種　類	遺　　物
1	泥　　潟	亀田町泥潟字土西83　他	遺物包含地	須恵器
2	市 助 山	〃　船戸山３丁目723	〃	羽口　鉄滓
3	川　　西	〃　〃　５丁目333	〃	土師器
4	狐　　山	〃　〃　〃	〃	須恵器
5	貝　　塚	〃　元町５丁目189 他	〃	土師器　須恵器
6	手 代 山	〃　茅野山字鍋潟2793	〃	須恵器　中世陶器
7	日　　水	〃　〃　字日水浦2911	〃	土師器　須恵器
8	栄徳寺裏	〃　〃　〃　南492 他	〃	土師器　須恵器　中世陶器　縄文土器
9	牛　　道	〃　城山甲字牛道	〃	土師器　須恵器
10	城　　山	〃　城山４丁目1025　他	〃	土師器　須恵器　縄文土器　弥生土器
11	斉 助 山	〃　〃　1127　他	〃	土師器　須恵器　縄文土器　弥生土器
12	三 王 山	〃　所島１丁目780 他	集　落　址	須恵器　青　磁
13	茨　　島	〃　袋津字茨島	遺物包含地	須恵器
14	岡　　田	〃　城山字岡田	〃	土師器　須恵器
15	上　　沼	〃　袋津字上沼	〃	土師器　須恵器
16	上 ノ 山	〃　砂崩字上ノ山	〃	須恵器
17	三 条 岡	〃　〃　字三条岡	〃	土師器　須恵器
18	塚 の 山	〃　袋津字塚の山	〃	土師器　須恵器
19	砂　　崩	〃　砂崩字浦郷307 他	〃	縄文土器　土師器　須恵器
20	金 塚 山	新潟市丸山字金塚131 他	〃	土師器　須恵器
21	前　　山	〃　北山字前山341 他	〃	土師器　須恵器
★	荒 木 前	（円印内に中の山遺跡　荒木前１次調査範囲が含まれる）		

この様に市域内に多くある遺跡も、その実体は殆んど不明であり、これまで発掘調査が行われた遺跡は三王山遺跡（酒井・1980）、当遺跡（渡辺・1991）、及び当遺跡と同一遺跡と考えている中の山遺跡（川上・1982）のみである。三王山遺跡は発掘調査の結果、中世末期から近世初頭の遺跡で、何等かのまとまりを持った都市的遺跡と考えることができるものである。中の山遺跡は古代の集落跡と中世初期〜中葉に於ける街的要素を含んだ遺跡と考えている。

3　発掘作業と整理作業の経過

A　遺跡確認調査

調査の目的

亀田町城所地内で宅地造成の計画があり、計画地内が周知の荒木前遺跡にかかる。そのため、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施して、計画地内における遺跡の有無を確認し、今後の協議資料を作成する。

調査期間

平成６年４月13日（水）

調査主体

亀田町教育委員会　教育長　田辺　豊平

事務局　　生涯学習課　課長　大西　繁夫

佐野　素子

調査体制

調査担当　　木村　康裕（新潟県教育庁文化行政課　文化財調査員）

調査員　　吉田　淳一（新潟県教育庁文化行政課　主任調査員）

調査方法

調査対象地区に試掘坑を任意に設定し、バックホー・人力による掘削・精査を行い、遺物・遺構の有無を確認した。

１Ｔ：２×８ｍ

２Ｔ：２×３．５ｍ

３Ｔ：２×４．５ｍ

調査の結果

◦層序（土層柱状図参照）

Ⅰ層　　暗褐色土（表土）

Ⅱ層　　黒褐色土

Ⅲ層　　暗褐色土

Ⅳ層　　暗褐色土（Ⅴ層を若干含む）

Ⅴ層　　黄褐色土

◦遺構・遺物

遺構……１Ｔ：ＳＤ１（溝：幅約300cm，深さ約40cm）

ＳＤ２（溝：幅約30cm）

ＳＫ（土坑：径約50cm）

ピット１（径約25cm）

ピット２（径約20cm）

２Ｔ：ＳＫ１（土坑：径約180cm）

ＳＫ２（土坑：径約140cm）

３Ｔ：ＳＫ（土坑：径約90cm，深さ約80cm）

性格不明遺構３基（内１基は比較的新しいものである）

遺物……１Ｔ：カクラン……珠州焼片１・須恵器片１・土師器片６

中世陶器片３

Ⅲ……須恵器片１・土師器片７

Ⅳ……須恵器片９・土師器片10

ＳＤ１……須恵器片２・土師器片４

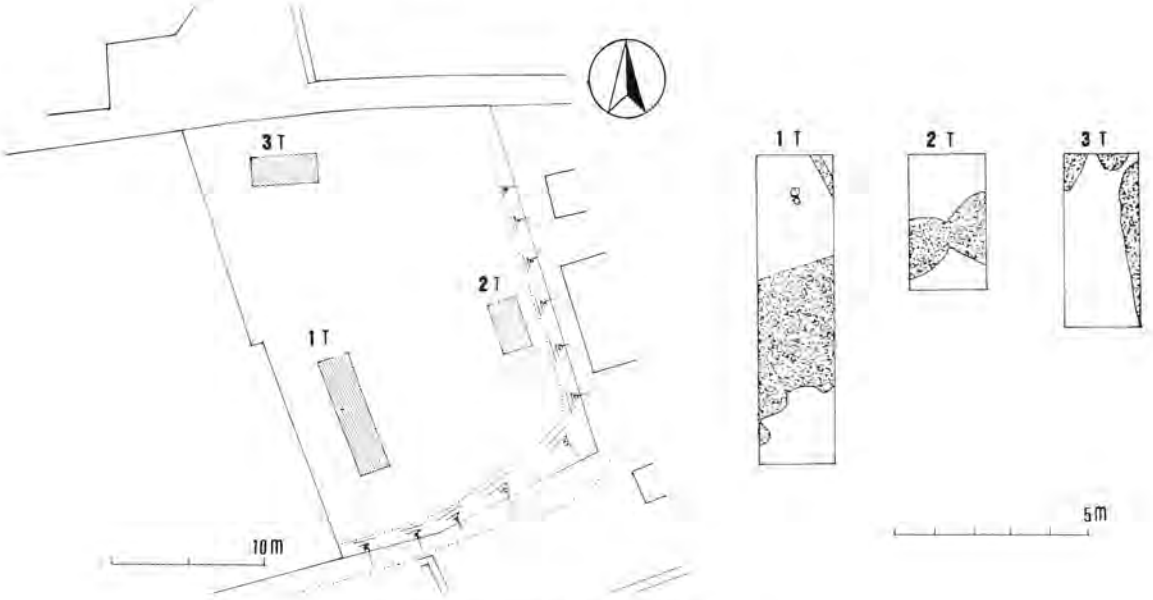
２Ｔ：ＳＫ１……須恵器片１

ＳＫ２……須恵器片１

Ⅲ……須恵器片４・土師器片４

Ⅳ……須恵器片３・土師器片４

３Ｔ：カクラン……須恵器片１・土師器片１



第３図　確　認　調　査　平　面　図

ま と め

昭和63年、荒木前遺跡では宅地造成に伴い発掘調査（2,000㎡）が実施されている。調査の結果、古代・中世の遺構・遺物が検出され、遺跡の性格として平安時代の一般集落、中世の在地領主層の居住地と考えられている。今回の調査対象地は、昭和63年の調査地に接しており、昭和63年調査の際検出された遺構の続き等が検出される可能性が高いところであった。

調査の結果をまとめると下記のとおりである。

- 遺物……上記の通り
- 遺構……上記の通り
  - １・２Ｔの遺構については、覆土から出土した遺物等から判断して、古代（平安時代）のものと思われる。
  - ３Ｔの遺構については、覆土から出土した遺物が無いことから、時期は明確にできないが、１・２Ｔの遺構の覆土と異なることから、１・２Ｔの遺構と時期差があるものと思われる（１・２Ｔの遺構より新しい）。また、３Ｔの約４／５を占める暗褐色土（黄色褐色土粒を含む）の遺構は土層の観察から他の遺構よりも新しいことが判明した（近・現代？）。
- 調査対象地の現状は畑地である。土層の観察から、耕作土の下は、梨畑の棚等により相当の攪乱をうけており、古代・中世の遺物が混入している。遺物包含層は、Ⅲ・Ⅳ層でいずれも、古代の遺物が含まれている。
- 今回の調査結果から、昭和63年の調査と同様に遺物・遺構が確認された。しかしながら、攪乱層の存在など遺構・遺物の密度・包含層等若干の相違があった。（以上『荒木前遺跡確認調査報告書』を転載した。但し一部の図表を省略した。）

Ｂ 本 調 査

前項の確認調査の結果、本調査の必要が認められたため、町教育委員会及び、開発者共に本調査へ向けての準備に入った。川上がこの調査の依頼を受けたのは開発者である㈱みのり不動産側からであった。実は前述した中の山遺跡の調査時点に於いて、当時現地担当職員として開発者側の先頭に居られた人物が当開発者その人であり、また御母堂様にも当時の調査では一方ならぬお世話を戴いたと言う経緯があったからである。

２月21日	㈱みのり不動産より依頼有り	５月25日	町教育委員会の依頼を受く
７月14日	現地表土廃除、搬出作業開始	７月20日	発掘調査を開始
８月５日	現地調査終了		

発掘調査ではその面積が狭小であることから廃土を保持することは困難であり総て搬出することになった。

Ｃ 整 理 作 業

整理作業は笹神村郷土資料館の一室を借用して行うことになり、８月６日出土遺物などを同資

料館に搬入した。同日より引続いて水洗作業を行い、注記作業及び現地図面の整理など終了させて一旦作業を中断した。

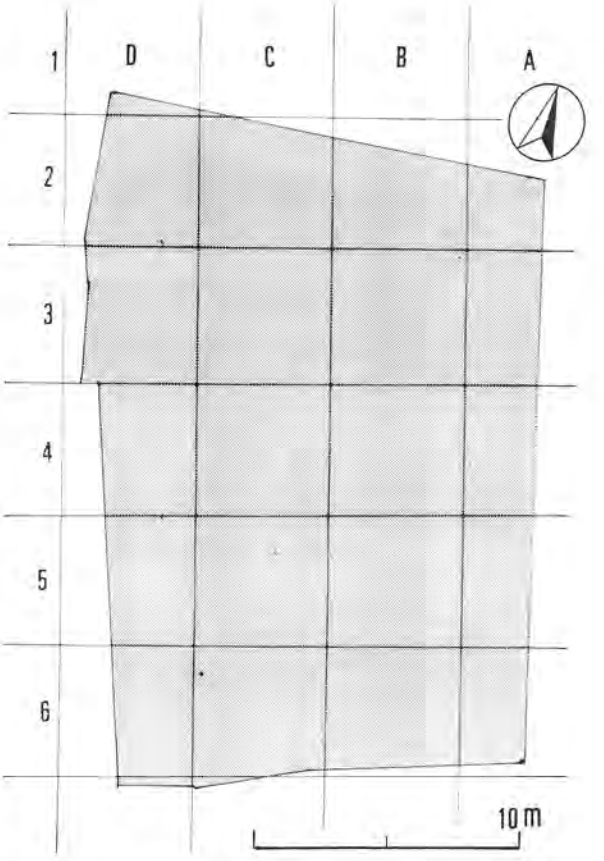
本格的に整理作業に取掛れたのは1995年6月30日からのことであり、ようやく7月25日までの日程を得たが終了せず、再度12月1日より16日までの間を要して一応の終了を見た。この間、調査員の他に田中順子の応援を得た。

4　調査地点と土層

当調査地は熊野神社に接するもので、同神社南隣りの民家の裏に当る畑地である。総面積は狭く、幅20m、縦長軸30m、同短軸24m程である。第3図に示された様に北側は赤道に接し、西側は同レベルの空地（畑）になっているが旧市街である民家側及び南側は共に低地である。実は50～70cm程の客土によって道路との水平を保っている。この地の北側、西側は第1次調査に依って発掘調査が終了している。

調査は厚い客土の剥取・搬出後、5m四方のメッシュを組んで調査することにしたが、第1次調査の基点などを把握しがたく、任意のグリットを設定して調査した。第4図に示した如く調査区の北側から南に向って1～6、東から西に向ってA～Dの都合24区画を設けた。なおこのグリットの方位はN16°Wである。

遺跡を覆う土は地表面より暗褐色土の耕作土、黒褐色土が60～70cm程見られいずれも客土によるものである。地山は黄褐色土であり一部北側は黄白色砂でかつての砂丘の名残りを止める。遺物包含層と把握できる土層は識別できず、残位層に少量の遺物を見るに過ぎない。



第4図　グリット設定図

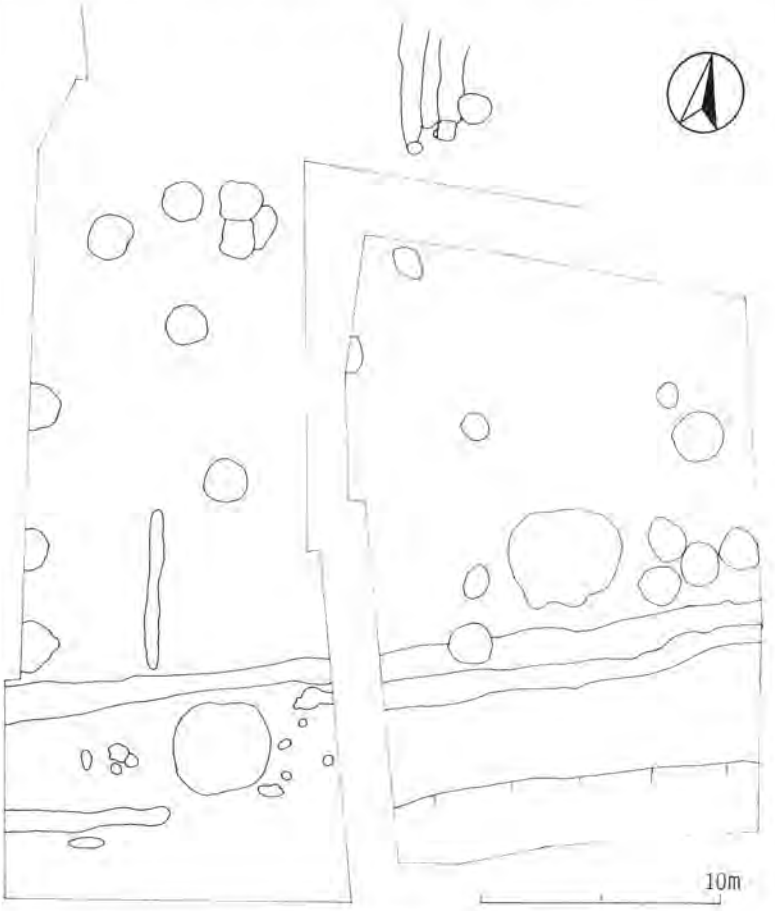
Ⅱ　遺構と遺物

1　遺　構

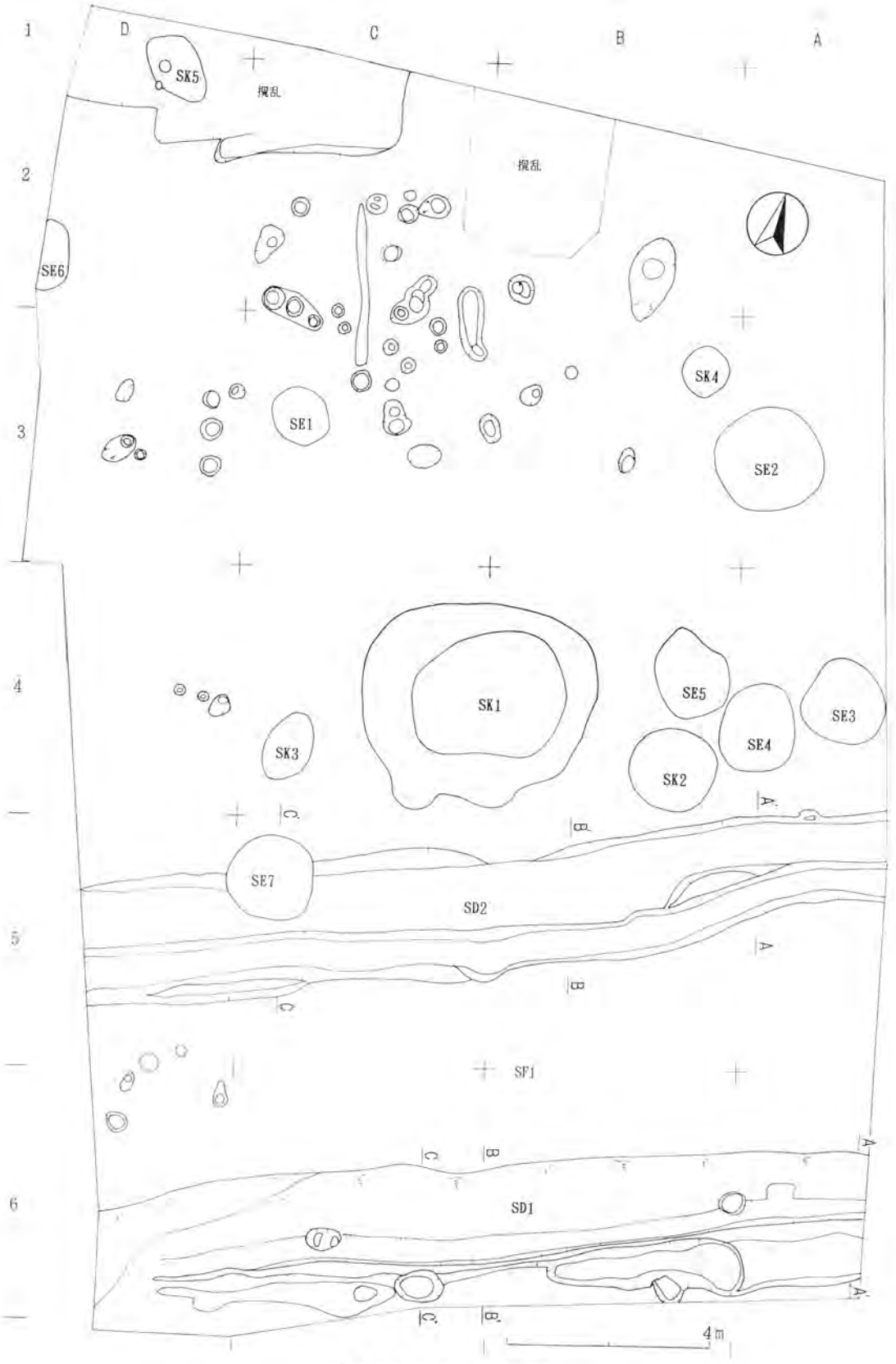
発掘調査の結果検出された遺構は側溝を伴った道路、複数の井戸、土坑、ピット群である。これらを第５図で遺構全測図として示した。図中での記号はＳＤ＝溝、ＳＦ＝道路、ＳＥ＝井戸、ＳＫ＝土坑である。この遺構全測図と、第１次調査に於ける遺構を対比させた。当調査区において北東隅のＡ－２、Ｂ－２区では一部攪乱部分もあるが遺構が稀薄となる。より広い範囲の調査を行っている同第１次調査に於ける遺構全体図も同様に稀薄地帯となっている。

Ａ　道路と溝（第５、７、８図、図版３、４）

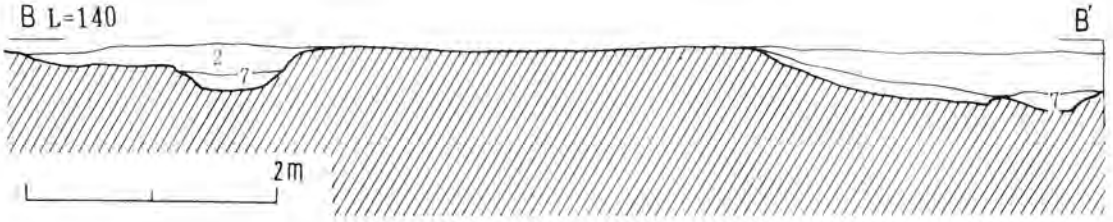
調査区の南３分の１に亘って２条の溝遺構が検出された。ここでは一応１号溝、２号溝と呼称



第６図　第一次調査区との比較


1
2
3
4
5
6
D
C
B
A
SK5
撹乱
撹乱
SE6
SE1
SK4
SE2
SK1
SE5
SE3
SE4
SK3
SK2
SE7
SD2
SF1
SD1
4m

第5図 遺跡全測図



第7図　道路断面図

して各々に説明をするが、本来はこの2条の溝の中間が道路としての遺構と考えられ、言わゆる両側溝としての性格となるものであろう。道路、及ＳＤ１号溝、ＳＤ２号溝共当然のことながら平行に位置するものであり、東北東から西南西へ延びるもので、その方位はN67°Wである。検出された全長は15.7mで、上部の幅員は最大５m、最小3.9mを測る。第５図に示した如く南側に小ピットが見られるが、いずれも浅いもので後世の木根などによるものである。第６図に示した第１次調査区域におけるこの道路遺構の延長上には、土坑やピット群が見られるが、それらは中世を含めた後代のものと考えられる。

南側に位置する側溝をＳＤ１号とした。南側の立上り部分は調査範囲外の未掘地に掛り溝の全容を把握することができない。第７図、８図の断面図に示した如く、道脇より1.5m程は緩い傾斜で落ち、中段より急な掘込みや所々に土坑状の掘方によって溝底となる。底部の深度は一定ではないが、路面より65～89cm程を測る。

北側に位置する側溝をＳＤ２号とした。最大幅2.5m、最小幅1.7mで底部は内側に寄って深くなり、外側には水平のテラスを有する。底部幅は40～50cm、深さは最大40cmを測る。Ｃ－５区に於てＳＥ７号遺構が重複するが、時期を異にするもので、ＳＤ２号が先行する。

Ｂ　井　　戸

ＳＥ１号～７号までの井戸と推定できる遺構が検出した。井戸枠などの内部施設を残すものはない。６号井戸以外ではそれぞれ数片の土器片が検出されている。

ＳＥ１号井戸（第９図、図版５－１・２）

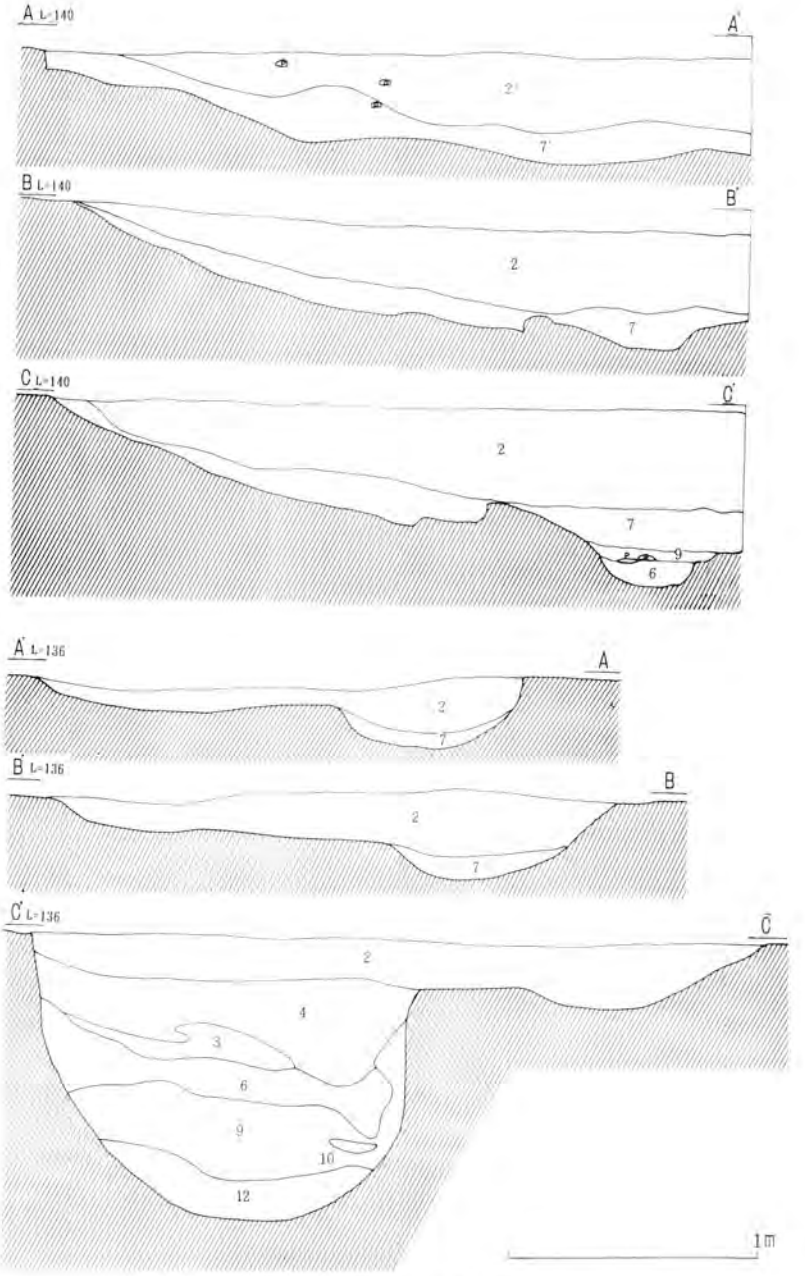
Ｃ－３区に位置し、上口に大きな掘方を見るがほゞ垂直に掘られた良好な形態を残している。掘方の上口径1.1×1.15m、底径65～70cm、深さ95cmを測る。底部には砂の堆積があり、地表より70cm程で湧水があったものと推定される。なお底部はほゞ水平である。

ＳＥ２号井戸（第10図、図版５－３）

Ａ・Ｂ－３区に位置し、最大の口径2.1mを測る。北・西側壁は段状の掘方が見られ、底部は80cm～１m程で、深さは１mを測る。内部覆土に砂が多いが、北側に砂丘の名残りがあることに起因するものと考えられる。

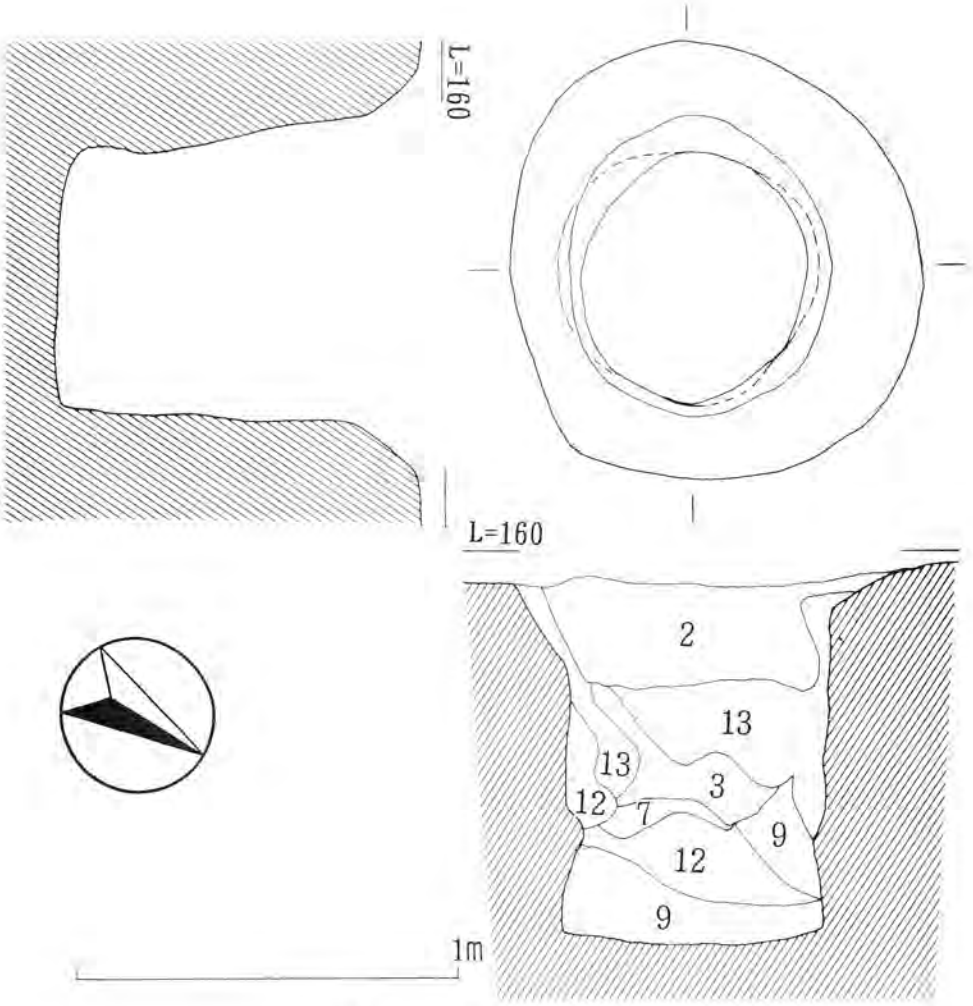
ＳＥ３号井戸（第11図、図版５－４）

Ａ－４区に位置し、深さが60cm程と浅いがその掘削法から見て井戸と推定される。最大口径



第8図　1・2号溝断面図

1.7m、底径1.4〜1.8mを測る。図示した如く底部は水平である。図版写真でも分る様に確認調査の第2トレンチに依って上部が削平され、一部サブトレンチで破壊されていて、土層等は不明である。



第９図　１号井戸平断面図

ＳＥ４号井戸（第12図、図版５－５）

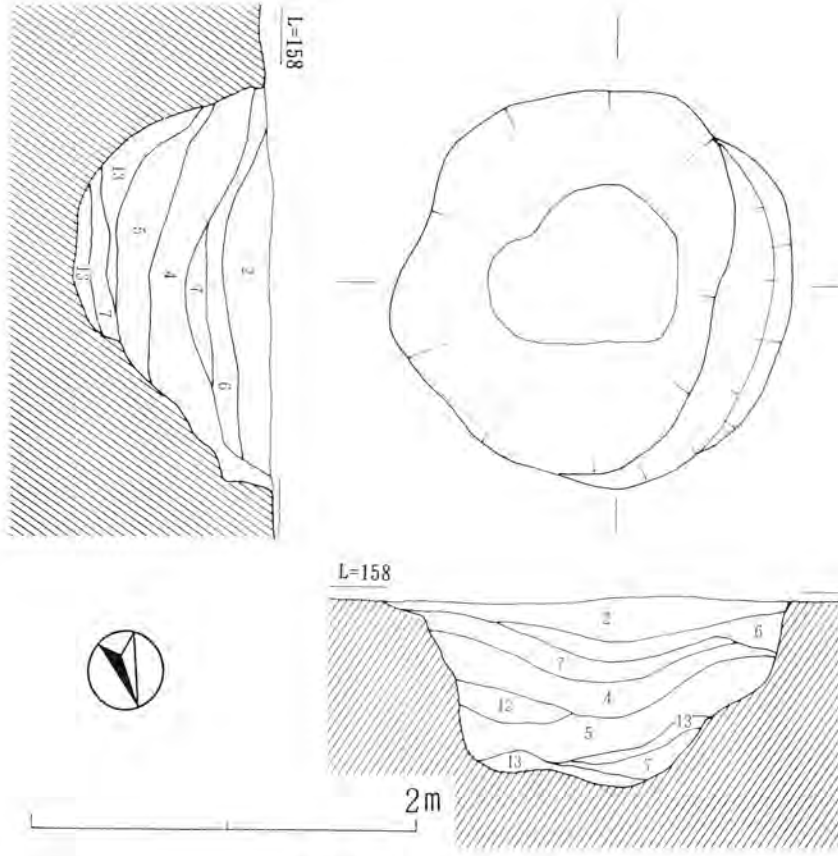
Ａ・Ｂ－４区に位置し、ＳＥ３号に接している。ＳＥ３号同様確認調査トレンチによって一部が削平、消滅しているが、かろうじて土層を把握できた。北側坑壁の流入がかなり進んだことが分り、最大口径1.7ｍ、底部1.1～1.45ｍ、深さ88㎝を測る。底部は南向きの斜状を呈する。覆土の中間層に黒灰を見ることから人工的に埋られたものと推定される。

ＳＥ５号井戸（第13図、図版５－６）

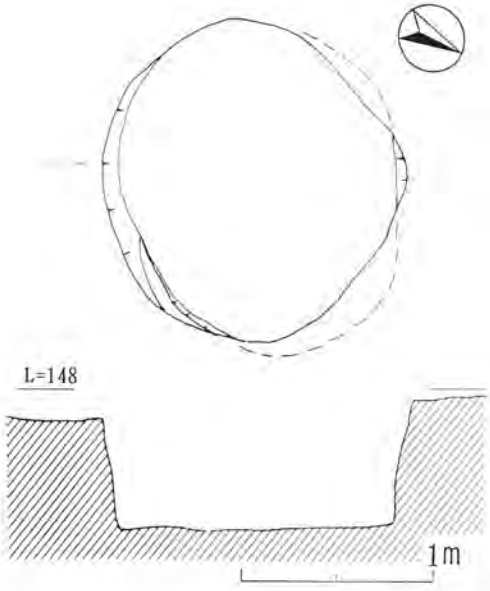
Ｂ－４区に位置し、ＳＥ４号に接している。口径1.4ｍ、深さ90㎝、底部は丸味を呈し70～80㎝を測るが、坑壁の立上りは垂直気味で良好の保存状態にある。

ＳＥ６号井戸（第14図、図版５－７）

Ｄ－２区の調査可能区域に約２分の１が検出された。図示した如く坑壁の一方はほゞ垂直であり他方は大きく開放する。覆土の状況が水平であることから崩壊とは考えられず、初期の掘方に



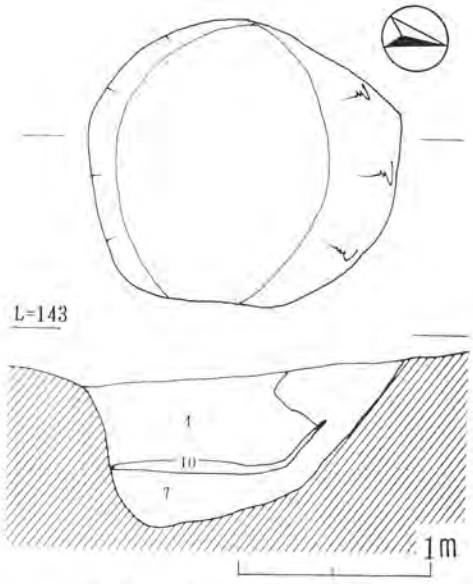
第10図　2号井戸平断面図



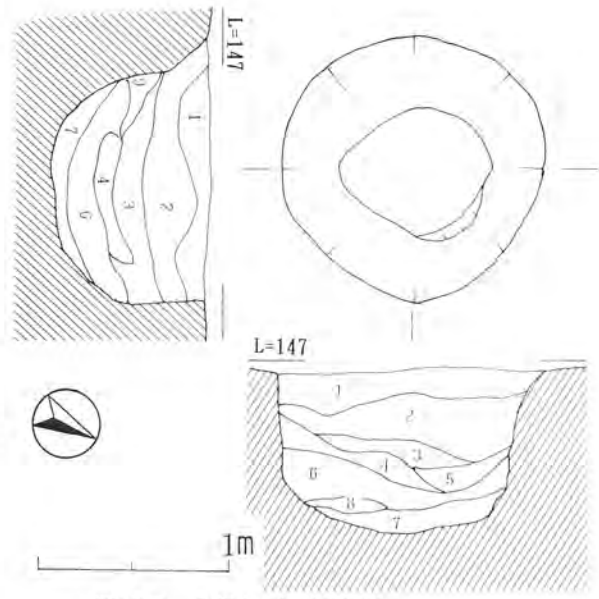
第11図　3号井戸平断面図

表1　井戸・土坑地層一覧表

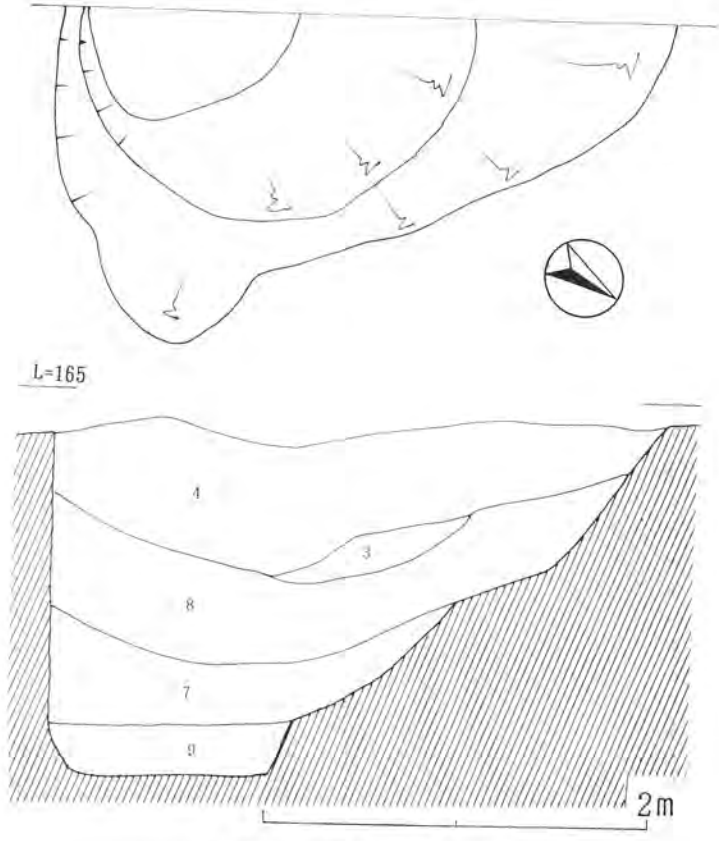
1	白砂
2	黒色土
3	腐植土
4	黒色土（赤茶色砂混）
5	黒褐色砂
6	暗褐色砂質土
7	赤茶色砂
8	赤褐色砂
9	灰色砂
10	黒灰
11	黒色砂
12	暗褐色粘質土
13	黄土色砂質土
14	黄土色砂
15	炭混灰
16	灰色粘質土（赤茶色砂混）
17	灰色粘質土



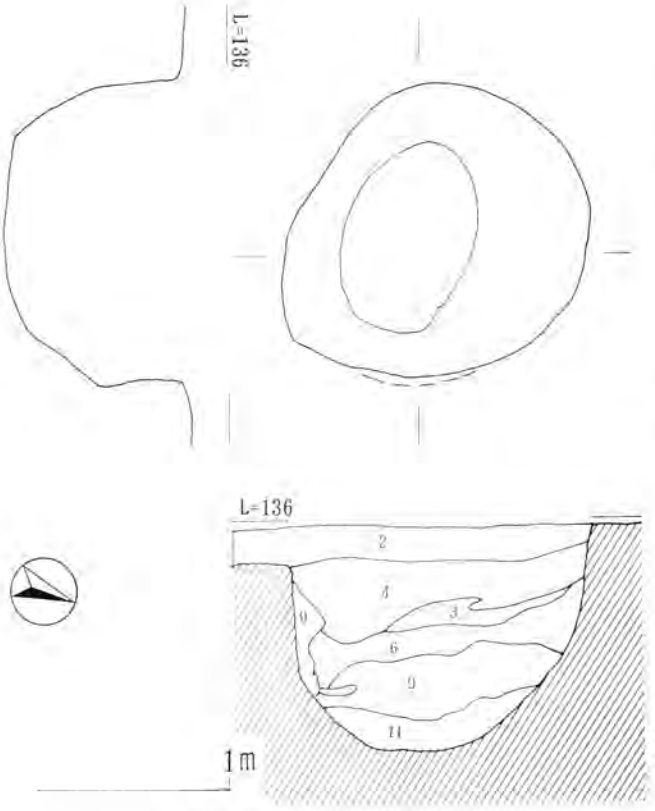
第12図　4号井戸平断面図



第13図　5号井戸平断面図



第14図　6号井戸平断面図



第15図　7号井戸平断面図

よるものであり、中間に段状のステップを有する。口径3.25m、深さ1.82m、底部は円形で水平であり、保存状態が良い。

ＳＥ７号井戸（第15図、図版５－８）

Ｃ－５区に位置し、ＳＤ２号のテラス部分に掛る。口径1.5～1.7m、底径78～100cmと楕円で、底部も丸味が強く、深さは1.17mを測る。壁の崩壊や流出などは見られない。ＳＤ２号に後続するものであろう。

Ｃ　土　坑

大小５基の土坑を検出した。これらの性格は総て不明である。なおいずれの土坑より何等かの遺物が検出されている。

ＳＫ１号土坑（第16図、図版６－１・２）

Ｂ・Ｃ－４区に位置する大型の土坑である。やゝ楕円で坑口の長径4.7m、短径3.8m、底部の長径３m、短径1.9m、深さ1.4mを測る。南側から東側にかけて中間に陵を見てやゝ緩かな壁を有する。坑内の覆土は多層となり、長期に亘って序々に埋没したと考えられる。

ＳＫ２号土坑（第17図、図版６－３、８－２）

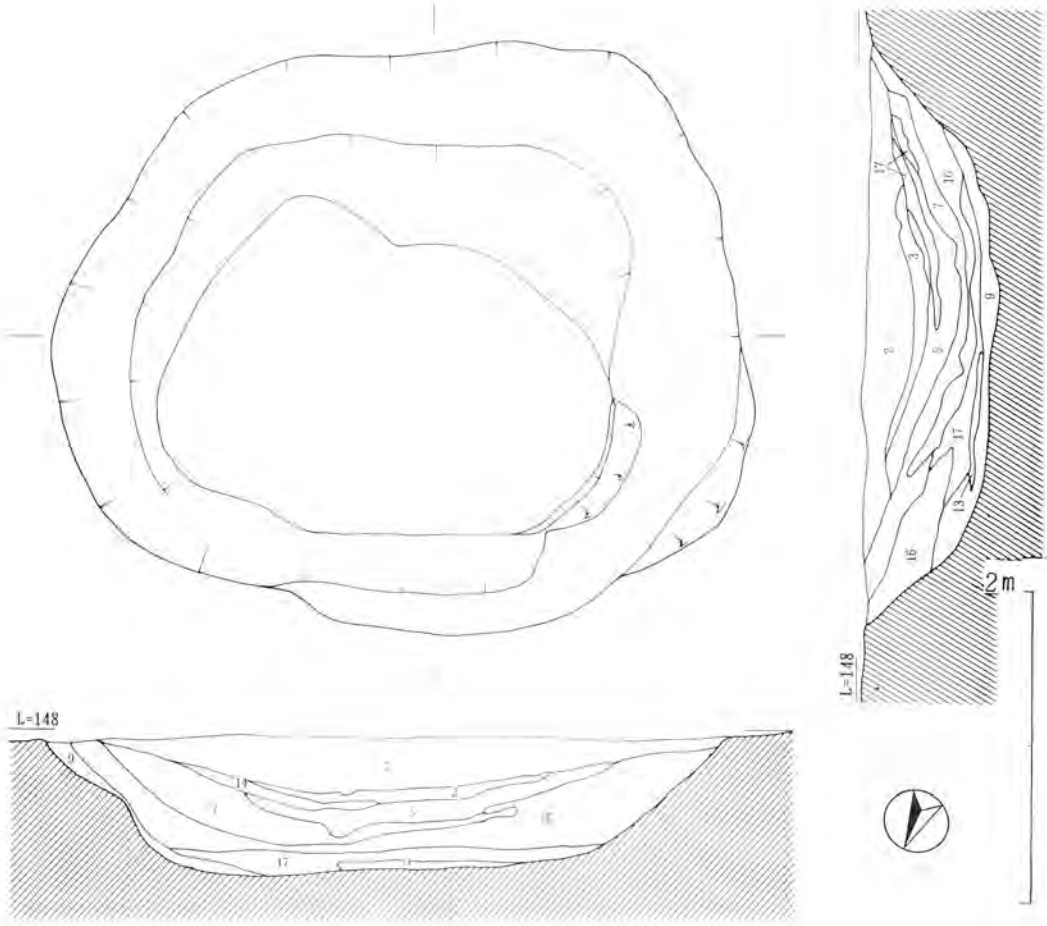
Ｂ－４区に位置し、ＳＥ４・５号に隣接している。長径２m、短径1.5m、深さは20cm程と浅い。底部は平坦であり、覆土に砂を見ることから、ＳＥ４号又は５号井戸に関連した施設の一つかと推定される。

ＳＫ３号土坑（第18図、図版７－１）

Ｃ－４区に位置する僅かな窪地に過ぎないが、土器片を検出したことなどから一応土坑とした。長径1.5m、短径1.1m、深さは10cmに満たない。従って図版でも絵にならない。

ＳＫ４号土坑（第19図、図版７－２）

Ｂ－３区に位置し、円形で浅いが確実な掘込みを見る。直径１～1.1m、深さ15cmである。坑内の覆土が砂であることから70cm程の距離にあるＳＥ２号に関連する施設とも考えられる。



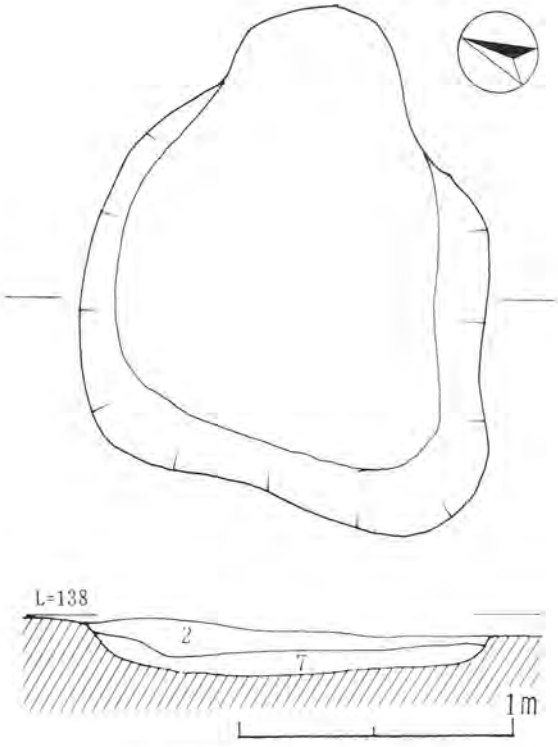
第16図　1号土坑平断面図

ＳＫ５号土坑（第20図、図版７－３、８－３）

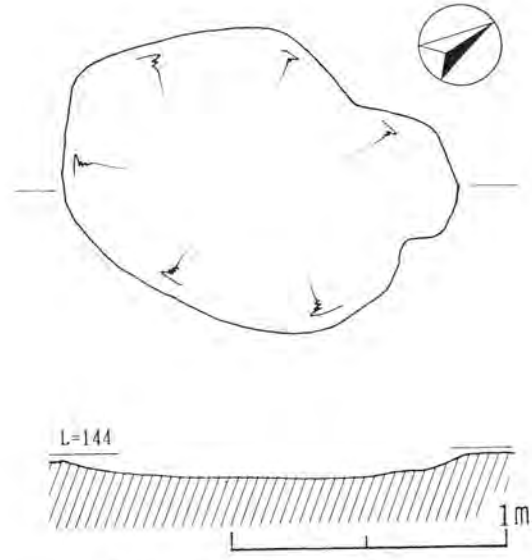
Ｄ－１・２区に位置し、上部は攪乱層となり削平されている。やゝ歪んだ楕円で、長径1.5ｍ、短径１ｍ、残存最大深さ60㎝を測る。底部は北西向きの斜面となる。覆土の中間に厚い灰層を見、そこに中世の水輪（五輪塔の一部）が検出された。おそらく廃棄されたものであろう。

Ｄ　ピット群

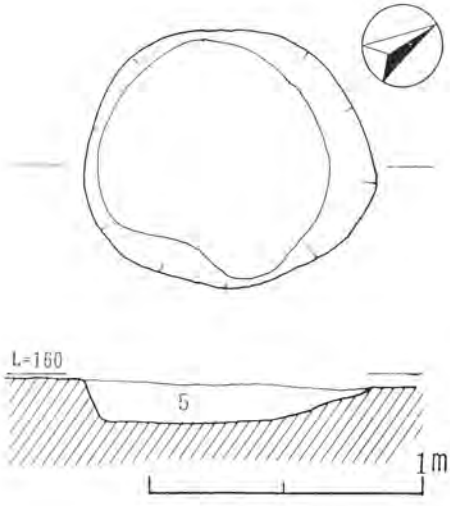
改めて図示しないがＣ－２・３区を中心にして多数のピットが検出された。これらの少数は掘立柱建物の柱穴と見られるが、ここでは構築物としての関連を把握することはできない。



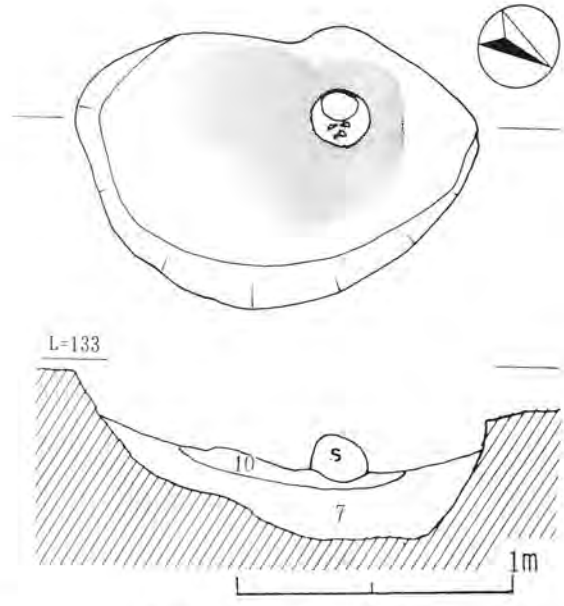
第17図　2号土坑平断面図



第18図　3号土坑平断面図



第19図　4号土坑平断面図



第20図　5号土坑平断面図

2 遺　　物

A　土器・陶器の種別について

発掘調査の結果、それぞれの遺構及び遺構外より種々の遺物が検出された。これらは土器、陶器類、土製品、石製品などである。この内土器・陶器が主体であり、第21図の模式図を用いて器種の説明を記したいと思う。

出土した土器の主たるものは土師器（はじき）と須恵器（すえき）であり、ごく少量の須恵器系中世陶器がある。土師器は我が国古来の伝統を継ぐ焼物で、縄文土器－弥生土器－土師器の流れを見るものである。窯を用いず浅い土坑を掘って焼成するもので言わゆる野焼きによる土器である。従って酸化焔焼成による赤茶色の言わゆる土器である。この土師器には弥生土器の直接の影響を受けた古い時代のものと成形技法の進歩したものとに２分することができ、両者それぞれを○○期の土師器と呼称し、当地では主に関東系に倣って前者を泉期、鬼高期などと呼び、後者を国分期の土師器と言って来たが、近年では簡略化して前者を古式土師器、後者を轆轤（ロクロ）土師器と称している。なお時代的には前者の古式土師器は古墳時代に相当し、後者のロクロ

第21図　土 器 模 式 図

土師器は奈良・平安時代の遺物である。当遺跡で出土する土師器はこの後者に相当するものである。

模式図に示した甕Aは小型のものが主体で器高10cmから15cm程のものが多く無文である。甕Bは中型であるが底部が非常に小さい特徴をもち、器面に刷毛目文をもつ。甕C類は主に胴部に最大径をもつが、口縁部に最大径をもつものもあり、長い胴と丸底を特徴とする。器高としては30〜40cmが主体となる。肩部に横位の刷毛目文を施し、胴部から底部にかけては條線状平行叩目文をもち、器内面は同心円を主体とした青海波文をもつものが多い。煮沸用器として使用される。堝は言うまでもなく煮沸用の鍋である。口径35〜45cmと大型のものが多い。器外には條線状平行叩目文、器内面は青海波文などが主である。坏・碗共に回転糸切り法による轆轤切離痕を見るものであり、器種として坏類は少ない。碗のうち一部に内面が黒色のものがある。黒色土器、内黒土器などと呼称しているが、焼成途中に於て炭素を器面に吸込ませ、焼成後篦磨きを行って光沢を出したものである。当報告では図中にこの黒色部分をスクリントーンによって示している。

須恵器は5世紀の中頃、朝鮮半島より伝わった製陶技法に依り、窯を用いて焼成する硬質の焼物である。時代に依って器種、器形が異なるが、模式図に示したものは8世紀以降のもので、当遺跡に係わる器形である。壺類には長頸壺、短頸壺の他、図示していないが広口壺などがある。壺蓋は短頸壺の蓋である。甕は中型、大型があり、中型の最大径で45〜50cm、大型では80cm程の最大径となる。器表面には條線状平行叩目文、格子叩目文などに刷毛目が併用され、器内面は同心円文を主とする青海波文と平行叩目文などが施される。横瓶（ヨコベ）は米俵状の円筒形の上部に口をもち、底部を改めて作り出さないことから不安定なものである。器表面には刷毛目文が多く、器内面は青海波文が主体となる。坏（ツキ）には高台の有無に依って2種類に分けられるが、大きさ的には同一で11〜13cm前後である。碗は大小の2種類があり、いずれも高台を有する。大碗は最大径14cm前後、小碗は同じく11cm前後である。

中世陶器には須恵器系と瓷器系陶器があるが、当遺跡で出土したものは須恵器系陶器に限られた。どちらも器種的には、甕・壺・鉢で同じであるが、その器形に異なりを見る。ここでは須恵器系中世陶器の模式図を掲げた。甕は遺跡での出土量は比較的少なく、また胴部の破片では壺A類と区別しがたい。口径40cmから50cmと大型のものであり器表面には條線状平行叩目文が施され、内面は無文の当具痕を止める。壺Aは器面の叩文などは甕と同様である。器高には大小あり、35cm〜45cm程である。壺Bは轆轤で一気に挽き上げるもので無文である。器高は20cm前後の範疇である。鉢は内面に擂目を有する言わゆる摺鉢が主体である。片口の有無があり、口径は主として30cm前後であるが、稀に20cm以下の小型のものも見る。

当遺跡出土遺物については、遺構内出土遺物、遺構外出土遺物を分けてそれぞれ、挿図、遺物一覧表、図版写真に依って示した。ここでは各々についての説明を省略する。

B　遺構出土の遺物

ＳＤ１号出土遺物（第22～24図、図版９～11）

第22図に示した１～46（挿図割付番号）は土師器である。堝、甕Ａ、甕Ｃ、坏類である。甕Ａ類の19の底部は回転糸切痕が見られる。第23図は須恵器である。壺Ａ、横瓶、坏蓋、坏、高台坏、大碗、甕である。第24図の内74～83までがＳＤ１号出土であり、須恵器系中世陶器の壺Ａ類と鉢である。

ＳＤ２号出土遺物（第24、25図、図版10～12）

第24図84からＳＤ２号出土遺物である。土師器では甕Ａ・Ｃ類、坏、碗、堝がある。この内92の口径17.5㎝の大碗は稀のものである。黒色処理を施された言わゆる内黒土器も多い。須恵器では104を一応壷Ａの長頸壷としたがやゝ不安もある。坏の内111の底部に見る回転糸切痕は稀少のものと言える。その他甕片がある。126は中世の鉢であり、他に砥石、軽石があるが時期を特定できない。

ＳＥ１号出土遺物（第26図、図版12）

土師器甕Ｃ、須恵器坏、甕など４点を図示したが、この他に坏細片２点がある。

ＳＥ２号出土遺物（第26図、図版12）

土師器の高台坏で内黒土器、須恵器甕、坏があり図示した。この他土師器坏・甕など３点、須恵器坏１点がある。

ＳＥ３号出土遺物　（第26図　図版12、13）

土師器坏・須恵器坏、甕がある。141は土師質土器のカワラケで中世の小坏である。唯一の出土遺物である。この他土師器坏、堝類須恵器坏など７点がある。

ＳＥ４号出土遺物　（第26図、図版13）

須恵器甕、坏蓋、坏がある142は歪の大きい破片で図の様な少径となったがより大型になるものであろう。図示しないものに須恵器坏、土師器甕Ａ類など４点がある。

ＳＥ５号出土遺物　（第26図　図版13）

須恵器坏、坏蓋、甕、土師質の不明物が１点ある。時期を異にする高坏の脚部とも考えられる。この他図版13－Ａに示した須恵器、土師器の細片が15点ある。

ＳＥ７号出土遺物　（第27図、図版13）

やゝ不確実なものもあるが土師器甕Ａ・Ｃ、坏、須恵器坏、甕がある。この他土師器２点、須恵器２点がある。

ＳＫ１号出土遺物　（第27図、図版14）

土師器甕Ｃ類、堝、坏、碗、須恵器では広口壷、壷Ａ，甕、皿、大碗を見る。187は中世陶器の鉢、188は軽石であり自然のものであろう。183の碗の内底には墨痕が残り、壁を欠いた後に硯に転用されたものであろう。この他須恵器片17点、土師器では坏類19点、甕類51点が検出されている。

ＳＫ２号出土遺物　（第28図　図版14、15）

土師器の碗類が主体で内黒土器３点を見る。その他甕Ａ・Ｃ、須恵器では広口壷、壷Ａ、坏、大碗がある。192の大碗は鉢と称した方が妥当かも知れない。この他土師器甕Ｃ細片５点がある。

ＳＫ３号出土遺物　（第28図、図版15）

図示できたのは203の土師器坏１点に過ぎないが、この他土師器甕１、坏２点がある。

ＳＫ４号出土遺物　（第28図、図版15）

須恵器坏２点を図示した。この他須恵器では壷１、甕１点、土師器では坏１、甕３点が検出されている。

ＳＫ５号出土遺物　（第28図、図版15）

206の水輪１点の出土である。荒い結晶の花崗岩製で表面は凹凸が多い。刻字の梵字バンは浅いＵ字状の彫りで一部に風化が進んでいる。五輪塔の塔身に当る水輪である。刻字の技法から室町時代初期頃のものと推定される。

ピット内出土遺物　（第28図、図版15）

Ｃ－３区及びＣ－２区に於ける２基のピットより数点の遺物が出土している。Ｃ－３区のピットよりは207の土師器坏、Ｃ－２区のピットよりは208の須恵器坏の他、同坏片１、土師器甕Ｃ類５点がある。

Ｃ　遺構外出土遺物

土　師　器

甕Ｃ類　（第29図、図版16）

209～227であり、器形全体を窺うものはなく、口縁部から肩部にかけての破片と胴部片である。211・213・243の薄肉のものと212などの厚肉のものとがあり、胴部に於ける内面には平行叩目文と刷毛目文で、同心円、青海波文は見られない。243は縮尺の関係で後方へ入れた。

甕Ａ類　（第29図、図版16）

228から232の底部のみの図示である。胴部は総て細片で文無である。

堝　（第29図、図版16）

233から242がある。殆んどは口縁部のみの細片であるが、233は口径36㎝、237・239は38㎝、236・238は40㎝の口径が推定される。241は口径34㎝の小型で薄肉である。

碗・皿類　（第30図、図版16・17）

244から258の碗は大小が見られさらに黒色処理を施された内黒土器が７点見られる。

259は内外面共に黒色処理された皿で稀少の内に入いる。260は大碗であり鉢の呼称がより符合する。底部は箆起しによる轆轤切離し痕が見られる。

須恵器

壷Ａ類　（第30図　図版17）

言わゆる長頸壷であり、262～264の３点がある。いずれも口縁部及び頸部の破片である。

壷Ｃ類　（第30図　図版17）

265の１点のみである。口縁部を欠失することから確実性を欠くが、胴部の形態から見てここに分類した。

甕　（第30・31図　図版17）

266から275が甕である。266は推定最大径48〜50㎝程の中型である。その他はいずれも細片で施文を見るのみである。格子叩目文・條線状平行叩目文に刷毛目を併用している。器内面は同心円、青海波文が多く一部に平行叩目文がある。

坏蓋・坏　（第31図　図版18）

276〜282の坏蓋はいずれも細片であり、撮部を見るものはない。坏は外開きぎみの器壁を有するものが多く、肉薄である。

碗類　（第32図　図版18）

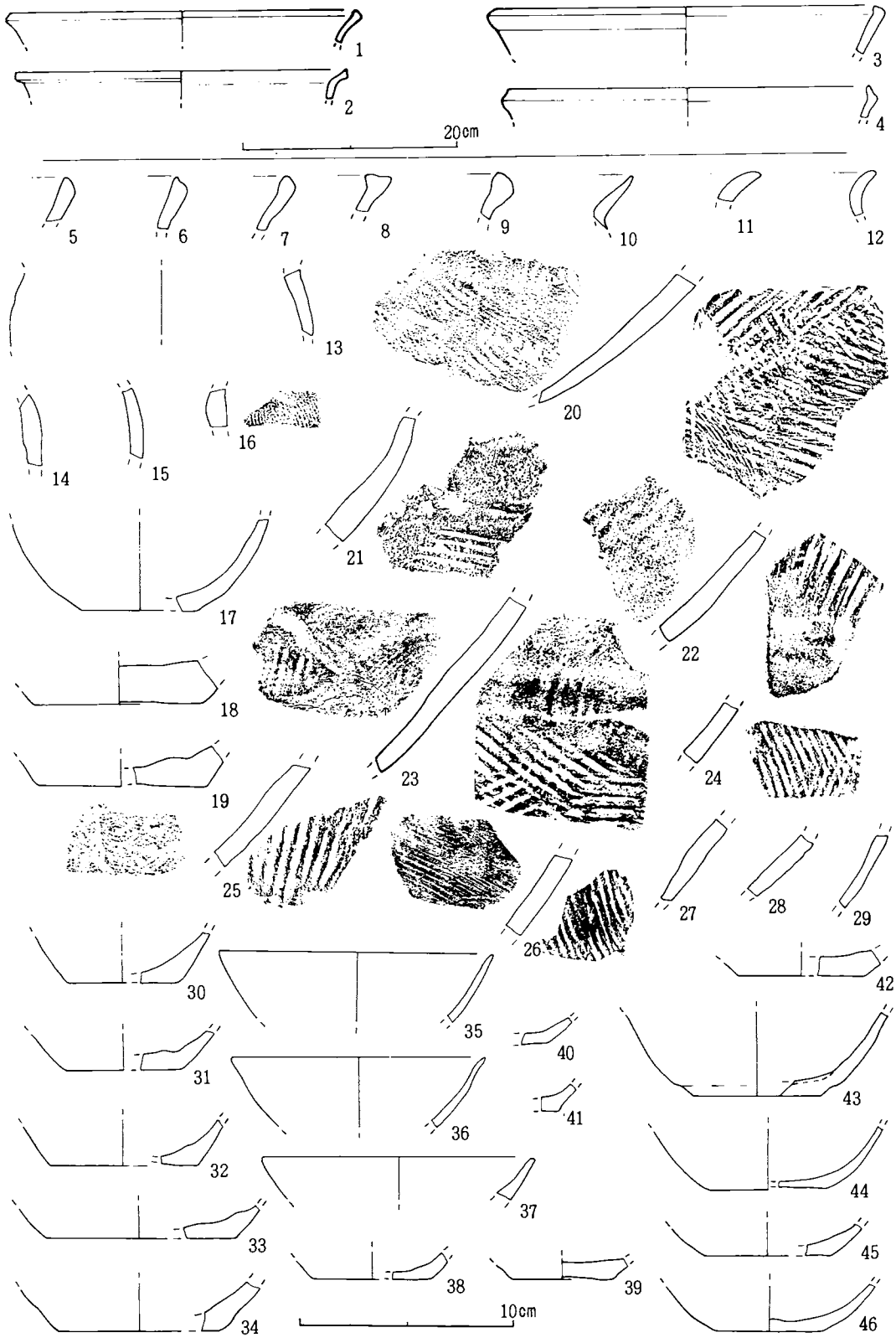
298〜303は大碗の範疇に入る。298の最大口径16㎝、301の最少12㎝までバラエティーに富む。304・305は小碗に部類する。304の口縁部の外返する形は稀である。

中世陶器　（第32図　図版18）

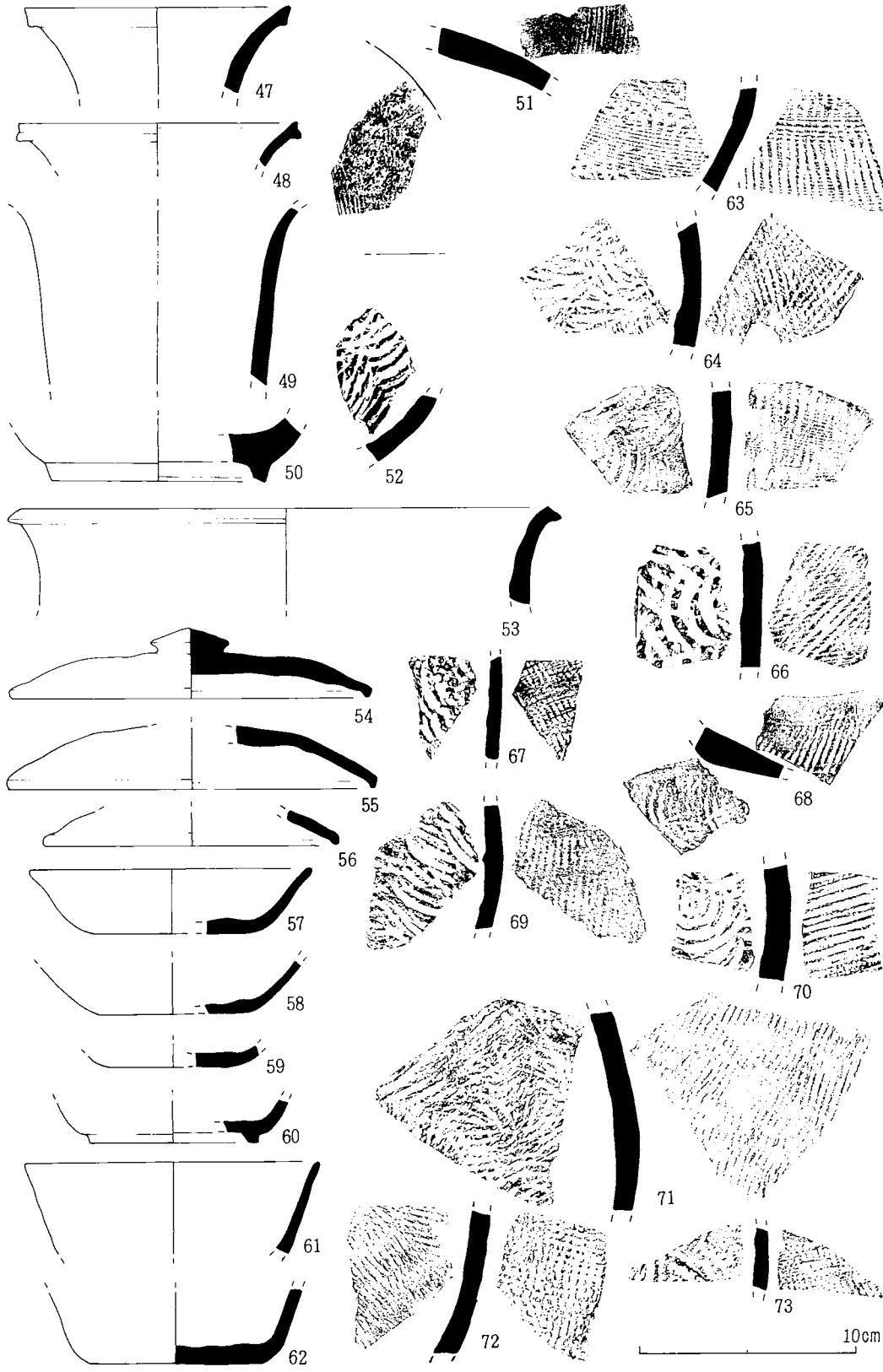
306から320はいずれも須恵器系中世陶器である。306〜309は壷Ａ類に属する。條線状平行叩目文と内面の当具痕が見え、307の内面には篦調整が加えられる。308は腰部と胴部の接合部分である。その他は鉢である。細片のため擂目を見ないものもあるが摺鉢と考えて良い。312は小さい反りの片口部分である。

その他の遺物　（第32図　図版19）

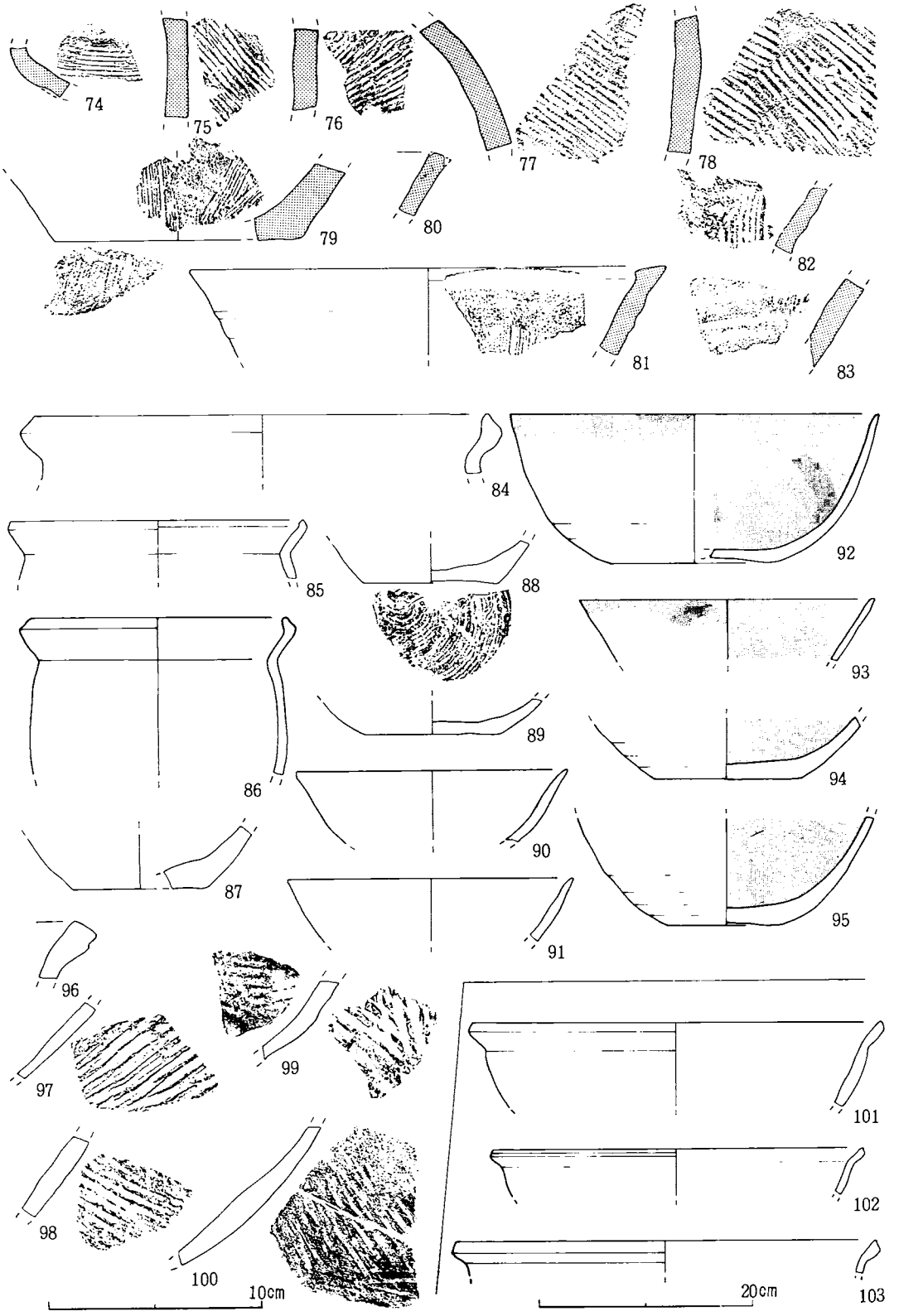
321は土師質の土垂で、漁網のおもりである。小口に成形時点の台座痕を残す。322は木炭で雑木の小枝を素材としている。323は流紋岩製で全面に磨きが施された小型石斧状の遺物である。324〜327は砥石で時期は不明である。328・329は自然の軽石であり使用の有無は不明である。



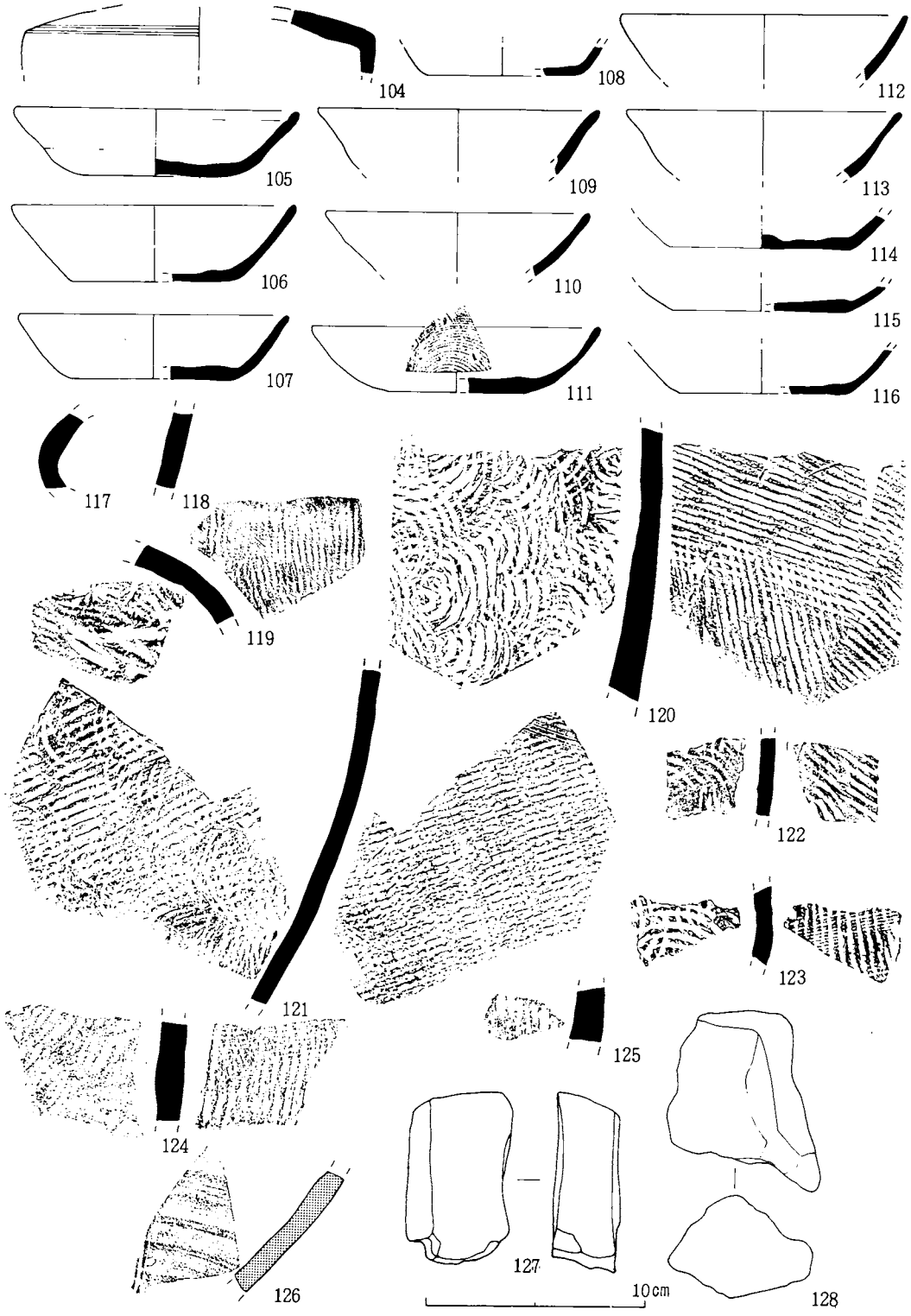
第22図　出土遺物１　　１号溝出土土師器



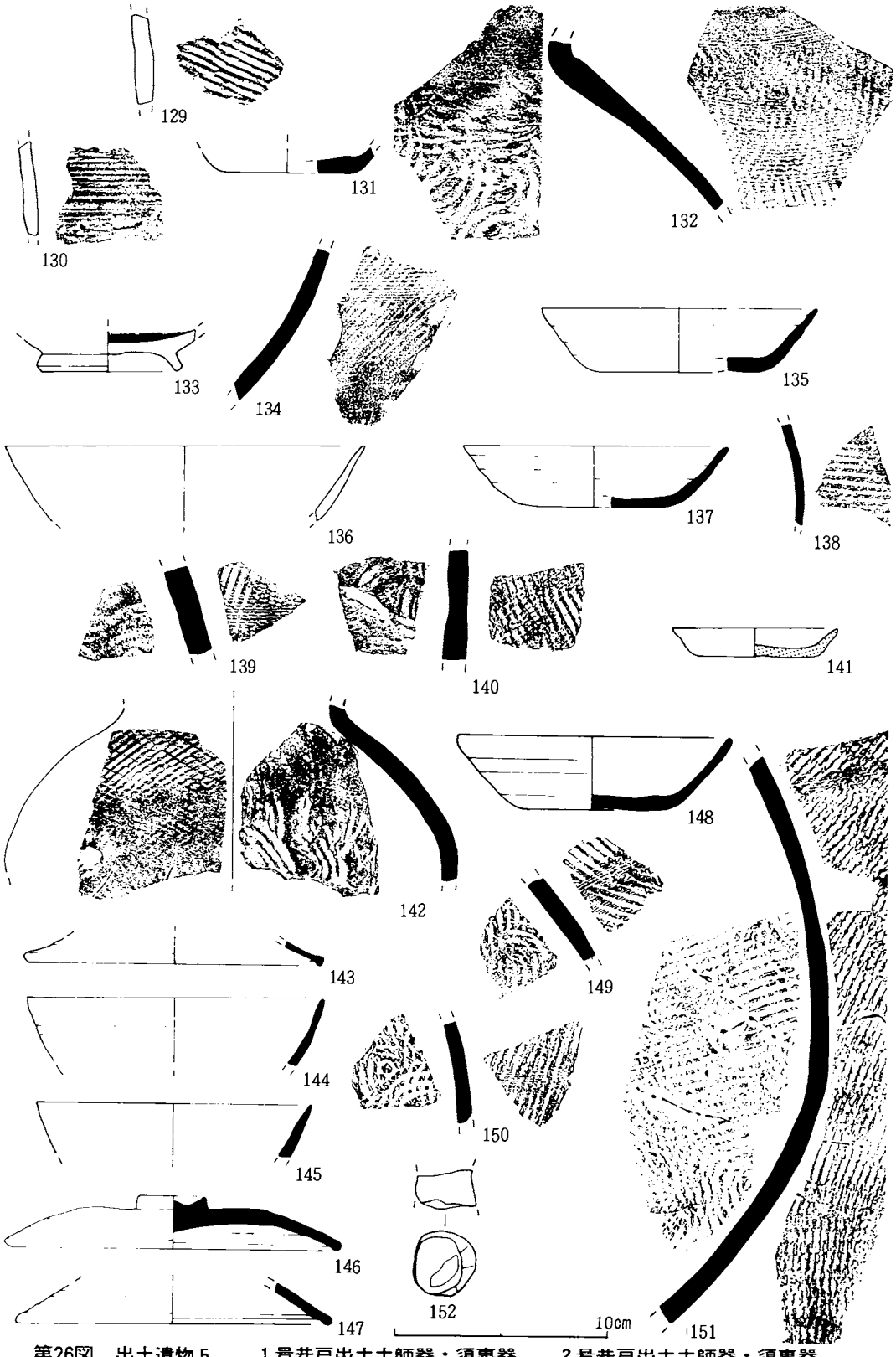
第23図　出土遺物２　　１号溝出土須恵器



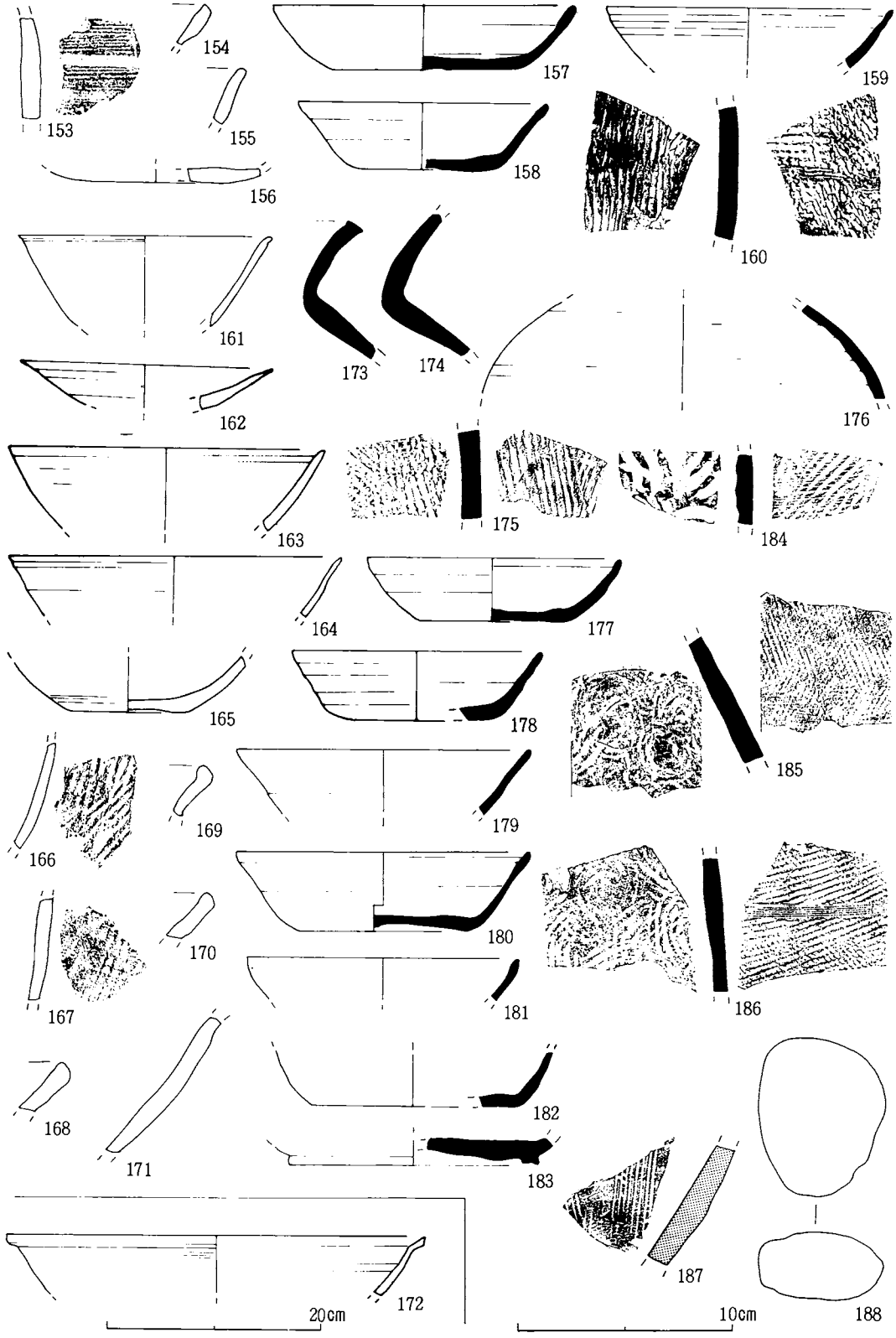
第24図　出土遺物 3　　1 号溝出土須恵器系中世陶器
2 号溝出土土師器



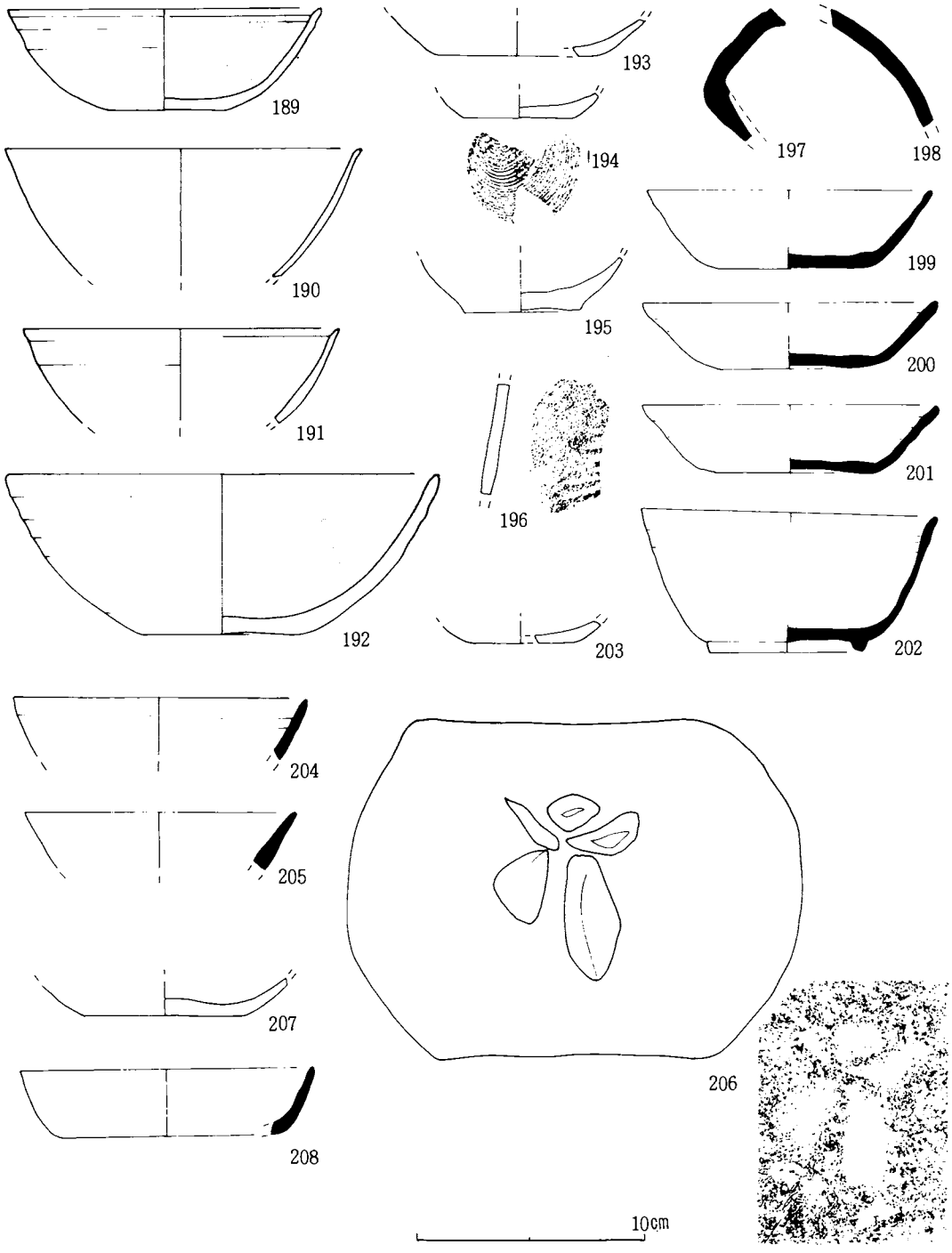
第25図　出土遺物４　　２号溝出土須恵器・須恵器系中世陶器・砥石



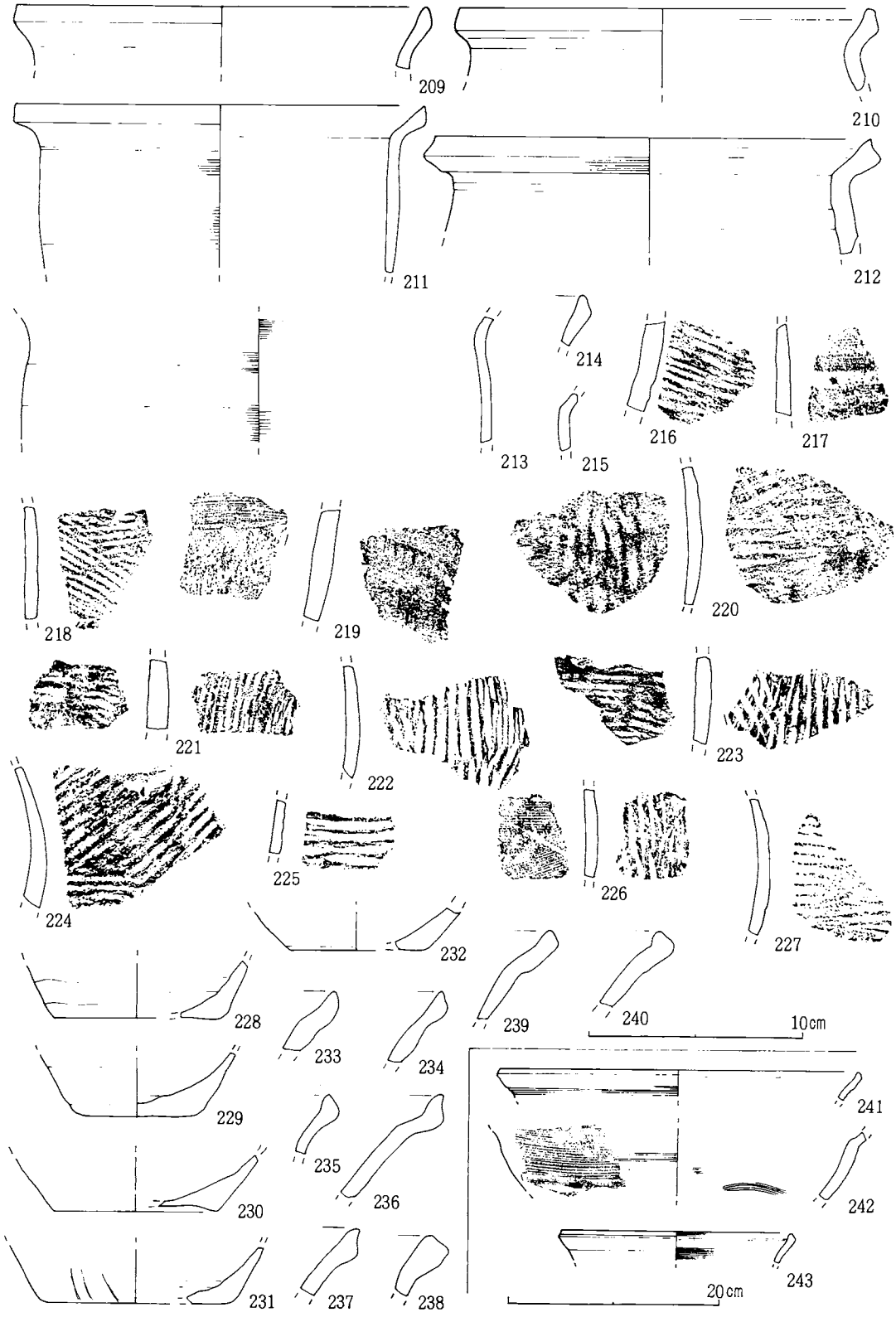
第26図　出土遺物５　　１号井戸出土土師器・須恵器　　２号井戸出土土師器・須恵器
３号井戸出土土師器・須恵器・カワラケ　　４号井戸出土須恵器
５号井戸出土須恵器・土製品



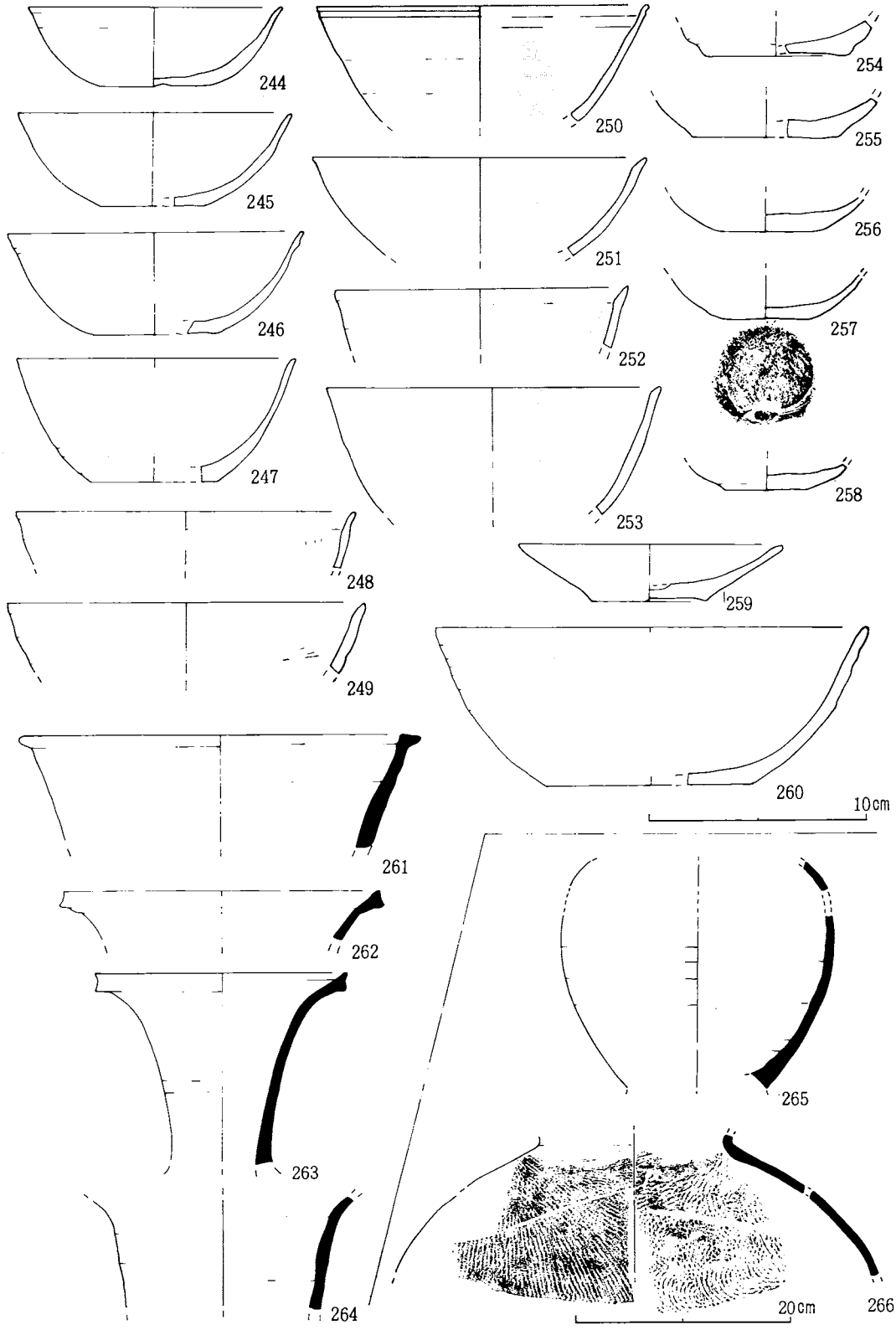
第27図　出土遺物 6　　7 号井戸出土土師器・須恵器
1 号土坑出土土師器・須恵器・須恵器系中世陶器　　軽　石



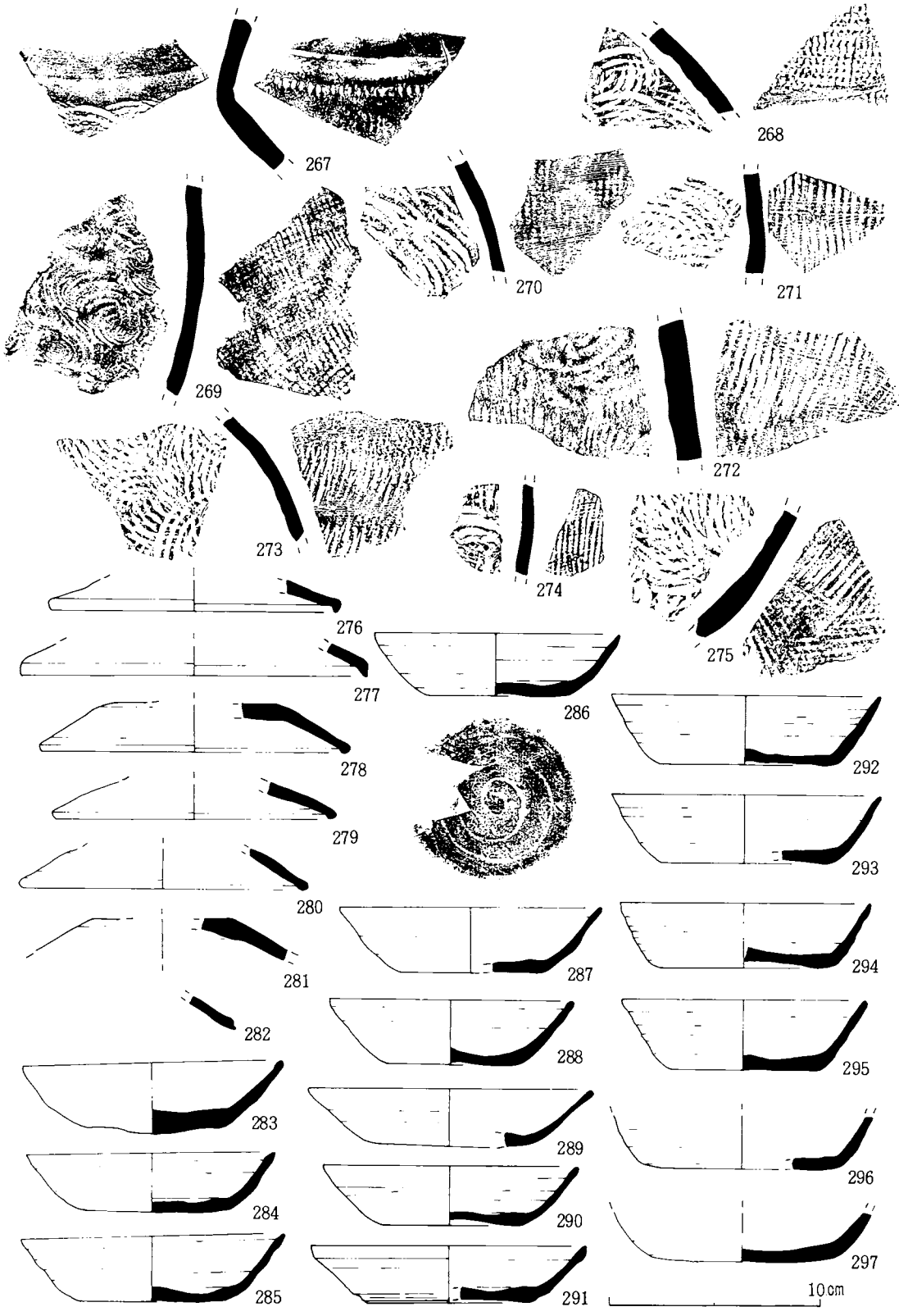
第28図　出土遺物７　　２号土坑出土土師器・須恵器　　３号土坑出土土師器
４号土坑出土須恵器　　５号土坑出土水輪
ピット出土土師器・須恵器



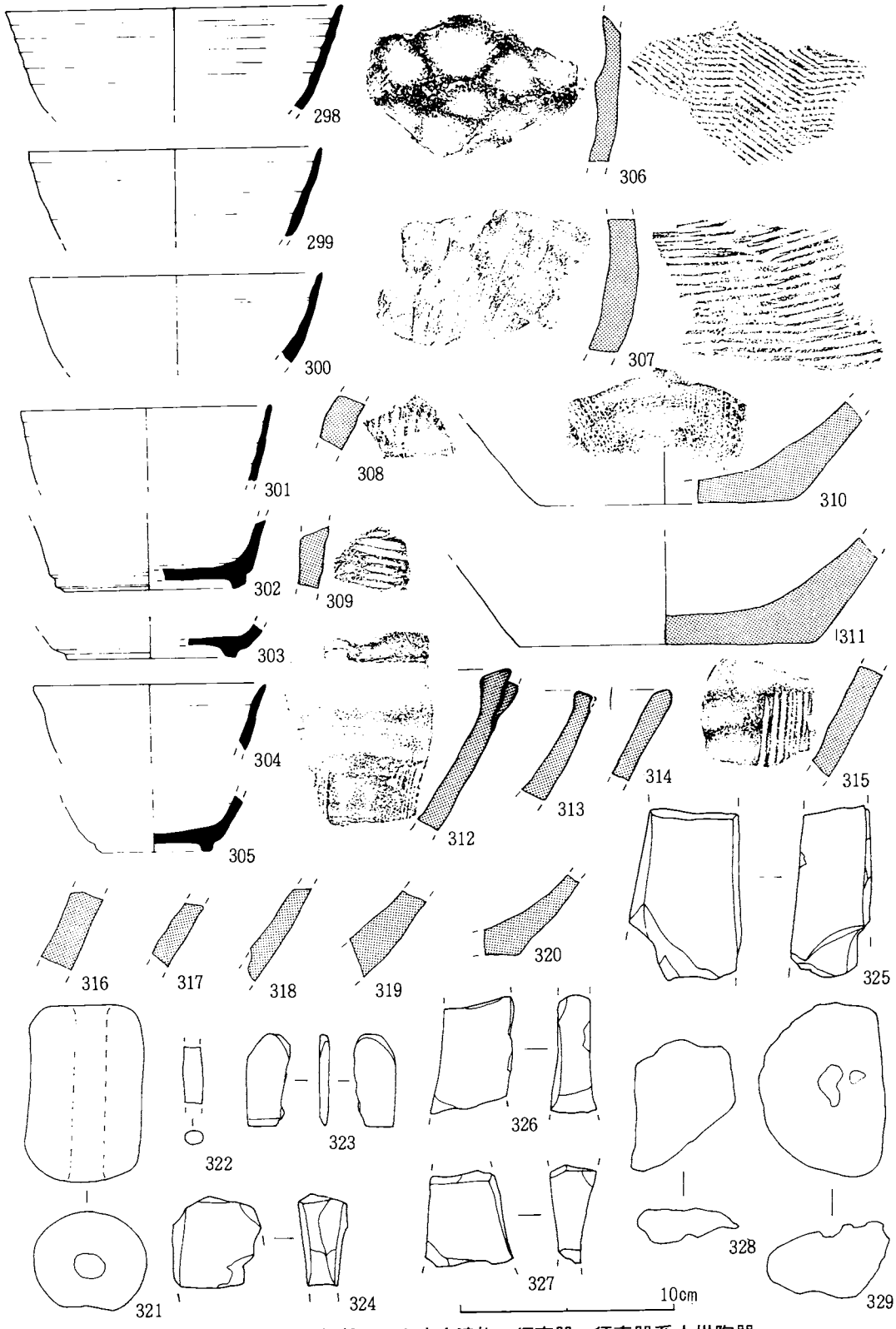
第29図　出土遺物８　　各グリット出土土師器



第30図　出土遺物 9　　各グリット出土土器・土師器・須恵器



第31図　出土遺物10　　各グリット出土須恵器



第32図　出土遺物11　　各グリット出土遺物・須恵器・須恵器系中世陶器・土垂・木炭・石器・砥石・軽石

Ⅲ　掲載遺物一覧表

図示した遺物を割付順に一覧表に示し、個々の遺物について挿図番号、割付番号（通し番号）、出土場所、器種を示し、計測として器高、口径、底径、最大径を記した。カッコ内の数値は推定である。又一部器以外の遺物の計測量をカッコで示した。遺物残存率はそれぞれの部分における円周率で12分法を用いて示した。造りは成形或は整形に見られる主な特徴を記した。スリップとは化粧土を上塗りしたもの、平行タタキ目文は條線状平行叩目文、ハケメは刷毛目文、回転糸切りは轆轤切離し痕である。胎土では粘土に混入させる砂粒の状況を記した。焼成はその度合いを良・中・不の三通りに分けた。備考では主に土器の残存部分を記した。

出土遺物一覧表

挿図No.	割付No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm） 器高	口径	底径	最大径	残存円周率 0/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
22	1	1073	SD－1	土師器	ナ　ベ		340			細片	ロクロ水挽		長石・粗砂粒	不	黄土色	黄土色	口縁部
	2	1072	〃	〃	〃		316			〃	〃	ハケメ	石英・粗砂粒	〃	ベージュ	黄白色	〃
	3	1070	〃	〃	〃		384			1	〃	ロクロ水挽	長石微粒	〃	黄白色	〃	〃
	4	1071	〃	〃	〃		358			細片	〃		石英・長石・雲母微	〃	ベージュ	ベージュ	〃
	5	1078	〃	〃	〃					〃			長石微粒	良	〃	〃	〃
	6	1076	〃	〃	〃					〃		ハケメ	長石微粒	〃	〃	〃	〃
	7	1074	〃	〃	〃					〃			長石・石英・雲母微	不	〃	〃	〃
	8	1075	〃	〃	〃					〃			長石微粒	〃	〃	〃	〃
	9	1077	〃	〃	〃					〃			長石粗粒	〃	〃	〃	〃
	10	1061	〃	〃	カメA					〃		スリップ	長石・雲母微粒	〃	〃	〃	〃
	11	1059	〃	〃	〃					〃		ハケメ	長石・微砂粒	良	黄土色	黄土色	〃
	12	1060	〃	〃	〃					〃			雲母微粒・粗砂	不	黄褐色	黄褐色	〃
	13	1062	〃	〃	〃				143	〃	ハケメ	ロクロ水挽・砂引	長石・雲母微粒	良	黄土色	黄土色	肩部
	14	1064	〃	〃	〃					〃	〃		長石・微砂粒	不	〃	白灰色	〃
	15	1063	〃	〃	〃					〃		ロクロ水挽	長石・雲母微粒	良	〃	黄土色	〃
	16	1065	〃	〃	〃					〃	ハケメ		長石粗粒・雲混	不	〃	黒褐色	〃
	17	1091	〃	〃	〃			56		2			長石・石英・粗粒	〃	赤茶色	赤茶色	胴部～底部
	18	1068	〃	〃	〃			80		1	ハケメ		長石・雲母微・雲混	〃	ベージュ	黄土色	底部
	19	1067	〃	〃	〃			79		1.5			長石・石英・粗砂粒	〃	黄白色	〃	糸切
	20	1080	〃	〃	ナ　ベ					細片	格子タタキ目文	平行タタキ目文・ハケメ	雲母微・微砂粒	〃	ベージュ	暗褐色	胴部
	21	1081	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文		石英粗粒	〃	黄土色	黄土色	〃
	22	1083	〃	〃	〃					〃	〃	ハケメ	長石・雲母微粒	〃	暗褐色	〃	〃
	23	1079	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	〃	長石・粗砂粒	〃	ベージュ	褐色	胴部磨耗
	24	1086	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	〃	長石微粒	良	〃	黄白色	胴部
	25	1084	〃	〃	〃					〃	〃	平行タタキ目文	長石・雲母微粒	不	褐色	黄土色	〃
	26	1082	〃	〃	〃					〃	〃	ハケメ	雲母微粒・微砂	良	〃	ベージュ	〃
	27	1109	〃	〃	〃					〃	〃		長石・石英・粗砂粒	不	茶色	〃	〃
	28	1107	〃	〃	〃					〃	〃		長石微粒	〃	黄土色	〃	〃
	29	1108	〃	〃	〃					〃	〃		長石微粒	〃	暗灰色	〃	〃
	30	1096	〃	〃	カメA			54		2			長石微粒・粗砂	〃	赤茶色	〃	底部

挿図No.	割付No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm） 器高	口径	底径	最大径	残存 円周率 0/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
22	31	1066	SD－1	土師器	カメA			55		3	ロクロ水挽	ロクロ水挽	密	不	ベージュ	ベージュ	底部
	32	1110	〃	〃	〃			70		細片	ロクロ水挽・スリップ	ハケメ	長石・微砂粒	〃	黄白色	黄白色	〃
	33	1111	〃	〃	〃			88		1	ロクロ水挽		粗砂粒・雲母微粒	〃	〃	〃	〃
	34	1112	〃	〃	〃			74		1			石英粗粒	〃	赤茶色	赤茶色	〃
	35	1052	〃	〃	坏		130			1.5	ロクロ水挽	ロクロ水挽・スリップ	密・長石微粒混	良	黄白色	ベージュ	
	36	1051	〃	〃	〃		121			1.5	〃	〃	密・微砂粒混	〃	ベージュ	黄白色	
	37	1055	〃	〃	〃		130			1	〃	ロクロ水挽	密	不	〃	黄土色	磨耗
	38	1054	〃	〃	〃					1	〃	〃	〃	〃	黄白色	黄白色	底部　磨耗
	39	1058	〃	〃	〃			48		5	〃	スリップ	密・雲母微粒	〃	赤茶色	黄土色	〃　〃
	40	1056	〃	〃	〃					細片	〃	ロクロ水挽	密	〃	黄土色	ベージュ	〃　〃
	41	1057	〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	ベージュ	〃	〃　〃
	42	1069	〃	〃	〃			60		3	〃	〃	長石・粗砂粒	良	赤茶色	赤茶色	〃　〃
	43	1053	〃	〃	〃			59		1.5	〃	〃	密	〃	黄土色	黄土色	糸切
	44	1050	〃	〃	〃			54		1.5	〃	〃	密・長石微粒	不	黄白色	黄白色	〃　磨耗
	45	1113	〃	〃	〃			59		1.5	スリップ		密	良	ベージュ	ベージュ	
	46	1049	〃	〃	〃			48		11	ロクロ水挽	ロクロ水挽	密・雲母微粒	〃	黄白色	黄白色	糸切
23	47	139	〃	須恵器	壷A		126			10	〃	〃	長石微粒	〃	黒色	暗灰色	口縁部
	48	140	〃	〃	〃		132			2	〃	〃	長石粗粒	〃	灰色	黄灰色	〃
	49	108	〃	〃	〃					1	〃	〃	長石微粒	〃	〃	灰色	頸部
	50	109	〃	〃	〃			100		1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底部
	51	110	〃	〃	横瓶					細片	ハケメ	〃	〃	〃	〃	〃	胴部
	52	111	〃	〃	〃					〃	〃	青海波文	〃	〃	緑釉	〃	自然釉、胴部
	53	114	〃	〃	カメ		248			〃	ロクロ水挽	ロクロ水挽	〃	〃	黒灰色	〃	口縁部
	54	97	〃	〃	坏蓋	32	170			2	〃	〃	〃	〃	灰色	〃	
	55	98	〃	〃	〃		(172)			1	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰色	
	56	99	〃	〃	〃		140			1	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
	57	100	〃	〃	坏	30	132	72		2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	58	102	〃	〃	〃			70		2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	59	104	〃	〃	〃			60		2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	60	105	〃	〃	高台坏			80		2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	61	103	〃	〃	大碗		140			1.5	〃	〃	〃	〃	暗灰色	〃	
	62	101	〃	〃	坏			80		5	〃	〃	〃	〃	灰色	〃	
	63	117	〃	〃	カメ					細片	斜行タタキ目文・ハケメ	青海波・ハケメ	長石・雲母微粒	〃	〃	〃	自然釉、胴部
	64	122	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	青海波	長石粗粒	〃	黒灰色	〃	胴部
	65	124	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文・ハケメ	〃	〃	不	白灰色	白灰色	〃
	66	123	〃	〃	〃					〃	斜行タタキ目文・ハケメ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	67	125	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	〃	長石微粒	良	灰色	灰色	〃
	68	116	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	〃	〃	〃	〃	〃	肩部
	69	119	〃	〃	〃					〃	斜行タタキ目文・ハケメ	〃	長石粗粒	〃	暗灰色	〃	胴部
	70	121	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	同心円文	長石微粒	〃	黒灰色	〃	〃
	71	120	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	平行タタキ目文	長石・雲母微粒	不	〃	褐色	〃
	72	118	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	〃	緻密	良	暗灰色	灰色	〃
	73	126	〃	〃	〃					〃	〃	〃	長石微粒	〃	灰色	〃	〃
24	74	2029	〃	中世陶器	壷A					〃	平行タタキ目文		長石粗粒	〃	黒色	黒灰色	肩部
	75	2006	〃	〃	〃					〃	〃	平行タタキ目文	長石微粒・微砂粒	〃	灰色	灰色	
	76	2008	〃	〃	〃					〃	〃		〃	〃	〃	〃	
	77	2009	〃	〃	〃					〃	〃		〃	〃	〃	〃	
	78	2007	〃	〃	〃					〃	〃	ヘラ調整	〃	〃	〃	〃	
	79	2010	〃	〃	鉢			120		2	ロクロ水挽	オロシ目	〃	〃	〃	〃	底部
	80	2003	〃	〃	〃					細片	〃	ロクロ水挽	長石・雲母微粒	〃	〃	〃	口縁部
	81	2002	〃	〃	〃		228			1.5	〃	オロシ目	長石微粒・微砂粒	〃	黒色	黒灰色	自然釉、口縁部
	82	2004	〃	〃	〃					細片	〃	〃	〃	中	灰色	灰色	

挿図No.	割付No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm） 器高	口径	底径	最大径	長存円周率 0/12	造り 器表	器内	胎土	焼成	色 器表	器内	備考
24	83	2005	SD－1	中世陶器	鉢					細片	ロクロ水挽	オロシ目	長石微粒・微砂粒	良	灰色	灰色	
	84	1093	SD－2	土師器	カメC		216			1	〃		長石・石英微粒・微砂粒	不	赤茶色	赤茶色	口縁部
	85	1092	〃	〃	カメA		140			1	〃		長石・石英微粒・雲母微粒	〃	黄白色	黄白色	〃
	86	1090	〃	〃	〃		120			4			長石・石英粗粒	〃	赤茶色	赤茶色	口縁～胴部
	87	1095	〃	〃	〃			62		3			〃	〃	ベージュ	黄白色	底部
	88	1094	〃	〃	〃			65		6	回転糸切		〃	良	〃	ベージュ	
	89	1087	〃	〃	坏			60		3	ロクロ水挽	ロクロ水挽	長石・雲母微粒	不	〃	〃	
	90	1088	〃	〃	〃		130			1	〃	〃	石英・雲母微粒	良	〃	〃	
	91	1089	〃	〃	〃		138			1.5	〃	〃	長石粗粒・雲母微粒	〃	赤茶色	赤茶色	
	92	1042	〃	〃	大碗	72	175	80		5	〃	黒色処理	石英粗粒多	中	黄白・黒	黒	風化
	93	1045	〃	〃	碗		140			3	〃	〃	微砂粒	〃	〃	〃	
	94	1044	〃	〃	〃			70		6	ヨコナデ・スリップ	〃	粗砂粒多	〃	黄白色	〃	
	95	1043	〃	〃	〃			55		5	ヘラ調整	〃	石英・雲母粗粒	良	薄茶	〃	
	96	1100	〃	〃	ナベ					細片	ロクロ水挽	ハケメ	長石粗粒	不	ベージュ	ベージュ	口縁部
	97	1106	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文		石英・雲母粗粒	〃	茶色	茶色	胴部
	98	1105	〃	〃	〃					〃	〃	平行タタキ目文	長石粗粒	〃	黄白色	ベージュ	〃
	99	1104	〃	〃	〃					〃	〃	〃	長石微粒	良	暗褐色	黄白色	〃
	100	1101	〃	〃	〃					〃	〃		〃	〃	ベージュ	〃	〃
	101	1097	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文・ロクロ水挽	ロクロ水挽	長石粗粒・粗砂粒	不	〃	〃	口縁～胴部
	102	1098	〃	〃	〃					〃			〃	良	褐色	黄土色	〃
	103	1099	〃	〃	〃					〃	ロクロ水挽	ロクロ水挽	〃	不	黄白色	黄白色	口縁部
25	104	142	〃	須恵器	壺A				160	1	〃		長石微粒	良	灰色	灰色	自然釉
	105	127	〃	〃	坏	31	128	68		7	〃	ロクロ水挽	〃	不	〃	〃	肩部
	106	128	〃	〃	〃	35	130	73		3	〃	〃	長石粗粒・礫混	〃	白灰色	白灰色	
	107	129	〃	〃	〃	30	126	74		2	〃	〃	微砂粒	良	暗灰色	暗灰色	
	108	138	〃	〃	〃			70		1	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
	109	134	〃	〃	〃		130			1	〃	〃	長石微粒・微砂粒	〃	灰白色	灰白色	
	110	133	〃	〃	〃		120			1.5	〃	〃	密	〃	灰色	灰色	
	111	130	〃	〃	〃	30	134	62		2	〃	〃	長石微粒	〃	〃	〃	糸切
	112	132	〃	〃	〃		130			1	〃	〃	長石・雲母微粒	〃	〃	〃	
	113	131	〃	〃	〃		124			3	〃	〃	長石微粒	〃	〃	〃	
	114	135	〃	〃	〃			81		3	〃	〃	〃	〃	黒灰色	黒灰色	
	115	137	〃	〃	〃			80		1	〃	〃	〃	不	灰色	灰色	
	116	136	〃	〃	〃			76		1.5	〃	〃	〃	良	〃	〃	
	117	141	〃	〃	カメ					細片	〃	〃	粗砂粒	〃	〃	〃	頸部
	118	148	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	青海波	長石微粒	〃	黒色	〃	自然釉
	119	143	〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	灰白色	〃	肩部
	120	147	〃	〃	〃					〃	〃	〃	長石粗粒・礫混	〃	黒灰色	灰褐色	胴部
	121	144	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文・ハケメ	平行タタキ目文・青海波文	長石微粒	〃	暗灰色	灰色	〃
	122	146	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	青海波文	〃	〃	黒灰色	暗灰色	〃
	123	145	〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	124	149	〃	〃	〃					〃	〃	〃	長石粗粒	〃	灰色	〃	〃
	125	150	〃	〃	〃					〃		〃	長石微粒	〃	〃	灰色	〃
	126	2013	〃	中世陶器	鉢					〃	ロクロ水挽	摺目	〃	〃	暗灰色	暗灰色	
	127	2112	〃	石	砥石	(80×48×32)											
	128	2113	〃	〃	軽石	(85×65×50)											天然
26	129	1024	SE－1	土師器	カメC					細片	平行タタキ目文	ナデ	石英粗粒	中	焦茶色	ベージュ	
	130	1025	〃	〃	〃			65		〃	ハケメ	〃	粗砂粒	〃	ベージュ	黄茶色	
	131	26	〃	須恵器	坏			60		2	ロクロ水挽		微砂粒	良	灰色	灰色	
	132	25	〃	〃	カメ					細片	格子タタキ目文	青海波文	石英・長石粗粒	〃	〃	〃	肩部片
	133	1026	SE－2	土師器	高台坏					7		黒色処理	石英粗粒	中	黄白色	黒	
	134	28	〃	須恵器	カメ					細片	平行タタキ目文・ハケメ	青海波文	石英・長石粗粒	良	明灰色	薄灰色	

挿図No.	登録No.	付図No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm）器高	口径	底径	最大径	残存円周率 0/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
26	135	27		SE－2	須恵器	坏	30	130	80		2	ロクロ水挽		微砂粒	良	灰色	灰色	
	136	1027		SE－3	土師器	〃		170			1	〃	ロクロ水挽	石英粗粒	〃	ベージュ	ベージュ	
	137	29		〃	須恵器	〃	29	125	70		5	〃	〃	微砂粒	〃	明灰色	明灰色	
	138	32		〃	〃	カメ					細片	平行タタキ目文	青海波文	長石粗粒	〃	〃	灰色	
	139	31		〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文・ハケメ	〃	〃	〃	灰色	薄灰色	
	140	30		〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
	141	1028		〃	中世陶器	カワラケ	14	78	60		2	ロクロ水挽	ロクロ水挽	石英微粒	不	黒色	黒色	いぶし仕上げ
	142	33		SE－4	須恵器	カメ				213	1.5	格子タタキ目文	青海波文	微砂粒	良	鉄色	灰色	肩～胴部
	143	35		〃	〃	坏蓋		140			1	ロクロ水挽	ロクロ水挽	〃	〃	薄灰色	明灰色	鉄釉
	144	34		〃	〃	坏		140				〃	〃	〃	〃	〃	薄灰色	口縁部
	145	38		SE－5	〃	〃		130			2	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	〃
	146	36		〃	〃	坏蓋	25	160			8	〃	〃	長石粗粒	〃	明灰色	明灰色	気泡ゆがみ
	147	63		〃	〃	〃		150			2.5	〃	〃	長石微粒	〃	薄灰色	薄灰色	
	148	37		〃	〃	坏	35	130	70		7	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	
	149	40		〃	〃	カメ					細片	格子タタキ目文・ハケメ	青海波文	微砂粒	〃	〃	〃	肩部
	150	39		〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文・ハケメ	同心円文	粗砂粒	〃	〃	〃	胴部
	151	41		〃	〃	〃				50	3	〃	青海波文	微砂粒	〃	緑灰色	明灰色	自然釉
	152	1160		〃	土師器	不明				30				〃	不	黄茶色		脚部カ
27	153	1029		SE－7	〃	カメC					細片	ハケメ	ヨコナデ	石英粗粒	良	茶色	薄茶色	肩部
	154	1031		〃	〃	カメA					〃			微砂粒	不	黄白色	〃	口縁部
	155	1030		〃	〃	〃					〃			石英微粒	〃	〃	黄白色	〃
	156	1032		〃	〃	坏					4			粗砂粒	〃	白茶色	白茶色	底部
	157	43		〃	須恵器	〃	30	145	90		4	水挽	水挽	微砂粒	良	灰色	灰色	左ロクロ
	158	42		〃	〃	〃	32	120	70		5	〃	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	
	159	44		〃	〃	〃		135			2	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	
	160	45		〃	〃	カメ					細片	格子タタキ目文・ハケメ	平行タタキ目文	〃	〃	暗灰色	薄灰色	
	161	1004		SK－1	土師器	碗		(120)			1	水挽	水挽・ミガキ	石英微粒	〃	白茶色	黒色	内黒土器
	162	1002		〃	〃	Ⅲ		120			2	〃	黒色処理	〃	中	〃	〃	〃 外反
	163	1003		〃	〃	碗		150			1.5	〃	黒色処理・ミガキ	〃	良	〃	〃	〃
	164	1005		〃	〃	〃		156			2	〃	水挽	〃	中	黄白色	黄白色	肉薄
	165	1001		〃	〃	〃			55		7	〃	黒色処理	石英粗粒	〃	〃	黒色	内黒土器
	166	1011		〃	〃	カメC					細片	平行タタキ目文		粗砂粒	〃	〃	黄白色	風化
	167	1012		〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文	ヨコナデ	石英粗粒	〃	薄茶色	〃	
	168	1008		〃	〃	ナベ					〃	ヨコナデ	〃	〃	不	黄白色	茶色	
	169	1009		〃	〃	〃					〃	〃	〃	石英・長石粗粒	中	茶色	〃	
	170	1007		〃	〃	〃					〃	水挽ヨコナデ	〃	〃	良	黄白色	〃	
	171	1010		〃	〃	〃					〃	タタキ目文		粗砂粒	中	薄茶色	薄茶色	風化
	172	1006		〃	〃	〃		400			1	水挽	水挽	石英・長石粗粒		茶色	茶色	〃
	173	9		〃	須恵器	広口壷					細片	平行タタキ目文	ハケメ	石英粗粒	良	明灰色	灰色	口頸部
	174	10		〃	〃	〃					〃	〃	ヨコナデ	長石荒粒多	〃	〃	明灰色	頸部
	175	14		〃	〃	カメ					〃	格子タタキ目文	平行タタキ目文	長石微粒	〃	灰色	薄灰色	胴部
	176	8		〃 A－1	〃	壷A					2.5	水挽	水挽	石英・雲母微粒	〃	緑灰色	明灰色	肩部
	177	2		SK－1	〃	坏	30	120	70		4	〃	〃	石英微粒	〃	明灰色	〃	左ロクロ、ヘラオコシ
	178	3		〃	〃	〃	33	110	82		3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	179	5		〃	〃	〃		140			2	〃	〃	粗砂粒	〃	灰色	灰色	外反
	180	1		〃	〃	〃	37	140	80		8	〃	〃	長石微粒	〃	〃	〃	左ロクロ、ヘラオコシ
	181	6		〃	〃	〃		130			1	〃	〃	微砂粒	〃	白灰色	白灰色	内湾
	182	4		〃	〃	〃			100		3	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	内部炭化物付着
	183	7		〃	〃	大碗			110		3	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰色	内底、墨浪
	184	15		〃	〃	カメ					細片	平行タタキ目文・ハケメ	青海波文	石英微粒	〃	白灰色	白灰色	胴部
	185	12		〃	〃	〃					〃	格子タタキ目文・ハケメ	同心円文	長石微粒	〃	暗灰色	灰色	〃
	186	13		〃	〃	〃					〃	〃	青海波文	〃	〃	〃	暗灰色	〃

挿図No.	登録No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測(mm) 器高	口径	底径	最大径	農存円周率 C/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
27	187	2001	SK－1	中世陶器	鉢					細片	ロクロ水挽	櫛目	長石微粒・粗砂粒	良	白灰色	白灰色	
	188	2111	〃	軽石		(77×60×33)											
28	189	1014	SK－2	土師器	碗	46	140	55		6	水挽	黒色処理	石英粗粒	中	黄白・黒色	黒色	肉薄
	190	1016	〃	〃	〃		160			3	スリップ	スリップ	荒砂粒	良	黄茶色	薄茶色	〃 口縁部
	191	1015	〃	〃	〃		140			3	水挽	黒色処理	石英粗粒	〃	白茶・黒色	黒色	〃
	192	1013	〃	〃	〃	72	190	80	195	6	〃	〃	〃	中	ベージュ	〃	〃
	193	1019	〃	〃	坏			80		2.5	ロクロ水挽	ロクロ水挽	石英微粒	〃	黄白色	ベージュ	底～腰部
	194	1018	〃	〃	〃			50		7	回転糸切	水挽	〃	良	褐色	〃	底部
	195	1017	〃	〃	〃			52		8	スリップ	スリップ	粗砂粒	〃	茶色	茶色	底～腰部
	196	1020	〃	〃	カメC					細片	平行タタキ目文	ハケメ	粗砂粒多	〃	焦茶色	明茶色	胴部
	197	20	〃	須恵器	広口壺					〃	ヨコナデ	ヨコナデ	粗砂粒	〃	明灰色	明灰色	鉄釉、口縁部
	198	21	〃	〃	壺A					〃	ロクロ水挽		微砂粒	〃	緑灰色	〃	灰釉、肩部
	199	18	〃	〃	坏	35	125	65		7	〃		長石粗粒	〃	明灰色	〃	左ロクロ
	200	16	〃	〃	〃	30	130	65		12	〃		長石微粒	〃	〃	灰色	右ロクロ
	201	17	〃	〃	〃	30	130	70		12	〃		長石粗粒	〃	〃	明灰色	左ロクロ
	202	19	〃	〃	大碗	63	130	67		12	〃		微砂粒	〃	〃	〃	〃
	203	1021	SK－3	土師器	坏			50		4			石英粗粒	中	黄白色	薄灰色	底部片
	204	22	SK－4	須恵器	〃		130			1	ロクロ水挽		微砂粒	良	灰色	灰色	口縁部
	205	23	〃	〃	〃					1	〃		〃	〃	〃	〃	鉄釉
	206	2101	SK－5	石	水輪	151	上125	下118	204	12			花崗岩				パン
	207	1023	C-3Pit	土師器	坏			70		5		黒色処理	石英粗粒	不	白茶色	黒色	
	208	24	C-2Pit	須恵器	〃	30	130	90		1	水挽		微砂粒	中	薄灰色	薄灰色	
29	209	1129	B－4	土師器	カメC		200			1	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	〃	黄白色	黄白色	口縁部
	210	1128	B－5	〃	〃		200			1	〃	〃	粗砂粒多	〃	薄茶色	茶色	〃
	211	1126	A－5	〃	〃		200			2	ハケメ		石英粗粒多	不	黄白色	黄白色	風化
	212	1127	B－5	〃	〃		210			1.5	ヨコナデ	ヨコナデ	粗砂粒	中	薄茶色	茶色	口縁部
	213	1149	A－4	〃	〃					1.5	ハケメ	ハケメ	〃	良	ベージュ	ベージュ	頸部
	214	1131	A－5	〃	〃						風化	風化	〃	不	黄白色	黄白色	
	215	1114	B－5	〃	〃					細片			微砂粒	中	茶色	茶色	頸部
	216	1103	D－2	〃	〃					〃	平行タタキ目文	ハケメ	雲母微粒	良	黒茶色	黄褐色	器表炭化物
	217	1150	B－5	〃	〃					〃	ハケメ	ヨコナデ	粗砂粒	中	ベージュ	ベージュ	胴部
	218	1159	〃	〃	〃					〃	平行タタキ目文	ハケメ	〃	〃	焦茶色	白茶色	
	219	1147	〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	良	茶色	焦茶色	胴部
	220	1152	C－5	〃	〃					〃	〃	平行タタキ目文	〃	中	焦茶色	黄白色	〃
	221	1156	B－3	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	茶色	薄茶色	〃
	222	1153	A－4	〃	〃					〃	〃	ナデ	微砂粒	良	焦茶色	暗茶色	〃
	223	1155	D－5	〃	〃					〃	〃	平行タタキ目文	〃	〃	茶色	茶色	〃
	224	1151	A－5	〃	〃					〃	〃	ヨコナデ	粗砂粒	中	黄茶色	ベージュ	〃
	225	1158	A－6	〃	〃					〃	〃	ナデ	〃	良	黄白色	黄白色	〃
	226	1154	C－5	〃	〃					〃	〃	ハケメ	〃	〃	焦茶色	茶色	〃
	227	1157	B－4	〃	〃					〃	〃	ナデ	荒砂多	中	〃	黄白色	〃
	228	1136	〃	〃	カメA			80		2	ヨコナデ	水挽	石英粗粒	〃	ベージュ	ベージュ	底部
	229	1134	B－5	〃	〃			55		9	〃	〃	〃	〃	茶色	茶色	〃
	230	1135	C－5	〃	〃			80		3	〃	〃	〃	良	焦茶色	白茶色	〃
	231	1137	A－4	〃	〃			90		1.5	ヘラ調整	〃	〃	中	ベージュ	ベージュ	〃
	232	1138	B－4	〃	〃			70		2	スリップ		〃	良	焦茶色	白茶色	〃
	233	1144	〃	〃	ナベ				36	1.5	ヨコナデ	ハケメ	石英粗粒多	〃	黄白色	黄茶色	口縁部
	234	1145	A－3	〃	〃					細片	風化	風化	粗砂粒	不	〃	黄白色	〃
	235	1132	C－5	〃	〃					〃	ヨコナデ	ハケメ	粗砂粒多	中	白茶色	ベージュ	〃
	236	1139	〃	〃	〃				40	〃	〃	ヨコナデ	長・石英粗粒多	良	茶色	茶色	〃
	237	1142	B－3	〃	〃				38	〃	〃	風化	〃	〃	黄茶色	黄茶色	〃 スリップ
	238	1140	D－5	〃	〃				40	〃	風化	ハケメ	石英粗粒多	不	〃	〃	〃

挿図No.	割付No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm） 器高	口径	底径	最大径	残存円周率 0/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
29	239	1141	C－6	土師器	ナ　ベ				38	細片	ハ　ケ　メ	ハ　ケ　メ	石英粗粒多	中	黄茶色	黄茶色	口縁部
	240	1143	C－5	〃	〃				40	〃	ヨ　コ　ナ　デ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	241	1133	B－5	〃	〃		340			1			粗砂粒多	不	白茶色	白茶色	〃　風化
	242	1146	C－5	〃	〃					1.5	ハ　ケ　メ	ハ　ケ　メ	石英粗粒・粗砂粒	中	茶　色	薄茶色	胴部
	243	1130	A－4	〃	カメC		220			1	ヨ　コ　ナ　デ	〃	微砂粒	〃	ベージュ	ベージュ	口縁部
30	244	1035	B－5	〃	碗	38	120	50		6	ロクロ水挽・ナデ	ロ　ク　ロ　水　挽	〃	〃	〃	〃	丸底
	245	1034	B－4	〃	〃	45	130	50		5	〃	〃	石英・長石・荒砂多	良	茶　色	茶　色	
	246	1036	B－5	〃	〃	49	140	50		5	〃	〃	微砂粒	不	ベージュ	ベージュ	肉薄
	247	1046	C－5	〃	〃	59	132	60		4	水　挽	黒色処理	〃	中	白茶色	黒　色	
	248	1122	A－2	〃	〃		160			1	黒色処理	〃	〃	良	黒　色	〃	
	249	1123	〃	〃	〃		170			1	ロ　ク　ロ　水　挽	〃	〃	〃	白茶色	〃	
	250	1048	B－4	〃	〃		160			2	〃	〃	石英粗粒多	中	黄白色	〃	
	251	1047	〃	〃	〃		160			3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	風化
	252	1121	A－2	〃	〃		140			1	〃	〃	〃	良	白茶色	〃	
	253	1124	〃	〃	〃		160			1	〃	〃	〃	不	黄白色	〃	風化、剥離
	254	1038	B－4	〃	〃			70		3		ロ　ク　ロ　水　挽	微砂粒	中	〃	黄白色	底部
	255	1039	〃	〃	〃			70		5	ス　リ　ッ　プ		荒砂粒	〃	ベージュ	ベージュ	
	256	1040	B－5	〃	〃			55		6		ロ　ク　ロ　水　挽	〃	良	〃	〃	風化
	257	1037	〃	〃	〃			40		12	ロクロ水挽・ナデ	〃	粗砂粒	中	〃	黄白色	糸切
	258	1041	〃	〃	〃			40		12			石英・荒粒多	〃	〃	ベージュ	風化、底部
	259	1125	〃	〃	皿	27	125	55		7	黒色処理	黒色処理	微砂粒	不	白茶・黒色	黒　色	〃
	260	1033	〃	〃	大　碗	75	208	100		3	ロクロ水挽・ナデ	ロ　ク　ロ　水　挽	石英粗粒	良	ベージュ	焦茶色	
	261	81	B－3	須恵器	カ　メ		190			3	ヨ　コ　ナ　デ	ヨ　コ　ナ　デ	粗砂粒	〃	灰　色	灰　色	口縁部
	262	80	B－6	〃	壷　A		150			1	ロ　ク　ロ　水　挽	ロ　ク　ロ　水　挽	微砂粒	〃	暗灰色	暗灰色	口頸部
	263	79	B－4 / B－5	〃	〃					4	〃	〃	長石・雲母粗粒	〃	灰　色	〃	頸部
	264	78	C－5	〃	〃					3	〃	〃	長石粗粒	〃	〃	〃	〃
	265	106 / 107	B－6	〃	壷　C				258	4	水　挽	水　挽	長石微粒	〃	黒灰色	灰　色	肩～胴部
	266	83	B－3	〃	カ　メ					3	平行タタキ目文	青海波文	長石粗粒	〃	灰　色	〃	頸径180㎜
31	267	82	C－6	〃	〃					1.5	格子タタキ目文	〃	微砂粒	〃	緑灰色	〃	〃　30㎜
	268	88	D－4	〃	〃						格子タタキ目文・ハケメ	〃	〃	〃	薄灰色	薄灰色	肩部
	269	86	B－6	〃	〃						格子タタキ目文	同心円文	粗砂粒	〃	暗灰色	灰　色	
	270	87	C－3	〃	〃						〃	青海波文	〃	〃	灰　色	〃	
	271	90	C－6	〃	〃						平行タタキ目文	〃	〃	〃	暗灰色	〃	
	272	85	C－5	〃	〃						平行タタキ目文・ハケメ	顔面・平行タタキ目文	長石・荒砂粒	〃	薄灰色	薄灰色	
	273	84	B－5	〃	〃						〃	青海波文	長石粗粒	〃	灰　色	灰　色	
	274	89	A－4	〃	〃						格子タタキ目文	〃	粗砂粒	〃	暗灰色	〃	
	275	91	C－6	〃	〃						平行タタキ目文	〃	〃	〃	灰　色	〃	腰部
	276	66	〃	〃	坏　蓋		140			1	ロ　ク　ロ　水　挽	ロ　ク　ロ　水　挽	長石粗粒	〃	薄灰色	薄灰色	
	277	67	A－3	〃	〃		170			1	〃	〃	微砂粒	〃	灰　色	灰　色	
	278	62	C－5	〃	〃		150			2.5	〃	〃	長石微粒	〃	明灰色	明灰色	
	279	64	〃	〃	〃		140			2	〃	〃	〃	〃	灰　色	薄灰色	
	280	65	B－4	〃	〃		140			2	〃	〃	〃	〃	薄灰色	〃	
	281	69	A－4 / B－5	〃	〃					3	〃	〃	微砂粒	〃	〃	〃	
	282	68	C－5	〃	〃					1	〃	〃	石英・長石粗粒	〃	明灰色	明灰色	
	283	48	B－4	〃	坏		130			8	〃	〃	石英粗粒	中	薄灰色	薄灰色	
	284	46	〃	〃	〃	30	120	73		8	〃	〃	微砂粒	良	灰　色	灰　色	右ロクロ
	285	47	〃	〃	〃	33	130	75		7	〃	〃	長石粗粒	中	薄灰色	薄灰色	左ロクロ
	286	52	D－6	〃	〃	30	120	70～80		9	〃	〃	〃	良	明灰色	明灰色	〃　歪み
	287	50	B－4	〃	〃	32	130	70		3	〃	〃	微砂粒	中	薄茶色	薄茶色	
	288	54	D－6	〃	〃	31	120	65		5	〃	〃	長石粗粒	〃	灰　色	灰　色	左ロクロ
	289	58	B－5	〃	〃	29	140	80		2	〃	〃	微砂粒	〃	薄灰色	薄灰色	
	290	51	B－4	〃	〃	29	125	69		5	〃	〃	長石粗粒	良	明灰色	明灰色	右ロクロ

挿図No.	割付No.	遺物No.	出土位置	種別	器種	計測（mm） 器高	口径	底径	最大径	残存円周率 0/12	造り 器表	造り 器内	胎土	焼成	色 器表	色 器内	備考
31	291	59	A－4	須恵器	坏	28	135	85		3	ロクロ水挽	ロクロ水挽	微砂粒	中	白灰色	白灰色	
	292	57	D－4	〃	〃	34	130	80		6	〃	〃	〃	良	薄灰色	薄灰色	左ロクロ
	293	60	C－6	〃	〃	33	130	80		3	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	
	294	53	D－6	〃	〃	32	120	90		5	〃	〃	荒砂粒	〃	暗灰色	暗灰色	左ロクロ
	295	55	B－3	〃	〃	34	118	72		5	〃	〃	微砂粒	〃	灰色	灰色	
	296	56	〃	〃	〃			80		4	〃	〃	粗砂粒	〃	〃	〃	
	297	61	C－6	〃	〃			100		2	〃	〃	石英粗粒多	〃	〃	明灰色	五頭山系
32	298	73	D－5・6	〃	大碗		160			4	〃	〃	微砂粒	〃	薄灰色	薄灰色	口縁～胴部
	299	74	D－6	〃	〃		140			1.5	〃	〃	〃	〃	暗灰色	灰色	口縁部
	300	75	B－4	〃	〃		140			1	〃	〃	〃	〃	薄灰色	薄灰色	〃
	301	77	〃	〃	〃		120			1	〃	〃	〃	〃	灰色	暗灰色	〃
	302	71	D－6	〃	〃			90		3	〃	〃	長石粗粒多	〃	〃	灰色	伏せ焼き
	303	72	B－2	〃	〃			80		4	〃	〃	〃	中	薄灰色	薄灰色	
	304	76	B－3	〃	小碗		110			1.5	〃	〃	微砂粒	良	〃	〃	口縁部
	305	70	C－3	〃	〃			55		7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	左ロクロ
	306	2025	B－6	中世陶器	壺A					細片	平行タタキ目文	当て具痕	長石・石英微粒	〃	灰色	灰色	胴部
	307	2026	C－6	〃	〃					〃	〃	ヘラ調整	長石微粒	〃	〃	〃	〃
	308	2028	B－6	〃	〃					〃	〃	〃	長石粗粒	〃	〃	〃	〃
	309	2027	C－5	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	310	2023	C－6	〃	鉢					5	ロクロ水挽	摺目	長石・雲母微粒	〃	暗灰色	〃	底部
	311	2024	〃	〃	〃					5	静止糸切	ロクロ水挽	〃	〃	〃	暗灰色	〃
	312	2014	〃	〃	〃					細片	ロクロ水挽	摺目	長石微粒	〃	〃	〃	口縁部
	313	2015	B－4	〃	〃					〃	水挽	水挽	長石微粒・礫混	〃	白灰色	白灰色	〃
	314	2016	〃	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	315	2018	C－5	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	灰色	暗灰色	胴部
	316	2019	B－4	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
	317	2017	C－5	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	灰色	灰色	〃
	318	2021	D－4	〃	〃					〃	〃	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
	319	2020	C－6	〃	〃					〃	〃	〃	石英・長石微粒	〃	〃	灰色	〃
	320	2022	C－5	〃	〃					〃	ヘラ調整	〃	長石微粒	〃	〃	暗灰色	底部
	321	2106	B－4	土垂		(86×54)							荒砂多	不	黄白色		270g
	322	2108		木炭		(27×φ9)											雑木枝
	323	2107	D－6	石	石斧	(44×21×5)									黒色		流紋岩
	324	2105	B－5	〃	砥石	(45×36×24)											
	325	2104	B－4	〃	〃	(82×55×36)											
	326	2102	A－5	〃	〃	(53×39×27)											
	327	2103	B－5	〃	〃	(45×42×22)											
	328	2110		軽石		(63×43×17)											天然石
	329	2109	C－5	〃		(82×60×35)											

Ⅳ　ま　と　め

1　出土遺物と遺構

出土遺物は土師器と須恵器、時代を異にする中世陶器とである。前章では実測による復元図及び計測、造り、胎土、焼成状態を示した一覧表を用いて示して来た。ここでは数量的比率やその年代観についてふれておこう。土師器、須恵器共にその個体数を把握することは極めて困難な問題である。個体数に近い量を実測し、紙面の都合からその内の幾点かを削除したが図示した数がおゝよその個体数に近似するものと考えておきたい。これらの数量と総破片数による器種の比率を表示した。

個体数に見る土師器と須恵器の総数はほゞ同数である。それぞれの器種の内土師器の甕類54点と埚42点は主として煮沸具でありその合計96点になる。一方須恵器の壷類と甕は主として貯蔵用器であり、その合計62点程を数える。碗・坏・皿類は言うまでもないことだが供膳具である。これらの比率は土師器が52点、須恵器が64点でやゝ多いことが分る。総破片数の比較では土師器の甕類、埚類の胴部破片が多量となり、比較が難かしい。

土師器と須恵器の比率はその時期的に大きく左右されることが知られつつある。またここに見られる土師器、須恵器のそれぞれの器形に於ける特徴から土師器は９世紀に主体をおき、中葉から後半に位置付けられるものであろう。一方須恵器はやはり９世紀の所産と見られるが、中葉から、初頭、さらに８世紀末葉に位置付けることができる。検出された須恵器の供給はその多くが新津丘陵地が考えられ、一部には五頭山麓古窯址群の製品、及び佐渡小泊窯址群のものも見ることができ、広範囲からの供給が見られる。

中世陶器はその総数が鉢18点、壷Ａ類９点の他カワラケ１点で少量である。これらはＳＤ１号溝の覆土中の検出と遺構外出土が多い。またカワラケはＳＥ３号遺構の出土であるが、ＳＤ１号出土のものと共に流入したものと考えられ、ＳＫ５号の水輪出土の遺構以外は総て古代即ち８～

表２　出土遺物器種比率表

土師器	甕Ａ	甕Ｃ	碗	坏	皿	埚	計
個体数	27	27	28	22	2	42	148
%	18.2	18.2	18.9	14.8	1.3	28.3	
破片数	27	480	344	22	2	242	1117
%	2.4	42.9	30.7	1.9	0.1	21.6	

須恵器	壷類	甕	碗	坏類	坏蓋	横瓶	計
個体数	14	46	11	53	13	2	139
%	10.0	33.0	7.9	38.1	9.3	1.4	
破片数	23	87	16	212	32	2	372
%	6.18	23.3	4.3	56.9	8.6	0.5	

9世紀の遺構であろう。またＳＫ５号そのものが水輪の年代である中世後半のものとは考えられず、この地の砂丘削平時点の近世或は現代の坑と考えられものである。五輪塔の起源は供養塔であるが、中世以降は主として墓標である。ある年月を経て分散した五輪の一輪を禁忌のものとして土中に埋没させたものであろう。これらの中世の遺物は当調査範囲内に於ては遺構を伴なわないが、陶器類はおゝよそ14世紀の後半に位置付けられ、水輪は前述した如く15世紀前葉の所産であろう。

2　お　わ　り　に

当調査は報告した如く狭い範囲のものであり、出土遺物もまた限られたものであった。これに隣接する地域を発掘調査した第１次調査の報告書に依れば（渡辺・1991）、「平安時代・中世のものが圧倒的に多い……７世紀末～８世紀初頭といわれるかえりのある須恵器坏蓋……」とこの遺跡が年代幅のあることを指差している。また中世に於ては「時期幅は13世紀から16世紀まで……」とあり、また13～15世紀の舶載陶磁器、15～16世紀の瀬戸、美濃の製品など多彩の報告がある。この第１次調査地点の西側に拡大に広がる中の山遺跡（川上・1982）も荒木前遺跡に続く同一遺跡と考えているが、ここでも古代、中世の遺構が混在した。ここでは特に中世に於ける人工の用水路が、言わゆる運河的役割を持って配置されていたことが認められ、中世の流通都市を感じるものであった。

『温古之栞』（温古談話会1892）によれば「金津荘城所手代山に古城跡あり、弧主せし小山の頂上凡二千坪平坦にて井壷空壕の痕幽に見ゆ、元享年中（1321～1323）国の守護職北条家に於て蒲原沖日水手代山に棚を構ふと古書に見ゆるは此処なるべし、近辺に日水の地名もあり永禄年中（1558～1569）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。天正年中（1573～）主家跡継争のをり景虎に属せしを以て景勝方に攻られ一族郎等を随へ北蒲原郡五頭山の山入村杉地方の民間に入り……」とあり、少なくとも14世紀には在地領主層の拠点となっていたことが知られる。

調査区南側に検出された道路遺構は第１次調査地域でその報告を見ないが、古代に於る道である。おそらく古代に於けるこの遺跡の南端に沿って作られていた街道であろう。当遺跡は第１次調査区域及び中の山遺跡とした範囲、さらに北方の貝塚遺跡までも広がり、およそ12町歩（12ha）もの広がりを見る大遺跡と考えられる遺跡である。

当遺跡の旧地表面の標高は僅かに1.3～1.5mである。そして市街地の北西に延びる水田面ではマイナス50cm前後での遺物検出が稀ではない。この遺跡が古い砂丘の微高地に営まれていたことは言うまでもないことであるが、巻頭に記した周辺の多くの遺跡が山通りと呼ばれている砂丘列上に位置し、そしてその遺跡名の多くに○○山と山の字が付く。蒲原地域の遺跡とその立地を示す遺跡群のひとつである。

当調査は限られた時間のもとで行わざるを得ないものであった。従って整理、研究共に不備な

点のあることを反省している。現地調査から本書発刊まで御指導下さった多くの方々、物心両面に亘る御援助を下さった㈱みのり不動産、㈱協同管理センター、亀田町教育委員会の方々に記して謝意を示すものである。

1996. 3. 9

川 上 貞 雄

引用・参考文献

温古談話会　1892；温古之栞，第32編

川上貞雄　1982；中の山遺跡，亀田町教育委員会

川上貞雄　1993；山ん家遺跡，横越村教育委員会

酒井和男　1980；三王山遺跡，亀田町教育委員会

酒井和男、他　1987；大江山地区の遺跡，新潟市教育委員会

新潟県　1980；新潟県遺跡地図，新潟県教育委員会

渡辺ますみ　1991；荒木前遺跡，亀田町教育委員会

1

2

3

1　発掘調査前　　2・3　発掘調査スナップ

図版 2

1

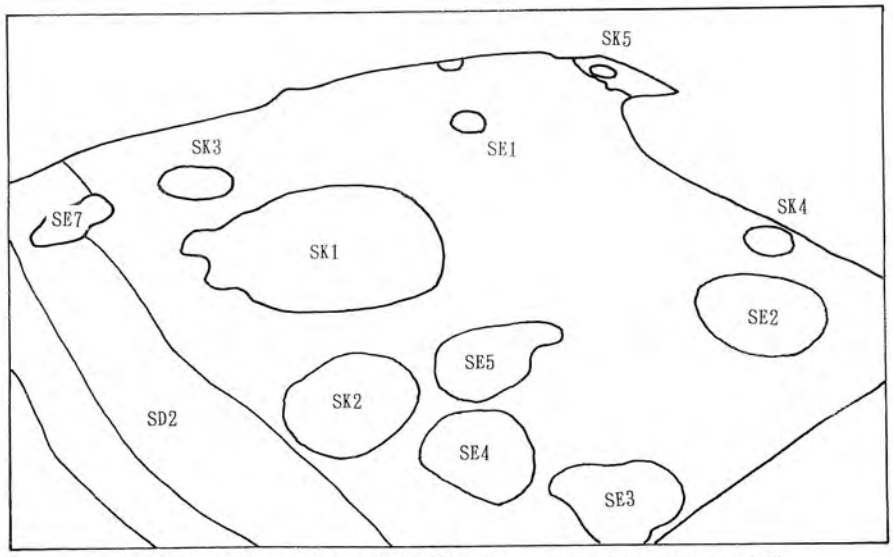
2

3

1　1号溝の調査　　2　3号溝とピット群の調査　　3　井戸の調査

1

2



遺跡全景　1　南側　道路遺構と溝　　2　北側　井戸と土坑

図版 4

1

2

3

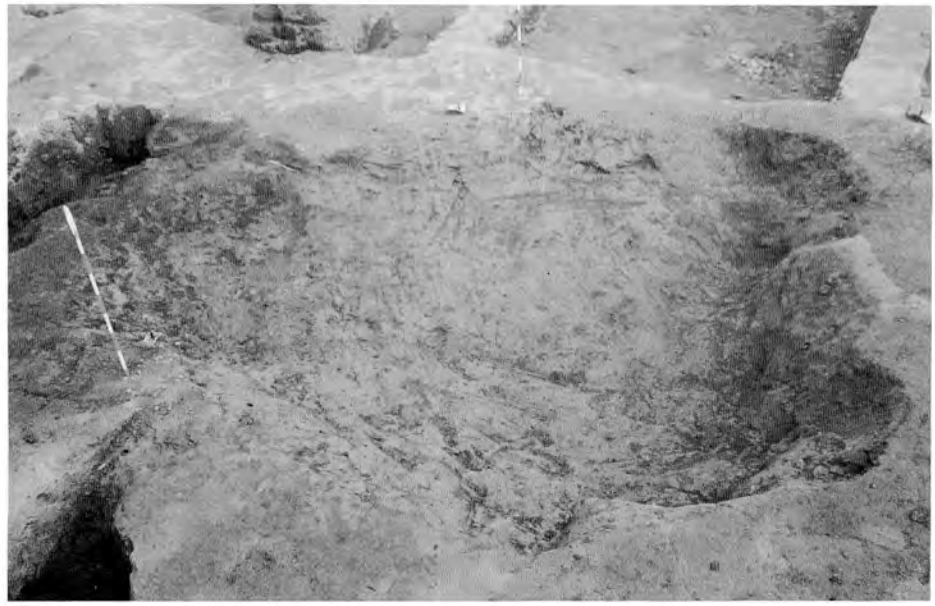
1　1号溝（南側より）　　2　同スナップ（北側より）
3　2号溝（北側より）

1・2　1号井戸　　3　2号井戸　　4　3号井戸
5　4号井戸　　6　5号井戸　　7　6号井戸　　8　7号井戸

図版 6

1

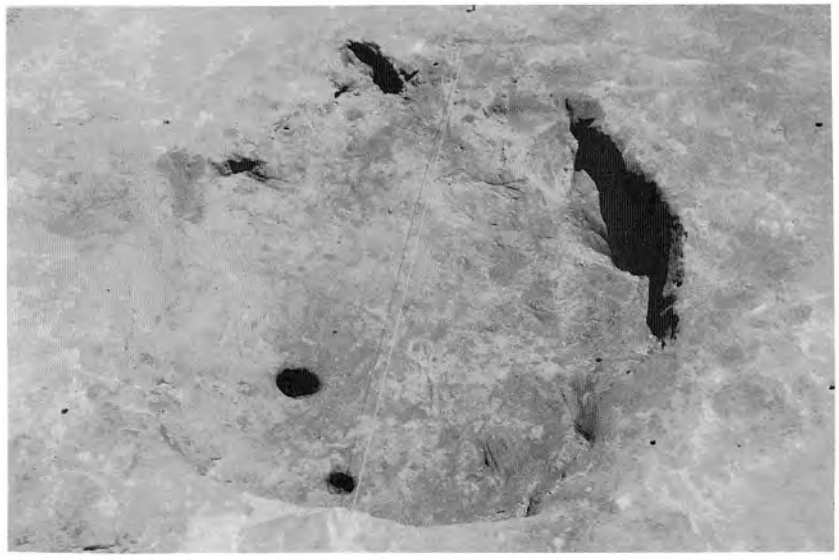
2



3

1・2　1号土坑　　3　2号土坑

1



2

3

1　3号土坑　　2　4号土坑　　3　5号土坑

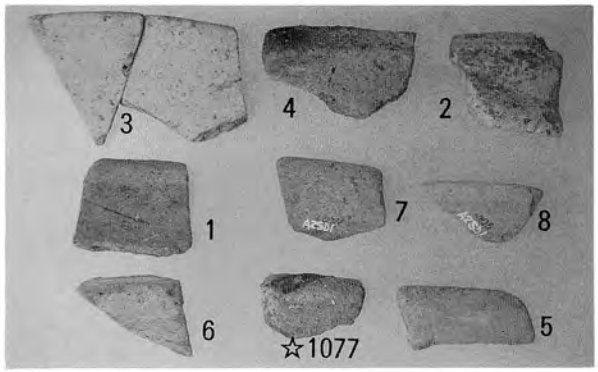
図版 8

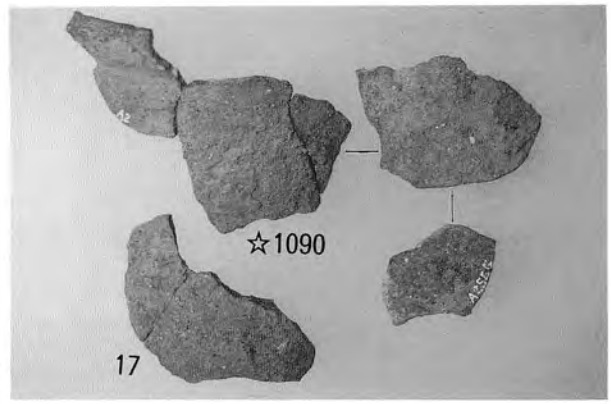
1

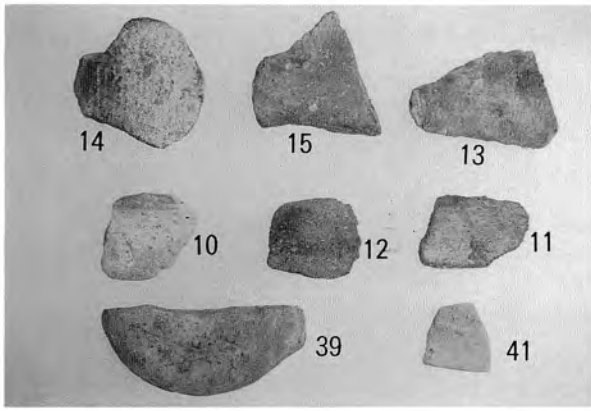
2

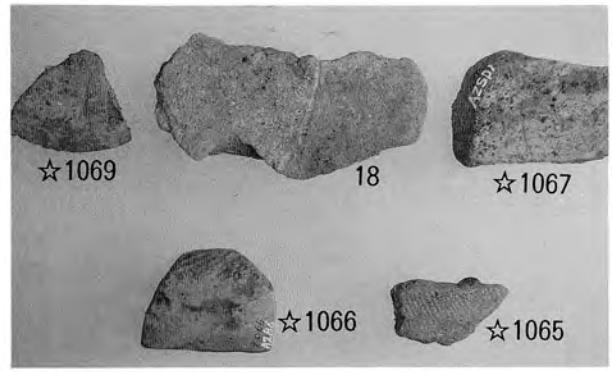
3

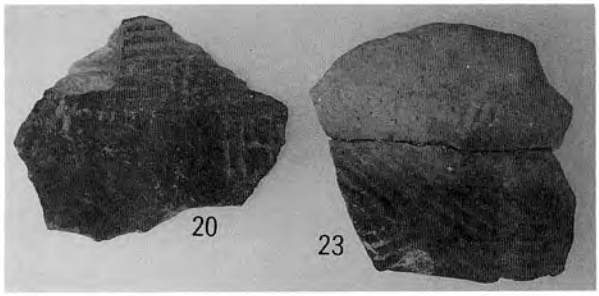
遺物出土状況　1　遺構外　2　2号土坑　3　5号土坑

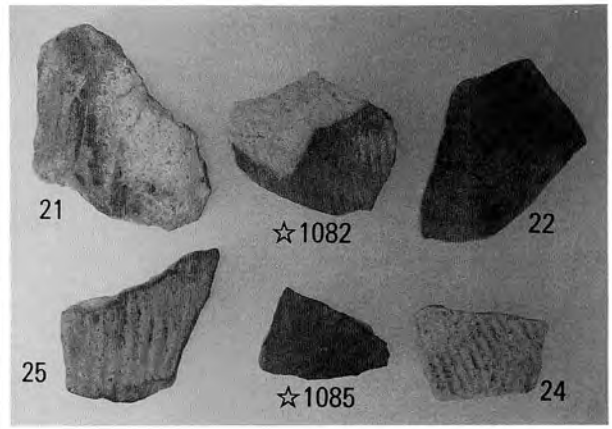

3
4
2
1
7
8
6
☆1077
5

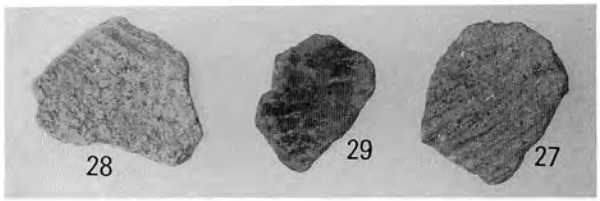

☆1090
17

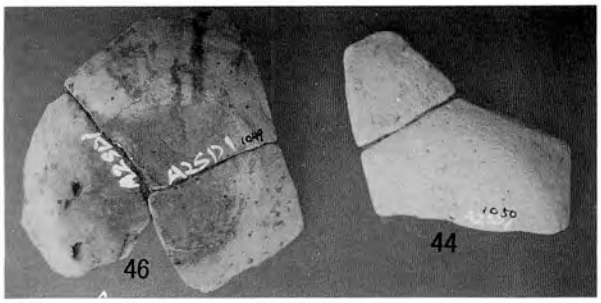

14
15
13
10
12
11
39
41

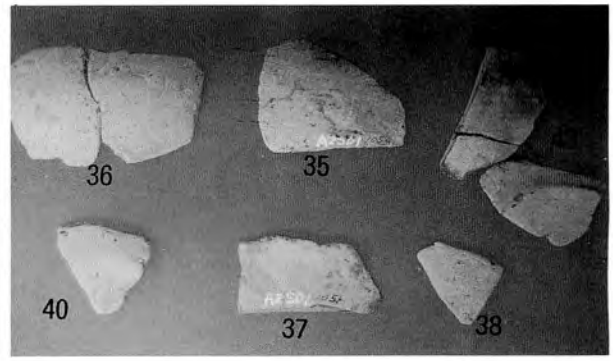

☆1069
18
☆1067
☆1066
☆1065


20
23

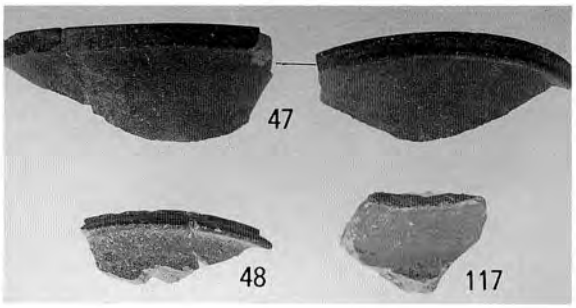

21
☆1082
22
25
☆1085
24

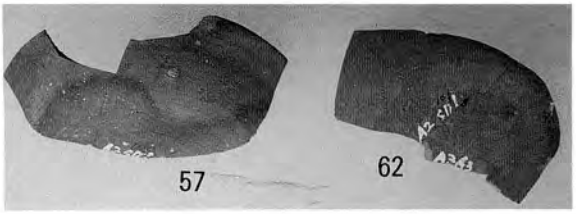

28
29
27

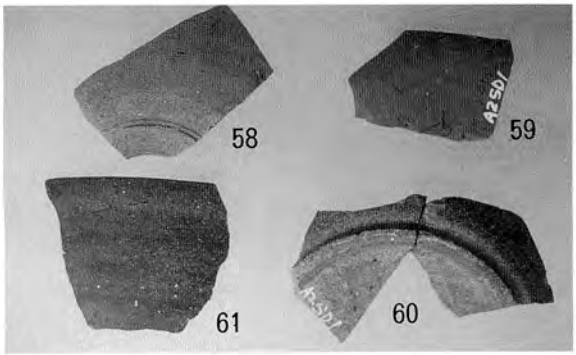

46
44

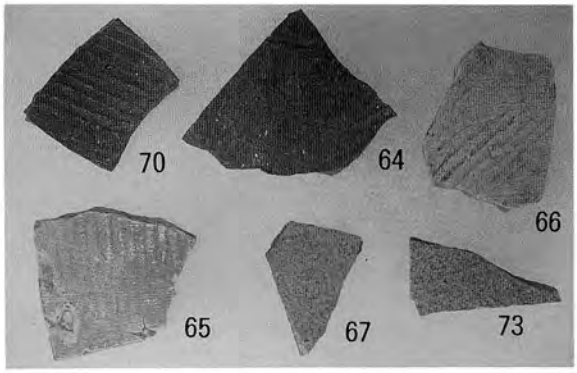

36
35
40
37
38

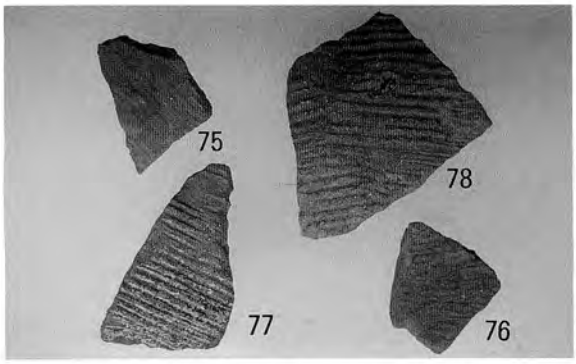
出土遺物 1　　1 号溝出土

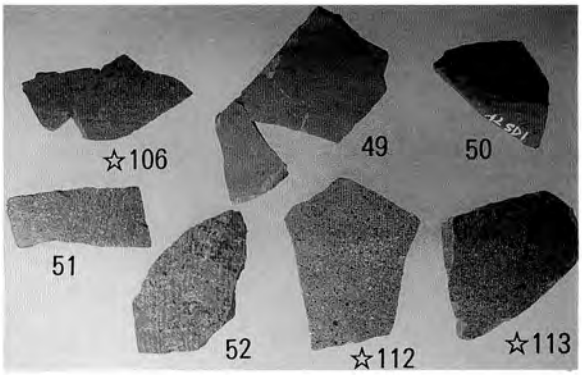


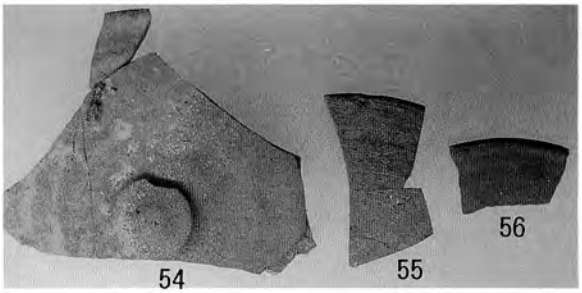


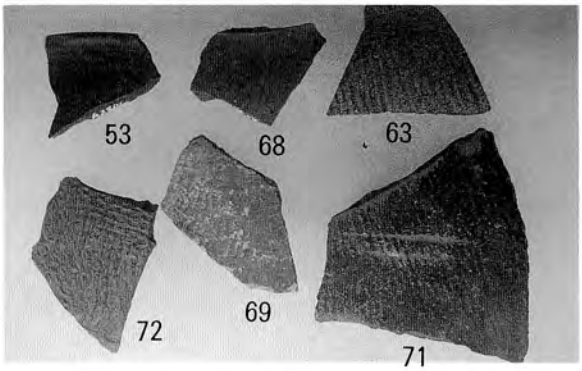


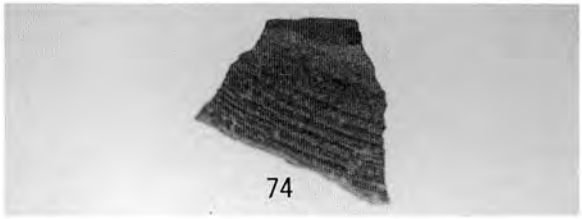


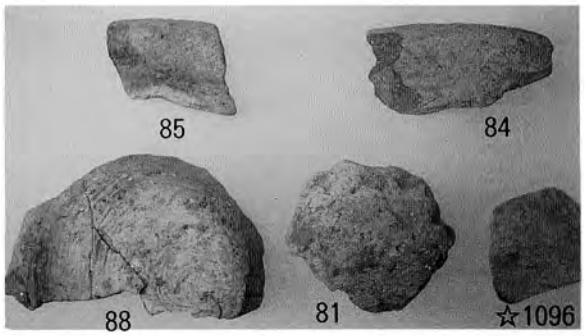




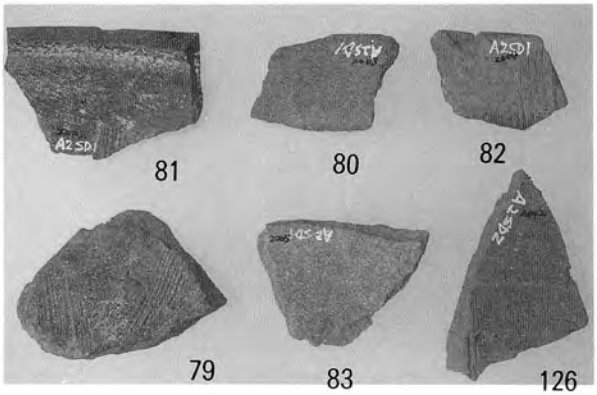


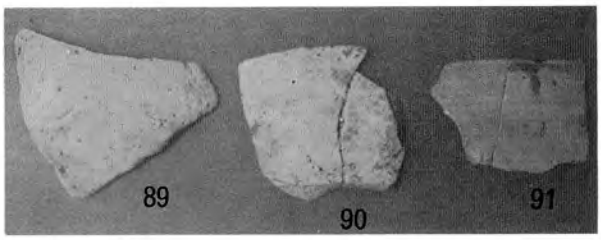


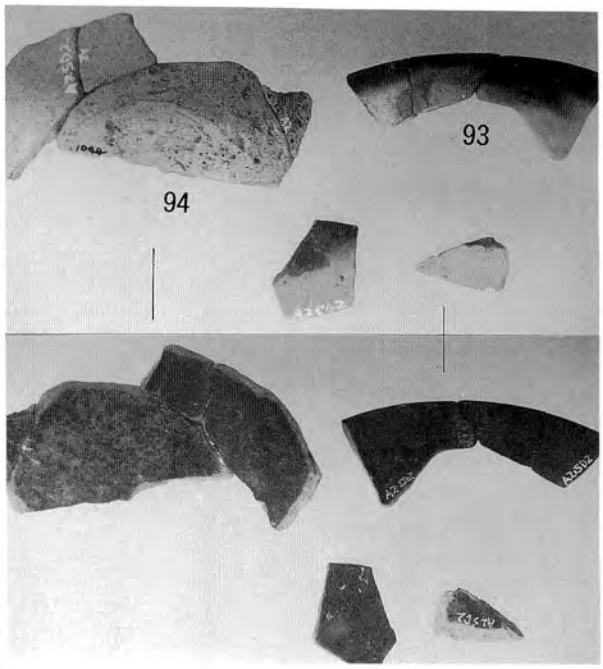


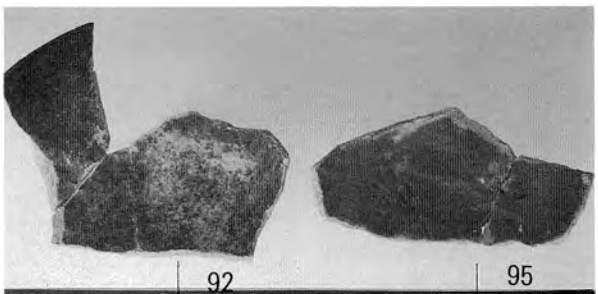


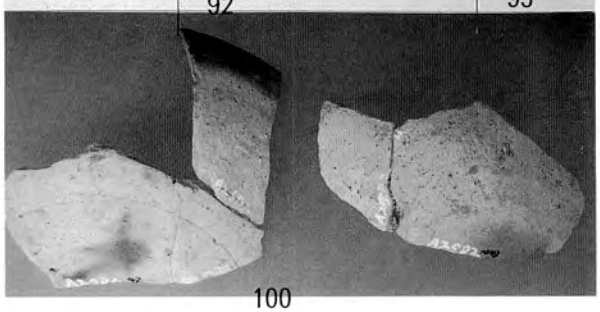
出土遺物２　47～78　１号溝出土　　84～88　２号溝出土

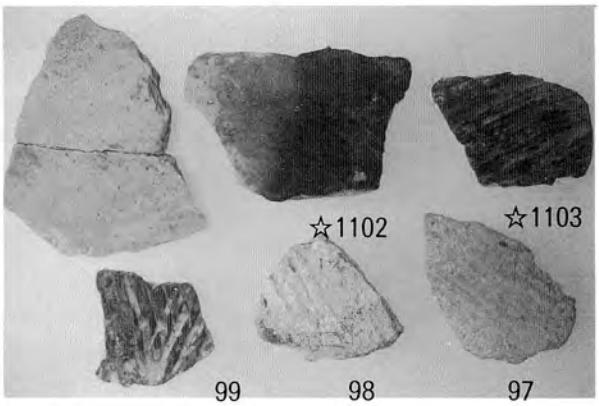


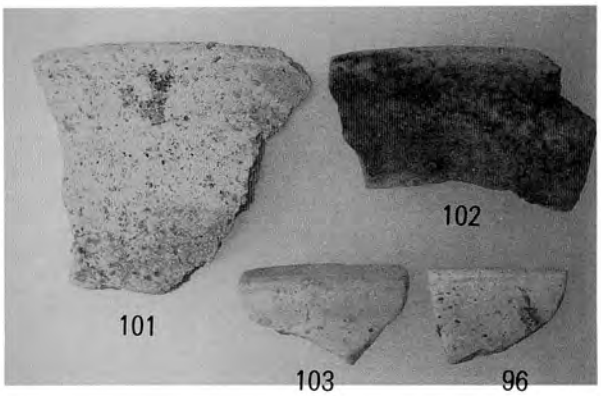


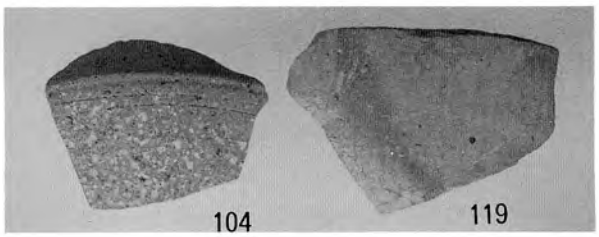


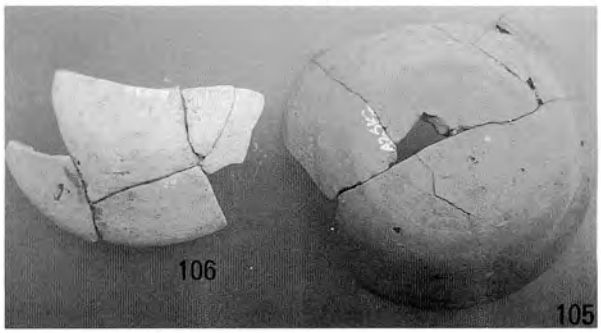




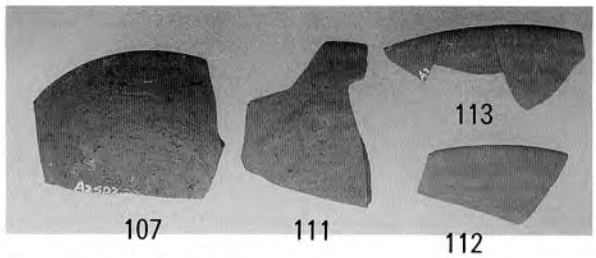


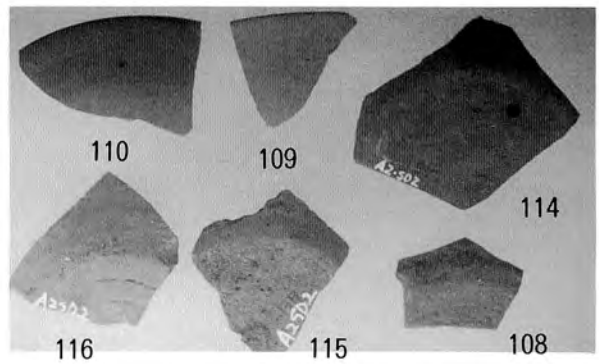


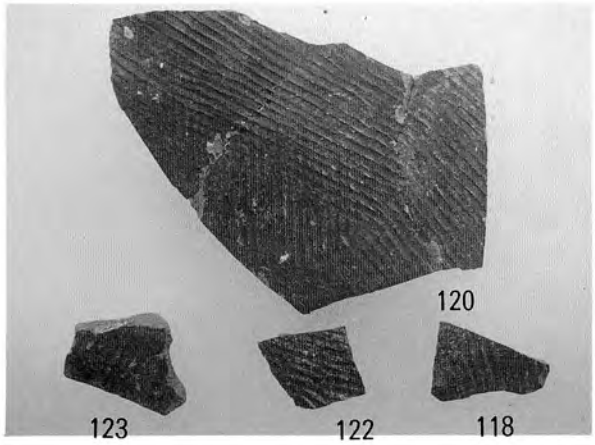


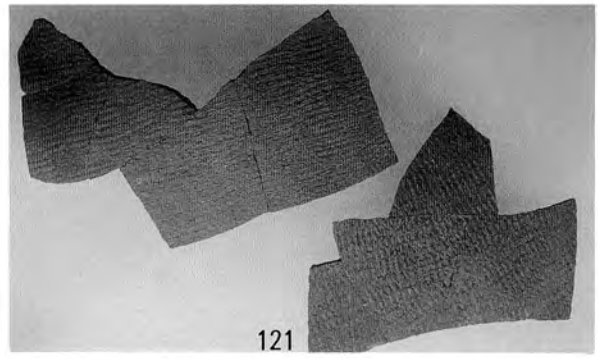


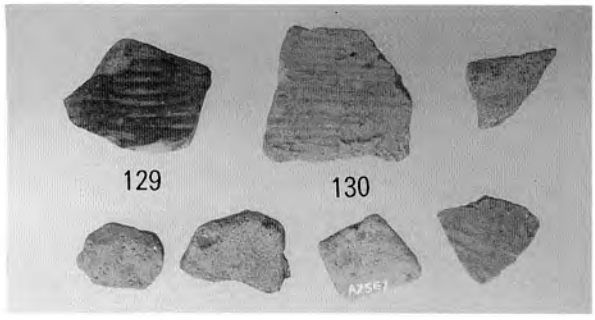
出土遺物３　　79～83　１号溝出土　　89～119　２号溝出土

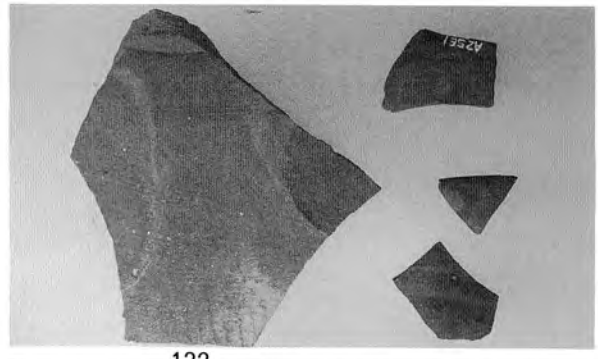


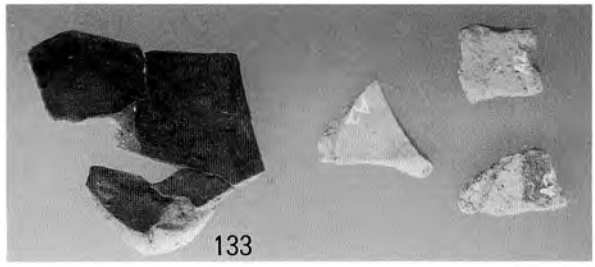


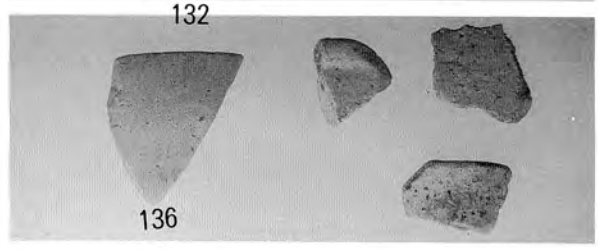


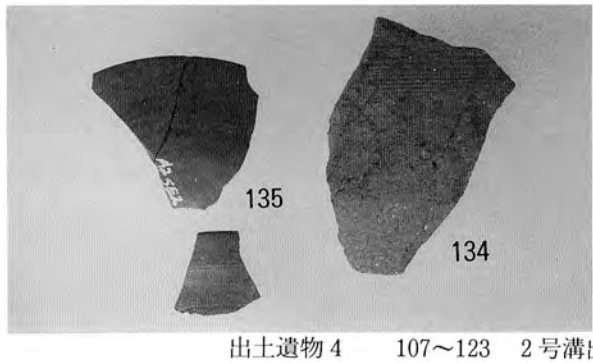


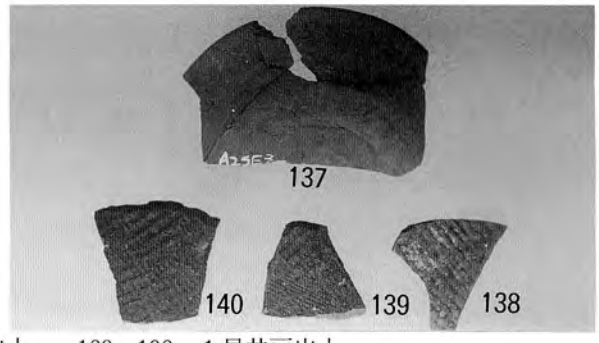




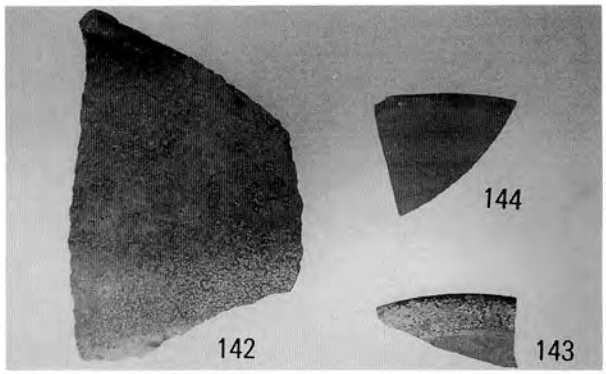


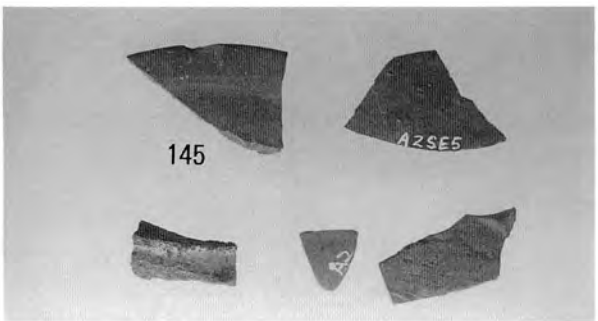


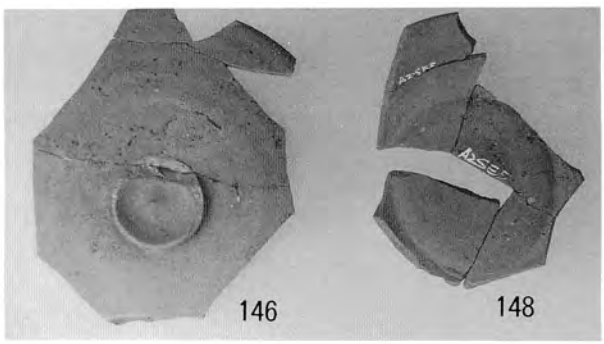


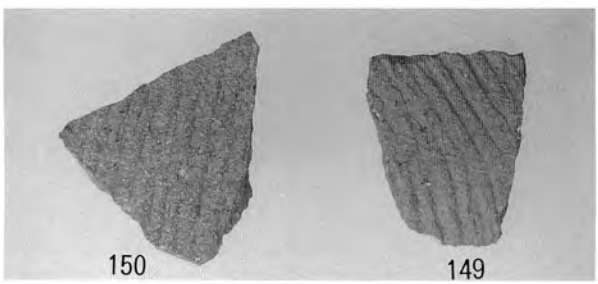


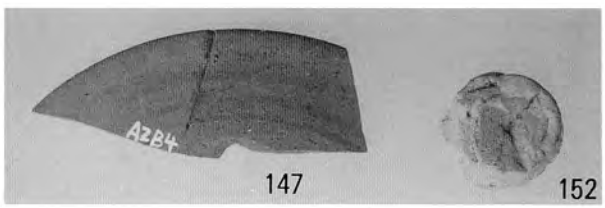
出土遺物 4　　107～123　2 号溝出土　　129～132　1 号井戸出土
133～135　2 号井戸出土　136～140　3 号井戸出土

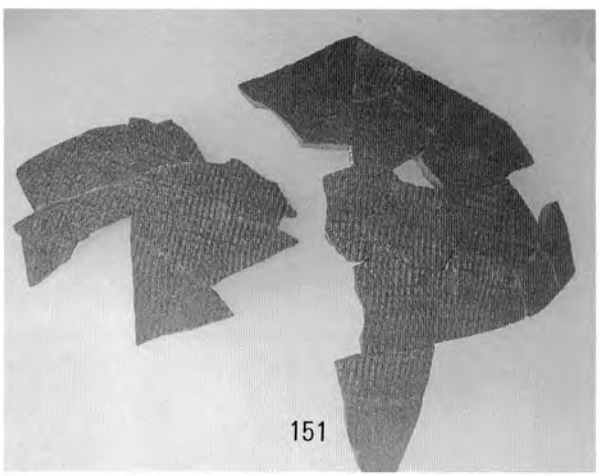


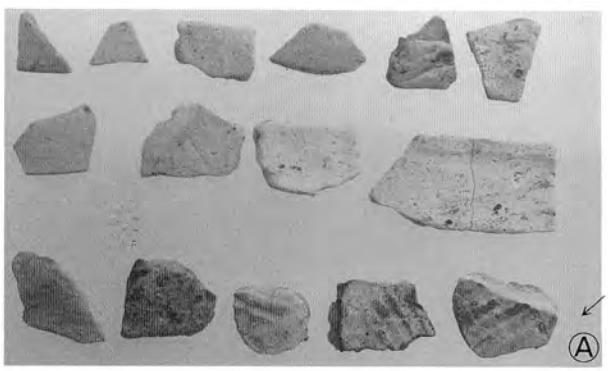


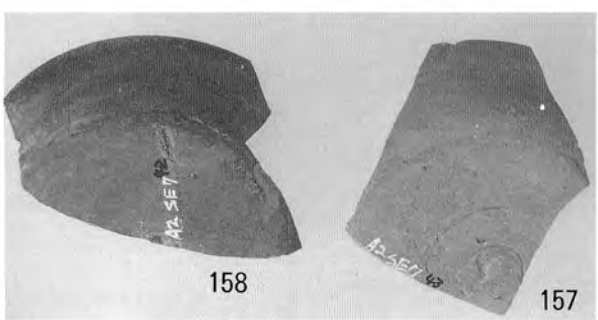


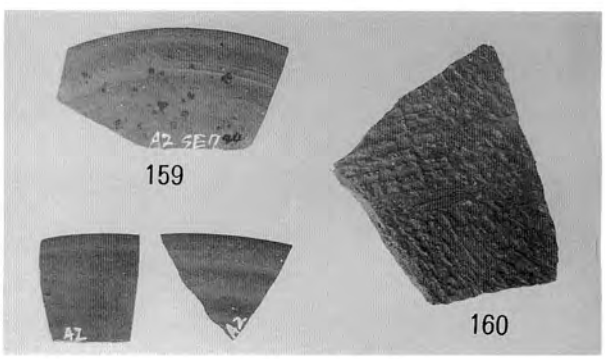




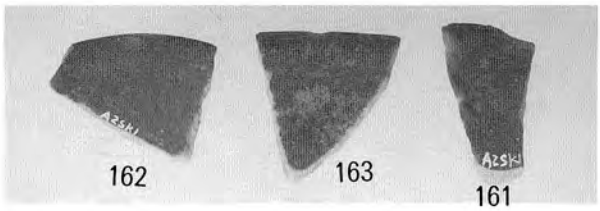


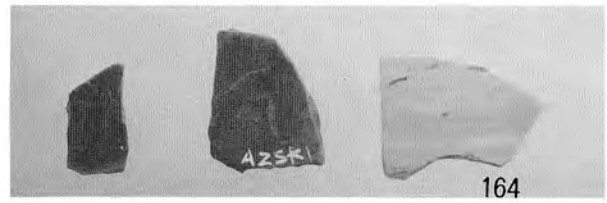


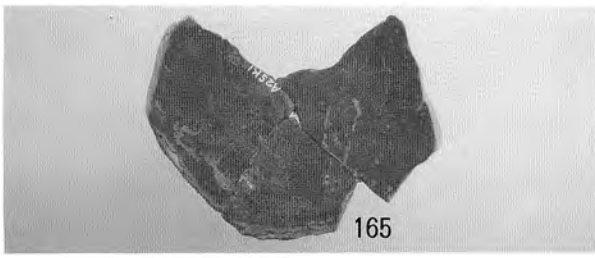


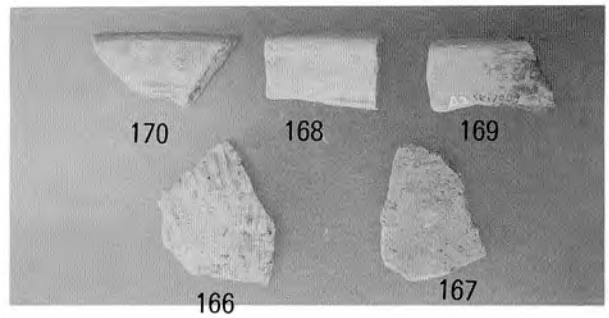


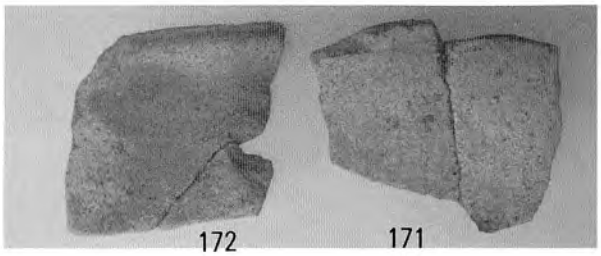
出土遺物５　141　３号井戸出土　　142・143　４号井戸出土　145～152　５号井戸出土
A印　５号井戸出土　　157～160　７号井戸出土

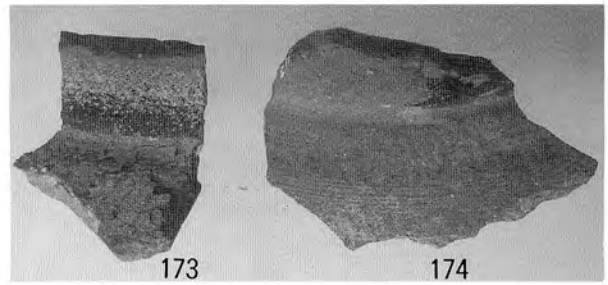


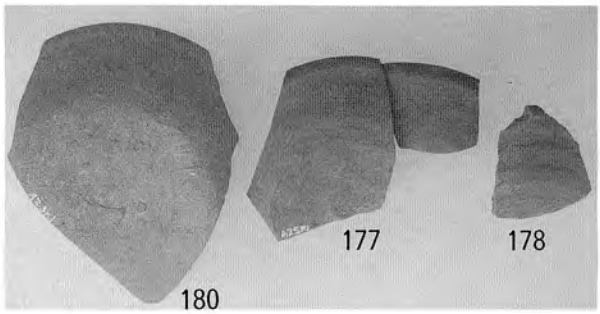


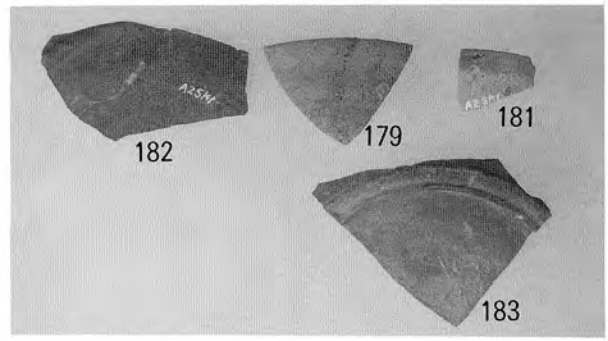


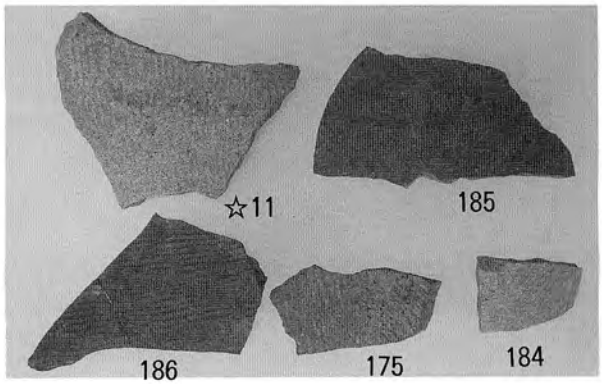


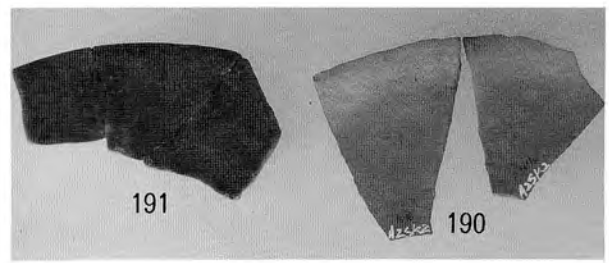




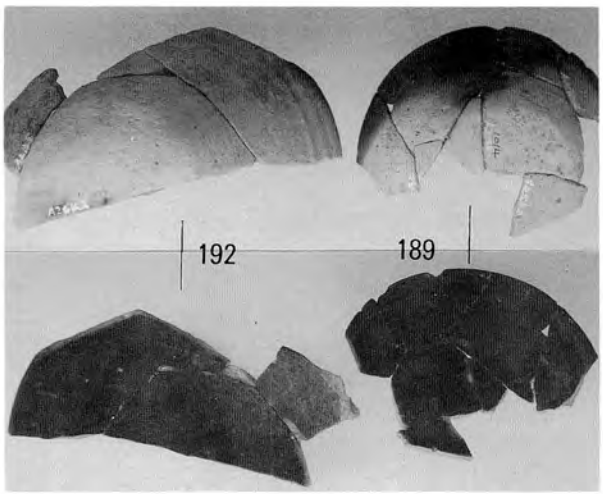


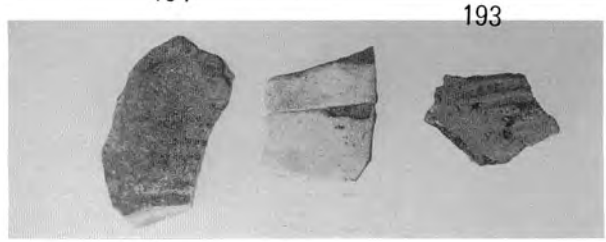


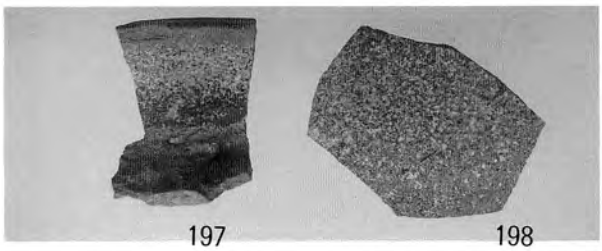


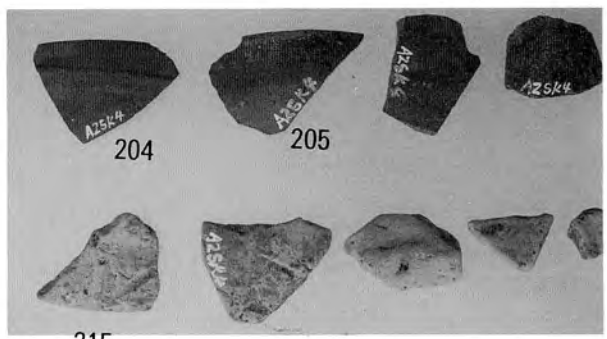


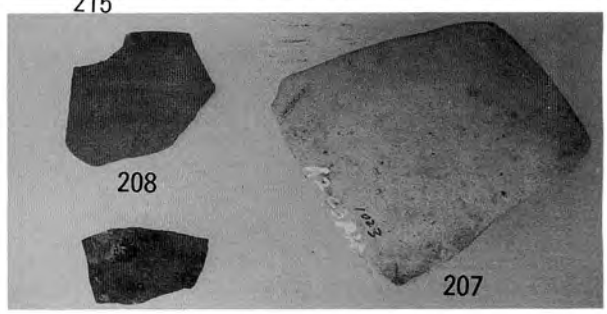
出土遺物6　161～186　1号土坑出土　　190・191　2号土坑出土



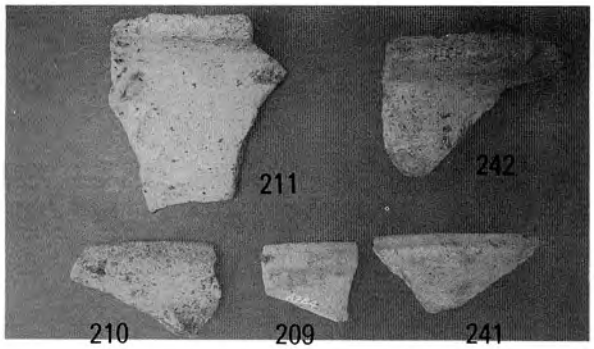


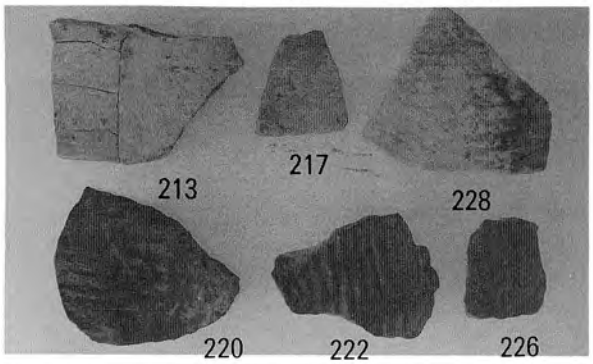


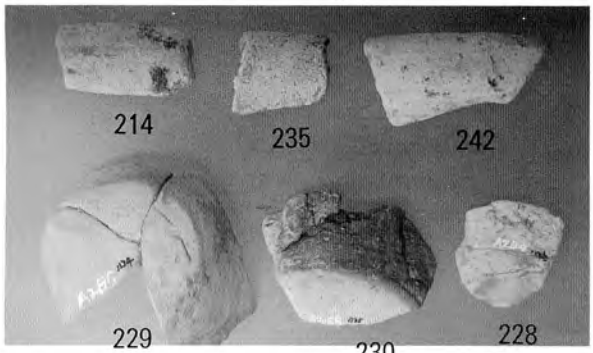


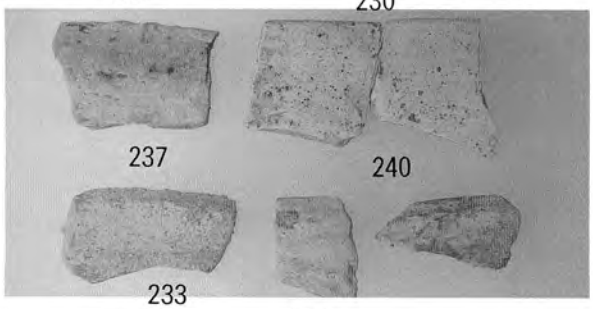


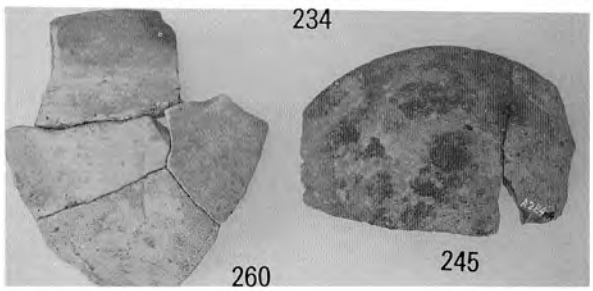
出土遺物７　189～202　２号土坑出土　　203　３号土坑出土　　204・205　４号土坑出土
206　５号土坑出土　　207・208　ピット出土

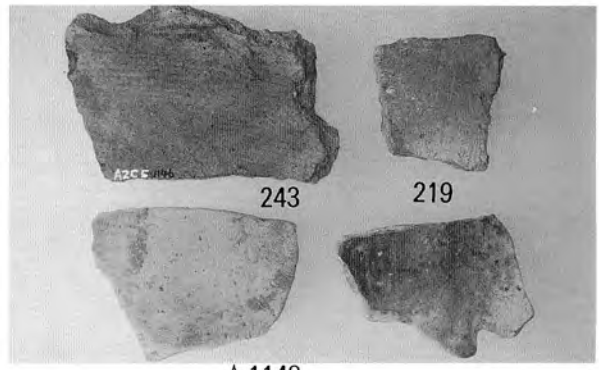


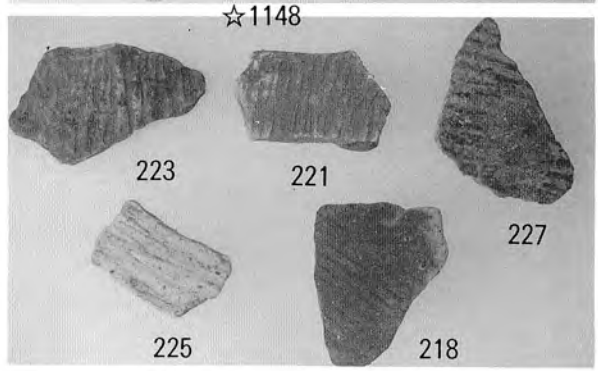


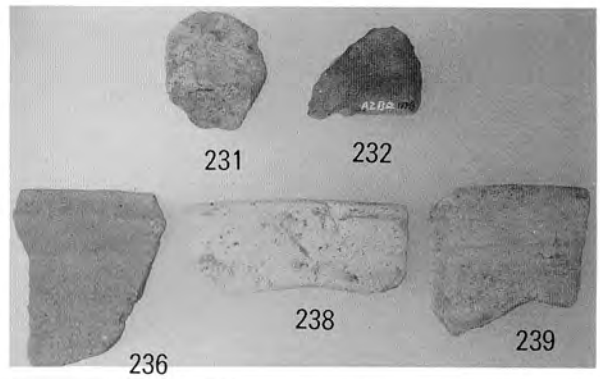


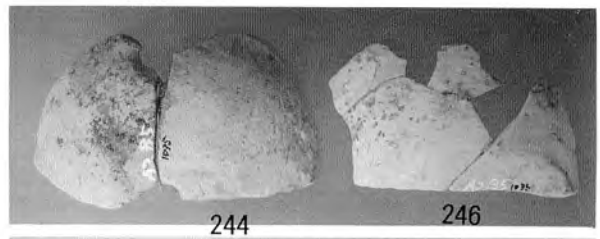


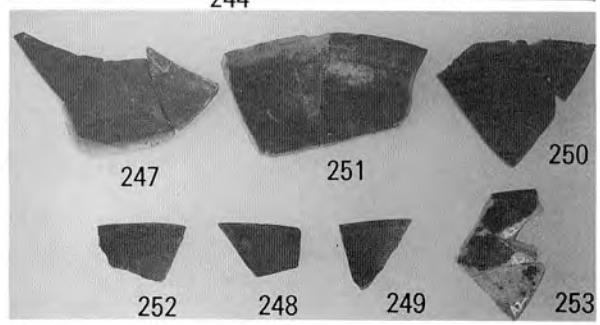




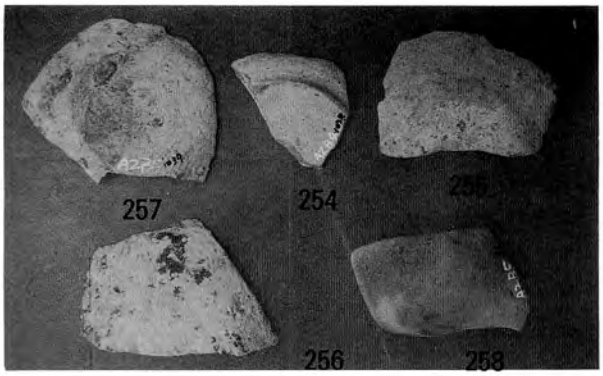


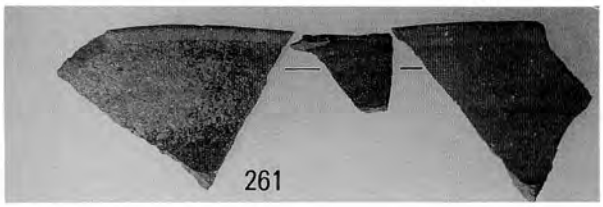


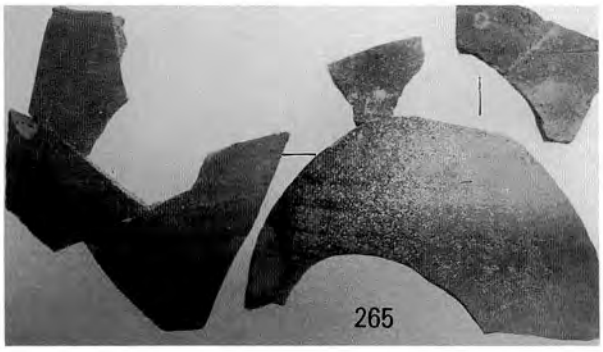


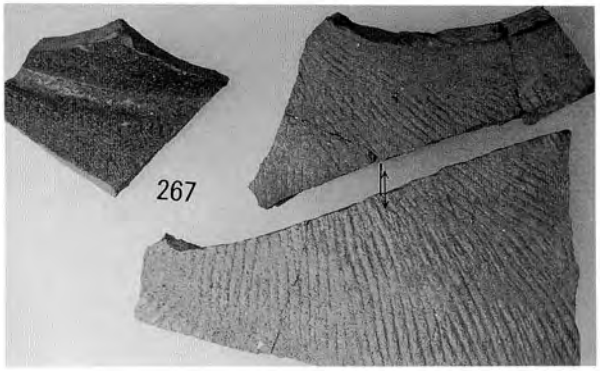


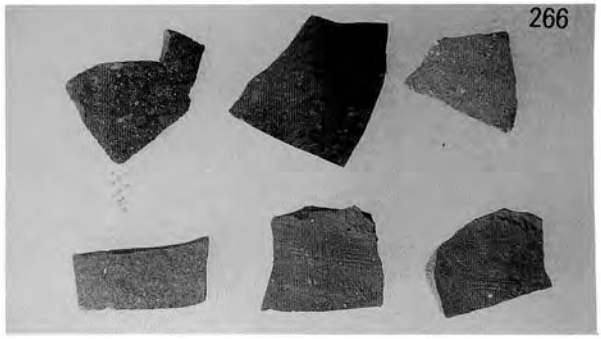
出土遺物8　各グリット出土土師器

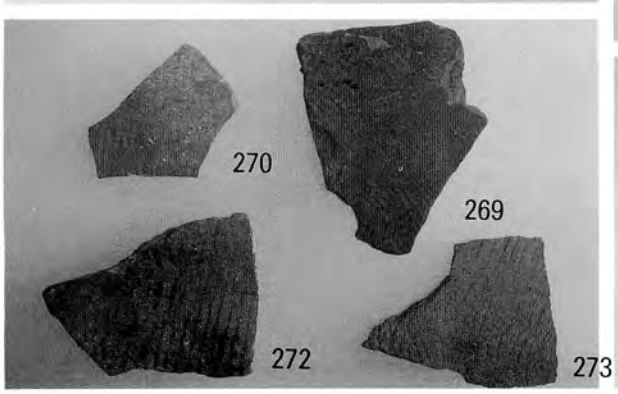


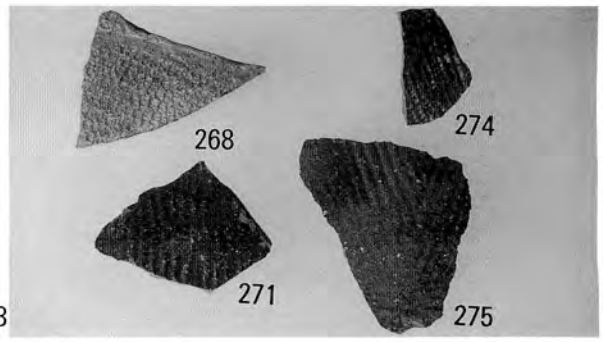




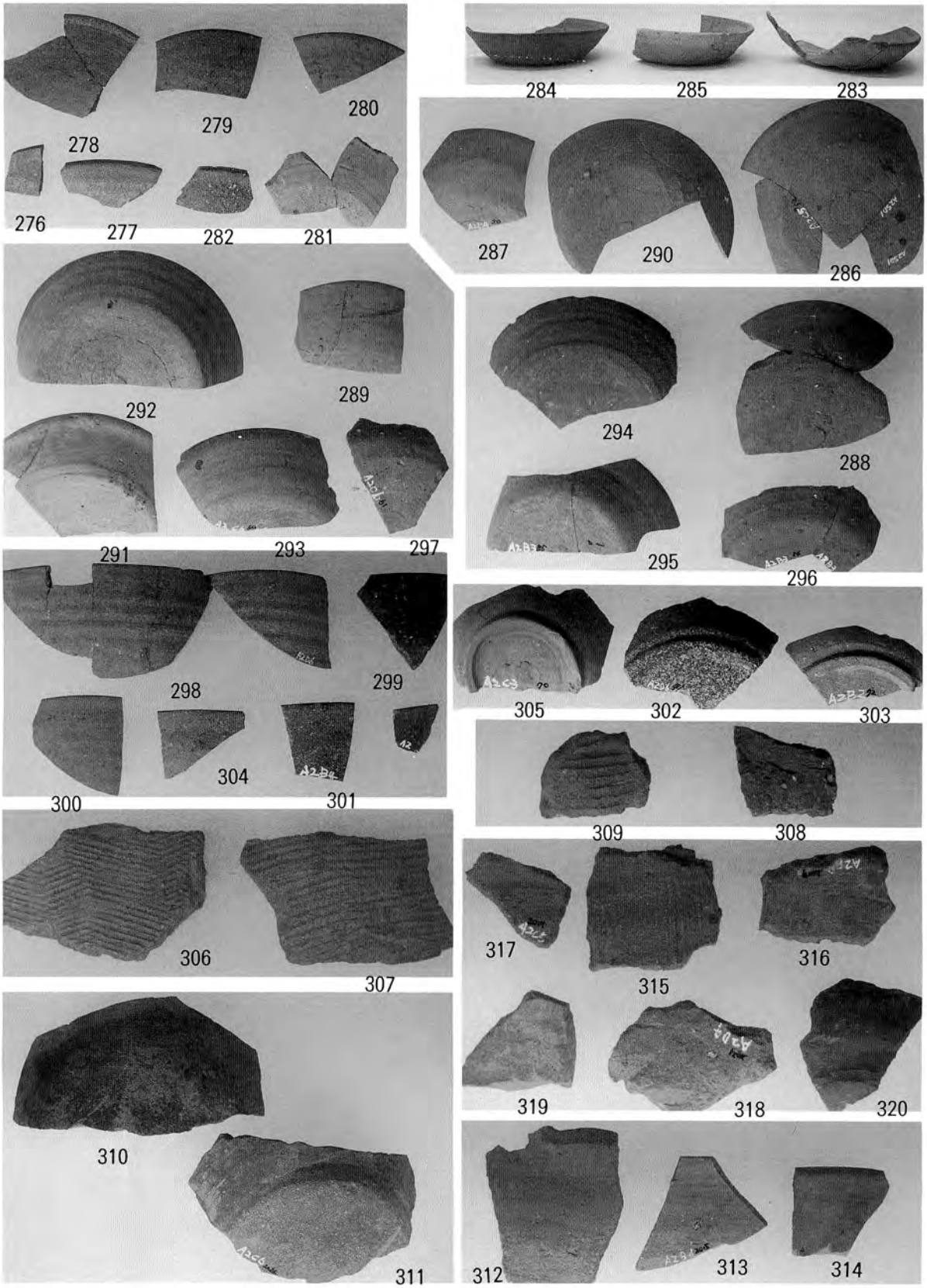




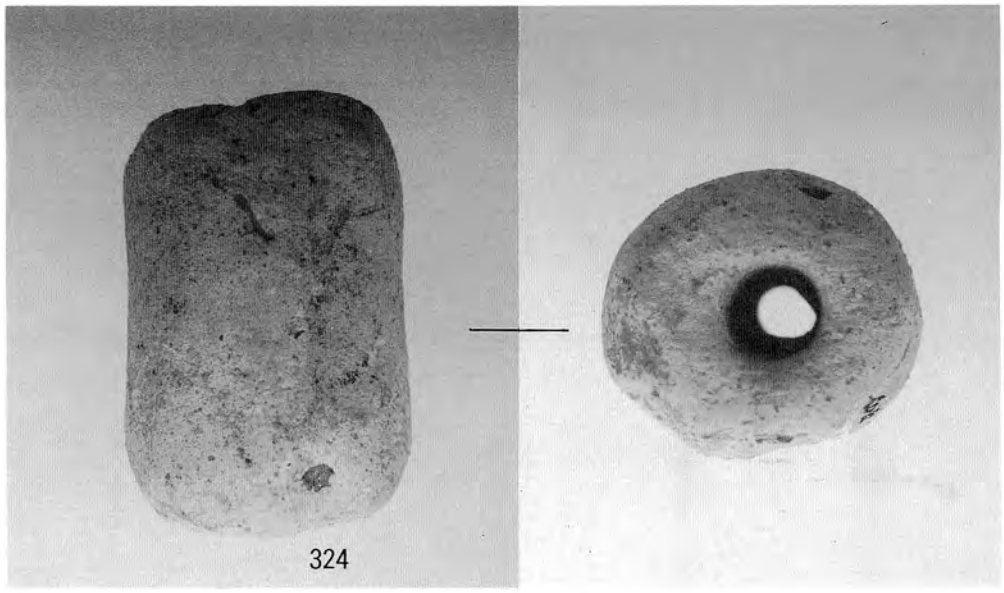


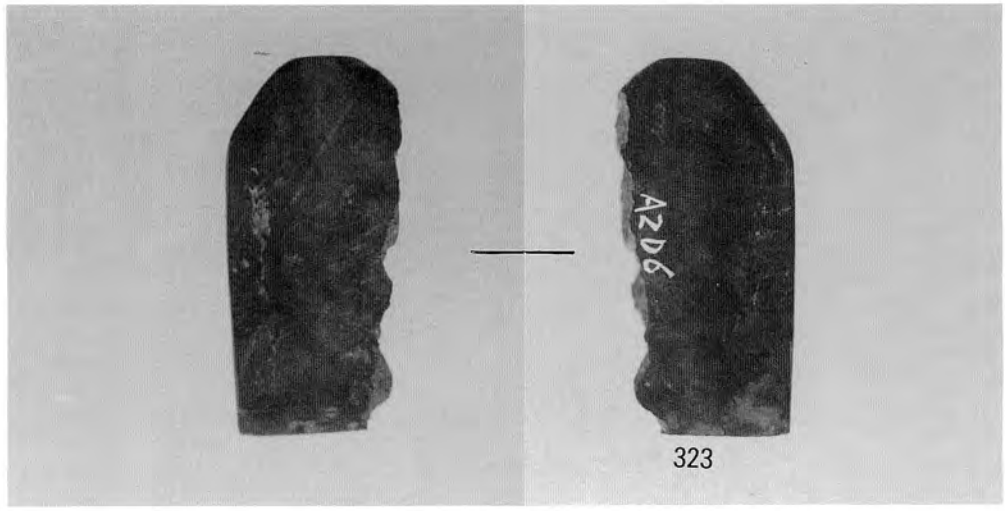


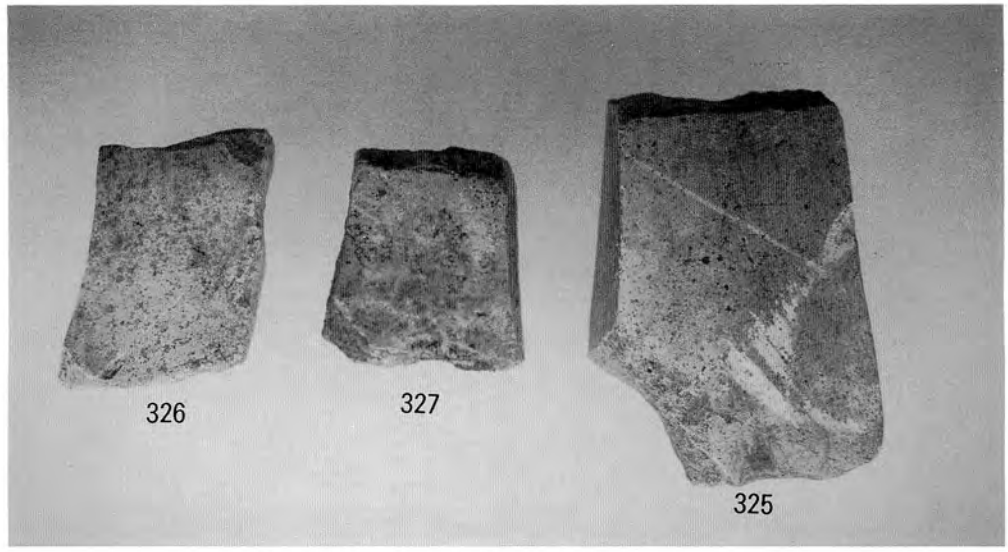
出土遺物9　各グリット出土土師器・須恵器



出土遺物10　各グリット出土須恵器・中世陶器







出土遺物11　各グリット出土土製品・石製品

亀田町文化財調査報告書　第４集

荒 木 前 遺 跡

第２次調査

新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書

１９９６年 ３ 月２９日発行

発行　亀田町教育委員会
新潟県中蒲原郡亀田町泉町３丁目４番５号
電話（025）381－2111番

印刷　有限会社　亀田プリント社
新潟県中蒲原郡亀田町亀田工業団地１－２－５
電話（025）382－4601番